
国連地球統一政府（第 1 1 3 回コスモス文学新人奨励賞受賞）

高山博通

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

国連地球統一政府（第113回コスモス文学新人奨励賞受賞）

【Nコード】

N9978K

【作者名】

高山博通

【あらすじ】

浦賀に宇宙人がやってきた。世界は騒然とし、地球全土で宇宙人排斥運動が巻き起こる。やがて国連を中心とした「地球統一政府」を作ろうという機運が高まる。各国政府の利害は複雑化し、国際政治は混乱し、世界中に戦禍を巻き起こす。

やがて人類理想の世と思われた体制が実現する。が、それは決して人々を幸せにはしなかった。

そんな時代の荒波に翻弄される双子の柔道家がいた。一人は出世の道を、もう一人は墮落の道を。激動の時代の中で、確執が続けなが

ら、兄弟は明暗を分けていく。

物語の舞台は近未来だが、明治維新と西南戦争と源平合戦をモチーフにしたSF長編小説である。

登場人物には、「西条隆」「小久保通」「リーペ」「源田友頼」

「源田常義」「ライフビ・ハーン」「呉尾鳩奈」「竹取香久恵」など、歴史上の人物に似た名前をつけている。

その1 第一章 宇宙から来た黒船 前編

第一章 宇宙から来た黒船 前編

その光は異常だった。

その光は見たこともない紫色の尾を引き、聞いたこともない轟音とともに、猛スピードで海面に降下していった。

着水地点は浦賀沖。多くの船舶が往来する浦賀水道の真っ直中に、巨大な黒い物体が四つ、不気味に浮かんでいる。誰も見たこともない黒い物体に対し、海上保安庁の巡視船も、自衛隊のイージス艦も、F15イーグル攻撃機も、ただ遠巻きに見守っているだけだった。南関東一帯が騒然となり、電話回線はパンクし、ケータイも固定電話もマヒ状態に陥った。テレビは続々と通常番組を中止して臨時ニュースを組み始め、ジャーナリストやカメラマンたちは功名を求めて殺到した。

名の知れたジャーナリストの中で、真っ先に現場に到着したのは久^く米川^{めがわ}宏である。久米川は事態の異常さから目を背けるかのよう^{えつこ}に、スタジオにいる小宮山悦子^{こみやま}に軽口を叩いていたが、その表情はあきらかに動揺していた。

自分を一流ジャーナリストだと信じるプライドの高い久米川は、謎の巨大物体を「自分が知っている何か」であると信じ込もうとしていた。今までに何か類似の事件、事故、自然災害がなかったどうか、必死に記憶の糸をたぐり寄せた。だが残念なことに、彼の三十年にもおよぶ報道キャリアに照らしあわせても、今回の事態に類似するどんな出来事も皆無^{はな}だった。

地元の高校に通う花岡若彦^{はなおかわかひこ}も目撃者の一人である。京浜急行の車中を紫色に染めるほどの強烈な光線に、若彦は不吉な何かを感じていた。進路決定の三者面談を翌日に控え、言いようのない不快感が五感を支配した。

世界中のマスコミが見守る中、浦賀沖に停泊した巨大な黒い物体は、一時間もしないうちに再び轟音を発し始めた。耳をつんざく重低音に海面が激しく揺れる。やがて四つの黒い物体は宙に浮かび上がるや、高度七百メートル近くまで上昇し、凄まじいスピードで飛び去って行った。音速をはるかに超えるそのスピードに、自衛隊戦闘機でさえも追いつくことが出来なかった。

黒い物体は、北北東に進路をとった。あつという間に千島列島からベーリング海に達するや、アリューシャン列島上空からは南東へ向かい、カナダ上空を通過した。

すでにアメリカ、カナダにもパニックは伝播している。のみならず「我が合衆国の空軍は世界一」と信じてやまないアメリカ人にとつて、自慢の空軍がただ手をこまねていることに大きな衝撃を受けた。

世界中の喧噪をよそに、黒い飛行物体は、マサチューセッツ州ボストン沖に着水した。ボストン港からわずか三キロしか離れていない。物体の正体は、いまだわからない。

若彦が帰宅した時、すでに弟の貴彦たかひこはニュースを見ていた。

「お前、アレ見たか？」

珍しく弟が声をかけたが、若彦は返事もなかった。

若彦が不機嫌な顔で黙っていると双子の弟は話題を変えた。

「ところでお前、明日面談だろ。お前の担任、見てるだけで暑苦しいよな」

そんなことを言われても楽しくもない。「まあな」と生返事をした若彦は、それっきり弟の顔を見ようとしなかった。

母の法子のりこが学校に現れたのは、午後三時半を少し過ぎたころだった。グラウンドでは金属バットが乾いた打球音が弾き出し、校舎に入ると

吹奏楽部のクラリネットの音色が聞こえた。緑色のスリッパを履いた法子は、ゆつくりと引き戸を開けた。中にはすでに息子若彦と担任教師の竹田鉄夫たけだ てつおが向かい合っていた。

3年B組担任の中年古文教師は、肩まで伸びた長髪を右手で掻き上げて耳を出しながら、独特のまったりした口調で話を進めた。

「人生は偏差値ではありません。自分らしく、個性を尊重し、のびのびと生きることが大切です」

若彦はこの教師をあまり好いていない。言っていることは正論だが、何やら偽善者めいた雰囲気濃厚に醸し出していた。

若彦は成績が良くない。一般入試での大学進学はかなり困難だ。そのことは自分でも分かっている。若彦には、竹田鉄夫教諭の言葉が、自分の成績への皮肉のようにも聞こえた。

会議室の机上には資料として「不知火体育大学推薦入試要項しらぬいたいいく」があった。その大学は、学業よりもスポーツで有名であり、大学の宣伝のため選手として活躍することが期待されていた。

若彦は柔道でオリンピックを目指している。そのためには悪い話ではない。

「この推薦入試なら、まず大丈夫でしょう」

竹田の言葉に法子がうなずく。

若彦はほとんど言葉を発しないまま、面談は短時間で終了した。

若彦は、不知火体育大学とはどんな大学か、どんな大学生活が待っているのか、ほとんど興味が湧かなかった。ただ決まった事には従わねばならない。それだけのことだった。

家に帰った若彦は、テレビをつけて仰天した。浦賀からボストンに向かった謎の黒い物体から人間が現れたという。しかも肌の色が透けるように青いという。

CNN、BBC、新華社、アルジジャーラ。それまで胡散臭いSF

の話と思われていた宇宙人の来訪が現実のものとなり、世界中のマスコミがボストンに殺到した。

四つの黒い巨大物体は軍艦だった。地球の軍事技術をはるかに上回る強力な破壊力、機動力、敵探索システムを備えた恐るべき軍事要塞である。米軍筋によれば、この宇宙人は銀河系から二十七万八千光年離れたセイヨウ星という惑星からやって来たという。

地球にやってきた艦隊の提督はリーペと名乗る男で、母国のレッキョウ大統領からの親書をたずさえているという。激動の歴史の幕がきつておとされたという予感に、世界中が震撼した。

テレビでは「宇宙人問題の専門家」と称する人たちが雨後の筍のように現れ、あちらこちらのチャンネルで朝から深夜まで出沒し、セイヨウ星人の恐ろしさを力説するようになった。とくに^{ますそのよういち}柊園要一という中年男は、眼光鋭い風貌と、歯に衣着せぬも過激な議論で一躍時の人となった。

柊園は言う。

「セイヨウ星はアヘンを売りつけ、資源を搾取し、それによって富を築いてきたのです。火星も木星も冥王星も、セイヨウ星に侵略され、植民地となり、住民は奴隷同然になっています。太陽系で独立を維持しているのは地球だけです」

^{たけむらたけんいち}竹村健一という宇宙政治学者は、パイプをくわえ、まったりした関西弁でアメリカ政府の対応に苦言を呈した。

「宇宙人どもは今、アメリカ政府に通商条約を持ちかけますが、もし条約を結んだら大変な事になります」

「どういうことでしょうか？」

「この条約は不平等条約ですね。地球側に関税自主権がありません。それだけやなしに、宇宙人に対して治外法権まで認めてるんですわ」

「ちよつと待って下さい。その事をアメリカ政府は理解しているのでしょうか」

司会の^{ぜんはたかこ}膳齒貴子アナは、知っていながらわざとらしく質問をした。

「当然、知つとるはずです」

「それなのに？」

「ホワイトハウスはセイヨウ星の軍事力が怖いんです。地球上では最強の軍事大国や言うて、偉そうな顔してハリますけど、宇宙人には弱腰もええとこや」

夕日新聞記者の筑前哲也ちくぜんてつやが同調する。

「そうですね。アジアやアフリカや中東の国々に対しては、あんなにも傲慢な国が、宇宙人に対してはあんなにも卑屈なんですからね」
このような討論番組が朝から深夜まで流され、それを真に受けた学生、サラリーマン、主婦らが、居酒屋で、教室で、道端で、テレビ討論番組のモノマネのような議論を交わしていた。

さらにはセイヨウ星人の姿かたち、肌の色を除いて地球人とほとんど同じであることが、かえって人々を気味悪がらせた。

「あの透き通るような真つ青な肌を見ると、身の毛がよだつ」

誰もがそう思った。

一週間後、貴彦と法子は、担任教師の天海田祐希あまみだ ゆつきと向かい合っていた。三者面談である。

濃紺の服を着て髪をアップに固めた若い美人教師は、気の強そうなきりりとした目を見開いて、独特の強い口調で話を進めた。

「数学の成績は学年でトップです。英語も物理も上位に食い込んでいます。花岡君の成績なら、慶早大学理工学部にも手が届くはずですよ。彼なら出来ます。頑張つて上を目指してはどうでしょうか」

会議室の机上には資料として「私大理系偏差値一覧」があった。慶早大学は超難関校である。受験戦争を肯定し、常に上を目指す向上心を何よりも重んじる女鬼教師にとって、貴彦のような生徒の存在は嬉しかった。心底こういう生徒を人間として評価していた。

「先生、ボクはなんとしても慶早理工に行きたいです。死ぬ気で勉

強します」

「で、第二志望は…」

「必要ありません」

担任の言葉を、強い口調で貴彦は遮った。

「え?…」

「慶早以外は行く価値がありません。くだらない大学に行くぐらいなら、フリーターになったほうがましです」

法子が息子に訊く。

「柔道は?」

「もちろん続ける。オリンピックを目指す。勉強も柔道も、一流を目指したい。一流でなければ生きていく価値がない」

インターハイ出場経験のある彼は、他の大学で推薦を受けることも可能なのだが、貴彦はその道を選ばなかった。彼は自分を一流の人間だと信じており、一流の人間は一流の場にいないならない、という強い信念を持っていた。

この夜から母の態度が一変した。

「あの慶早を受けるんだから…」

法子のその思いが、行動の端々に過剰に現れ、花岡家は貴彦を中心に回っているかのような雰囲気になり満ちあふれた。

母の弟への異常なまでの気の使い様は、若彦を不愉快にさせたが、それを少しでも表現し、悟られることは出来なかった。自分がつまらなそうな顔をすれば、母は悲しむだろう。そんな母を若彦は見たくなかった。若彦は、本心とは全く別の表情を顔に出すという辛い行動を、知らず知らずに身に付けていった。やがてそれは彼自身の癖ともなり、さらには他人を欺いているうちに自分自身でも、自分の本心が分からなくなっていくた。

*

自称宇宙人問題専門家の言うことも、決してでたらめではなかった。

事実セイヨウ星の悪辣な植民地政策で、数多くの惑星がその尊厳を傷つけられ、富を奪われている。その第一歩が不平等条約である。地球もその標的になった。交渉する政府は世界一の大国、アメリカ合衆国である。時の大統領は共和党のタイロン・リーである。リーは地球人全体の利益よりもアメリカの国益を考えた。タイロン・リー大統領のもとには、既に軍参謀本部からの報告が上がっている。

「我が合衆国の軍は、奴らに到底齒が立たない」

地球最強の米軍は、最強であるがゆえに、セイヨウ星軍の実力を誰よりも正確に理解することが出来た。

セイヨウ星の武力に屈した形での、屈辱的な不平等条約ではあるが、アメリカ政府にとって魅力的な部分もある。それは宇宙貿易を独占出来ることである。アメリカ政府は、リーペ提督に対して「地球代表政府」だと名乗っている。一種の詐欺だが、これによってセイヨウ星との貿易を独占出来るのである。他国を宇宙貿易には一切参加させないつもりだった。確信犯であろう。

世界の目がニューヨークに集まっている。その焦点は国連本部ビルである。二十世紀以来、数多くの国際政治の駆け引きの場となつたこの場所で、地球はじまって以来の難問が話し合われることになった。

宇宙人と通商条約を結ぶか、否か。

賛成の立場はアメリカ。反対の立場はEU諸国、ロシア、中国などである。この、難航が予想される国連総会に、不退転の決意で臨むタイロン・リーは、大統領自らニューヨークに乗り込んだ。

タフ・ネゴシエーターとして定評のあるこの人物は、政敵をあらゆる手段を使って追い落とす冷酷苛烈な性格で、マスコミからは蛇蝎のように嫌われていた。五大湖の一つミシガン湖の湖畔で育ったこの男は、保守的で、合衆国への愛国心を強く持っていた。

国連総会は一ヶ月にもおよんだ。決して樂觀視はしていなかった

タイロン・リーだが、EU、ロシア、中国の反対は、予想以上に強硬だった。リーは事態を打開すべく総会場で熱弁をふるい、各国全権と個別の会談をし、経済援助をちらつかせ、軍事力での脅しも言外に臭わせ、阿修羅のごとく活動した。

しかし、タイロン・リーの精力的な活動もむなしく、アメリカへの支持は広がらない。賛否を明らかにしない「日和見」の国々を説き伏せさえすれば、何とかなると思っていたホワイトハウスの思惑ははずれた。

「このままでは、条約締結は否決されてしまう」

リーは焦った。が、次第に開き直ってきた。

（国連がアメリカの国益と一致しなかったことは、これまでもたびたびあった。アメリカはアメリカだ。国連のためにあるのではない）
彼は愛国者である。

（どの国も「国連、国連」というけれど、国連のために自国を犠牲にするバカはいない。国益と国益がぶつかるのが国際政治で、国連外交もその一部にすぎない）

彼は国連中心主義に、偽善者の臭いを感じていた。

「国連決議で決まったから」と、それを口実にして戦争を起こしてきたのが、国際政治の現実の姿なのである。

「国連決議などいらない」

それが、合衆国大統領としての最終判断となった。そして彼はニューヨークを後にした。

リーがワシントンに戻った翌日、アメリカ東部時間午後二時、ビッグニュースが世界を駆け巡った。アメリカが国連決議なしにセイヨウ星との通商条約を結んだという。しかも「唯一の地球代表政府」という肩書きで。

激動の時代が始まった。反セイヨウ星、反米の嵐が世界で渦をまいた。

晩秋の訪れとともに気温は下がり、関東の紅葉も黄色く色づいてきた。

昨日となんら変化のない日常を繰り返すばかりの若彦は、紅葉に心を動かされることもなく家路についた。昨日の続きに今日があり、今日の続きに明日が来るだけの毎日である。着慣れた学生服を着て、通い慣れた道を歩き、見慣れた自宅の門扉を開けた。ふと郵便受けを見ると、そこには不知火体育大学からの郵便物があつた。

「母さん。合格したよ！」

「あつそう。良かったね」

母は俎板の上の秋刀魚から目を離さずに、包丁を持つ手を止めることもなく、そう答えた。ただ、それだけだった。

秋が過ぎ、冬がやって来た。街は華やかなクリスマスツリーから清楚な正月飾りに替わり、やがてバレンタイン商戦が始まった。受験シーズンの到来である。

貴彦は物事を論理的に考える癖がある。常に冷静であり、前頭葉を活発に使う頭脳は受験勉強に適していた。無口でクールで感情をほとんど外に出さない貴彦は、淡々と机に向かっていった。

「がんばれよ」

母の前で弟を励ました若彦だが、心の底では複雑なものがつこめいていた。

厳しい寒さの中、貴彦の入試の朝がやってきた。法子は前夜からそわそわして落ち着かない。この日、朝暗いうちから起きて弁当を作ったが、普段とは気合いの入り方が違っていった。

すがるような母の視線を避けるように、貴彦は無言のまま自宅を出た。入れ替わるように若彦が起きてきたが、彼の食べる朝食の準備は、未だ開始さえもされていなかった。

そして発表の日。

この日も法子は朝から落ち着かない。

「十時だよね」

何度も何度も同じ事を言い、その都度時計を見るのだった。
やがて花岡家に朗報が届いた。

法子は満面の笑顔で次男を祝福した。本人以上に喜んでいるように見えた。父も若彦も、この快拳に暖かい言葉をかけた。

その夜、花岡家は貴彦の大学合格一色に染まり、すき焼きの匂いの中、法子の笑い声が響いていた。

（まあいい。オレには柔道がある。オリンピックを目指すなら、不知火体育大のほうが近道だ。あいつが文武両道なら、オレは一本に絞ってやる。一本に絞ったからには、二足の草鞋の貴彦に負けるはずがない）

若彦は、そう考えることによって、やっと貴彦の一流大学合格を受け止める事が出来た。

「絶対にオリンピックに行くなければならない。そして貴彦よりも上でなければならない。貴彦が銅ならば銀を、貴彦が銀ならば金を」
若彦は、重い重い「ノルマ」を自らに架した。

春が来て、双子はそれぞれ別の大学に進学した。若彦は、弟がまぶしかった。

*

セイヨウ星との交易が始まると、地球上でのアメリカの貿易収支は膨大な黒字を計上した。同時に他国は膨大な対米貿易赤字を抱えた。セイヨウ星製のすぐれた自動車や化学素材は、テキサス州ヒューストンにしか荷揚げされない。それらは「made in USA」として世界の市場を席巻し、他国の中小企業を倒産に追い込んだ。

傍若無人な青い肌の異星人とのいざこざも、世界中の大都市の繁華街で目にするようになってきた。セイヨウ星人とアメリカ人は世界の嫌われ者になった。

各国の政府もマスコミも、国連決議なしに不平等な条約を結んだアメリカを非難し、国連の重要性を論じはじめた。夕日新聞の社説は主張する。

「地球すべてを統治する“世界政府”を樹立するべきだ。そして、どの国にも属さない“国連直属の人間による国連直属の軍隊”を持つべきだ」

中国の民人日報は、さらに過激だった。

「国連に逆らうものは地球の敵であり、討伐しなければならない」このような論調は、先進国を中心に世界の言論界の主流となっていた。しかしながら国連の政治的経済的基盤は、二十世紀のころと全く変わっていない。

このころ急速に存在感を増しつつあるのが中国である。国連の常任理事国であり世界でもっとも多くの人口を抱えているこの国は、若者を中心に過激思想の巣窟となりつつあった。資本主義国では、とうの昔に衰えた学生運動が燎原の火のように燃え上がり、二十世紀後半に、日本で起こった安保闘争、アメリカでのベトナム反戦運動のような様相を見せてきた。大学のキャンパスには立て看板が乱立し、その多くは「宇宙人追放」「打倒！美国（米国）帝国主義」と、独特の鍵型の字体で書かれていた。天安門広場では、連日のように若者たちがプラカードを持ってデモ行進を繰り返した。その人数は日に日に増えつづけ、反米のうねりは若者を中心に広まった。アメリカ大使館前には、星条旗を燃やす者やシュプレキコールを叫ぶ者が後を絶たなかった。

なかでも下村大学かそんの蒋允しょういんという教授のゼミを受講する学生たちは政治活動が好きで、学業そっちのけでビラを配り、デモ行進をし、ヘルメットを被り、タオルで顔を覆い、拡声器で演説を繰り返した。火炎瓶やゲバ棒を用意しているという情報さえあった。学生たちは「国連絶対主義」というイデオロギーに染まり、議論は極論に走り、どんどん過激になっていった。

それだけではない。彼ら学生運動の闘士たちは、活動の舞台をキヤンパスだけにとどめてはいなかった。蔣允教授しやういんとつながりのある有力政治家、張志雄ちやうしゆうとも結びつき、中国の国政に無視できない勢力になっていった。

テロ事件があいついで起こっている。襲われるのは、青い肌のセイヨウ星人とアメリカの政府関係者である。やっているのは世界各地の政治的狂信者で、セイヨウ星人を道端で一人殺せば、それで地球が救われると信じている短絡思考者か、殺人そのものに快楽を感じている偏執者である。

治安の悪化は当然政情不安をまねく。二十一世紀初頭にイスラム原理主義者の過激派テロが頻発したような世の中が再来するのではないかと、先進国は不安になった。

反米テロ組織には大きな背後組織が有るようだ。CIAが掴んだ情報によると、過激派を支援していると思われるのは、中国の下村大学の蔣允ゼミ関係者だという。CIAは蔣允の動向に目を光らせるようになった。

蔣允がケネディ空港から入国したことが分かったのは、数日前のことである。

「いったい何をたくらんでいるのか」
CIAは全力をあげて彼を追った。

夕闇が近い。仕事を終えたニューヨークーカーたちが家族のもとへ向かうころ、ヤンキースタジアムにはすでに長蛇の列が出来ていた。今夜は宿敵レッドソックスとの試合が予定され、ゲート前には、ピンストライプを身につけたファンであふれていた。その中に、大きな荷物を持った異質な雰囲気きふきの東洋人がいるのをCIA職員は見逃さなかった。

「間違いない。しょっぴけ」

雑踏の中、気づかれないように少しずつ包囲の輪を狭めたプロた

ちによって、蔣允は両腕を静かに抱えられた。背中には金属の筒を押し当てられた感覚を覚えた。

「大きな声を出すとどうなるか分かってるよな。いつしよに来てもらおうか」

蔣允と屈強な男たちは、用意されたワゴン車に乗りこみ、道路中を埋め尽くす自動車の群れの中へと消えていった。

蔣允の身柄拘束は、一般マスコミでは大きなニュースにはならなかったが、蔣允ゼミの活動家たちに与えた衝撃ははかりしれない。中国の過激派若者の憤激は、アメリカ人の理解をはるかに超えていた。彼らが武装闘争への道をエスカレートしていったのも当然のなりゆきともいえる。

CIAは裁判が長引くことを恐れた。どんな不測の事態が起こるか予測がつかない。

「消せ」

蔣允の処刑は、最終的には大統領タイロン・リー自身が秘密裏に指示したとされる。身柄拘束からわずか一ヶ月でその生命は消えた。「ヤンキースタジアム爆破未遂事件の犯人、拘置所内で急死。死因は脳梗塞」

この事件は、ワシントンポストの小さな記事でこう報じられたに過ぎない。

しかし、蔣允門下の過激派の中で、その記事の内容を信じた者は、誰一人いなかった。

翌年の三月三日。ワシントンDCは大雪に見舞われた。ホワイトハウスも連邦議会も湿った重い雪に覆われ、除雪された道路の路肩には、まるで堤防のように、集められた雪が山脈を作っていた。

「ミシガンでも降っているだろうか」

彼は故郷の湖を思い出していた。

タイロン・リー大統領の車がホワイトハウスに入ろうとした時、乾いた破裂音が、閃光とともに響き渡った。雪の堤防に身を潜めて

いたヒットマンから放たれた銃弾は、防弾ガラスを貫き、この国の大統領の頭蓋骨を粉碎した。

スモークガラスの内側に赤黒い大量の液体が付着したのが、外からも見えた。

新宿駅前では、雨の中、号外を受け取ろうとする人々でごった返していた。スタジオ・アルタの電光掲示板には「米大統領暗殺」の文字が、帯のように右から左へと動き、それが何度も何度も繰り返されていた。

*

「西条隆サンを、内閣総理大臣に指名いたします。」

議長は議員を「君づけ」で呼ぶのが慣習である。しかし土橋たか子衆議院議長は、その慣習に従わなかった。女性としてはやや太い声が議場に響き渡るや、西条は、身長一八二センチ体重九十三キロの堂々たる体躯を揺らしてゆつくりと立ち上がり、深々と頭を下げた。マスコミの席からは、けたたましいほどのストロボとシャッター音が、彼を祝福した。

支持率七十二パーセント。近年まれに見る高い数字であった。

外務大臣に起用したのは、小久保通である。西条とは、小学生のころからの友達でいわゆる幼馴染みである。面倒見の良い親分肌の西条が「情の人」とするならば、剃刀のように鋭い頭脳で冷静に状況判断をする小久保は「理の人」といえるだろう。

西条の机の上は、書類が雑然としているのに対し、小久保の机は、書類を綴じたファイルのインデックスが、一ミリもズれることなく正確に同じ高さに並んでいる。西条と小久保は、お互いに自分になりものをもっている古い友人を大切にしていた。

もともと、小久保の外相就任は、いかに情に厚い西条といえどもそれが理由ではない。単純に小久保の優れた頭脳を必要としたのだが、マスコミはそうは報道しない。マスコミとは、常に新内閣の組

閣人事にはケチをつけるのがその役割と信じてやまないとこがある。

西条は、選挙区の支持者や派閥の部下を大切にする典型的な古い政治家であった。今回異例の若さで総理総裁にまで上り詰めたのも、人の和を大切にするその人柄によるところが大きい。また、賄賂には決して手を染めず、スキャンダルも起こさない清廉さも国民の支持を集めた。

一方、小久保が政治家になったのは、強烈な志をその胸に秘めていたからである。

「この地球では、陸地にも海上にも、無数の国境線があつて、同じ地球人同士が反目し戦争をしている。この地球上から国境を無くしたい」

そう本気で考えていた。若い頃、韓国旅行をした時に三十八度線を見て、国境の非人道的存在に胸を痛めた経験がある。

そんな小久保が政治の世界で頭角をあらわして来たところ、宇宙人がやって来た。

「地球には地球全てを代表する統一政府が無い」

このことは小久保の使命感を一層強くした。

この西条内閣は、日本外交史上、類を見ないほどの方向転換をしようとしていた。日米安保の破棄と、中国との軍事同盟の締結である。

第二次大戦終結以来、日米は一貫して重要な同盟国だった。時に関係がぎくしゃくすることはあつても決定的な決裂とはならず、市場経済、民主主義の価値観を共有する重要なパートナーであった。狂牛病による牛肉輸入問題、在日米軍の移転問題、さらにはイラクへの自衛隊派遣問題など、さまざまな問題が起こっても、常に日本はアメリカを無二の親友として要求を受け入れてきた。

しかし今、アメリカは国連を無視して宇宙人との条約を結び、アメリカ大統領をして「地球人の代表」という立場をとっている。そしてそのことが、世界中で大いなる反感を買っている。

「アメリカは自国だけが繁栄すれば、他国はどうでもよいのか」そんな声があちこちであがっている。もはや日米安保を見直す時である、というのが世論の大きな流れであった。西条と小久保はその世論の申し子ともいえる政治家である。

「地球全体を一つの国として、統一政府を誕生させなければならぬ。そうでなければ、我が地球は、星際社会の一員として、やっていけないだろう。他星からの侵略にも耐えられないだろう」

西条も小久保も、そのような強烈な使命感を持っていた。そのためには、アメリカ支配を脱し、国連を中心とした新たな「国連地球政府」を創設すべきだ、と考えた。むしろ大国アメリカが参加してくればよい。しかしアメリカ政府は、地球全体のことを考えようとしていない。今のホワイトハウスの面々を見れば特にその傾向が強い。反米、国連中心主義は世界の世論の流れだが、日本以上に強硬にそれを主張する国家があった。中華人民共和国である。十九世紀以来、反目してきた日中両国だが、今ここにいたって立場が一致している。

「共に力を合わせて地球政府を作ろう」と西条は考えた。

時の中国共産党書記長は張志雄^{ちしゆう}である。張志雄は、思いきつて日本と反米同盟を結ぶのも悪くはないと思うようになっていた。

しかし、それが果たして可能なことであろうか。中国国内では、依然として国民の間に反日感情が根強いのである。それも、反日教育で育ってきた若い世代ほどその傾向が強い。凶悪な軍国主義日本。歴史を歪曲し、教科書を改竄し、戦犯を祀った神社に参拝する日本。過去の侵略戦争を反省しない日本。そんな日本とどうして軍事同盟など結べようか。

(続く)

その2 第一章 宇宙から来た黒船 後編

第一章 宇宙から来た黒船 後編

*

十五時間ものフライトから解放されて空港に降り立った若彦は、大きく伸びをした。これから憂鬱な「あれ」が始まる、と思うと空港ロビーの風景までが殺風景に見えてくる。

前を歩く母親の顔は妙に明るい。厳しい表情を崩さない父親と違って、次男の金メダルを信じて疑わないのだろう。

大学に入って一年半、若彦が公式戦に出場する機会はなかった。強豪不知火体育大学柔道部には、毎年日本中から有望な選手が大勢入部してくる。

それまで「勝つのが当たり前」「県内屈指の実力者」として自信満々だった者の多くが、生まれてはじめて体験する劣等感に、自信を失い、打ちのめされていった。

若彦もその一人だった。日本代表どころか、部の団体戦の五人にさえ入れない。公式戦では柔道着を着ることもなく、客席からチームメートの応援をしなければならぬ。こと柔道に関しては、弟とともに、常に日の当たる場所を歩き続けてきた彼にとって、まったく初めての屈辱だった。

はるかな異国まで来て、また、いつもの憂鬱な「あれ」、すなわち「応援」をしなければならない。いや、いつも以上に辛くなるだろう。なぜなら、応援しなければならないのは、弟だからだ。

六千人収容の体育館には、多数の日本人と日本語の大弾幕と、日の丸の小旗を目にすることが出来た。ちなみに少数ではあるが、青い肌のセイヨウ星人も観戦していた。

静かに腕を組んで試合を見つめる父満太郎と、日の丸の小旗を持つ

た母法子の隣で、若彦はどういう感情も表すことができず、無表情を押し通していた。

貴彦は難敵を次々に撃破し、勝ちあがっていった。

「貴あ、がんばれえ」

若彦が、両親と一緒に大声で弟に声援を送る姿は、試合の合間にテレビカメラで捉えられ、日本の視聴者の目に入った。たしかに若彦は、大声で貴彦を応援していた。多くの人がそれを見ていた。

しかし、若彦は弟が勝っても、ちっとも嬉しくはなかった。貴彦がピンチに陥るたびに沸き立つような高揚感をおぼえ、窮地を脱すると失望した。

貴彦の大外刈りが決まるたび、心の中では「くそっ！」と叫び、口では「よっしゃ！」と言って拍手をしていた。

やがて貴彦が表彰台の真ん中に立ち、場内に君が代が流れると、若彦は隣にいた母親と抱き合って、ガッツポーズをつくって見せた。満面の笑顔のままトイレに行った若彦は、鍵をかけると同時に、こらえていた涙を開放した。声にならない嗚咽とともに、拳を振り上げて壁を叩きつけた。小指の第三関節が紫色に腫れ上がったが、それでも壁を叩くことをやめなかった。

涙で汚れた顔を洗って、笑顔を作り直して、トイレから出た若彦は、嬉しそうに手を振ってみせた。

凱旋した貴彦を待ち受けていたのは、マスコミの取材攻勢だった。成田から東京へ移動するや、在京キー局のスタジオに生出演をハシゴした。

今回、柔道競技は男女あわせて五階級で金メダルを取った。貴彦を含めた五人の金メダリストが前列に座り、銀と銅の選手が後列に位置した。

司会の佐野門太が独特の大きな声で、貴彦を褒めちぎった。自分が司会を務めるクイズ番組に出演してくれと、冗談めいた口調で付

け加えた。佐野はそのクイズ番組で、正解を言う時に、何分も沈黙して回答者の顔をじっと見つめることで人気があった。

「そつえば、お兄さんも柔道をしてらっしゃるそうですね」

佐野はよけいな一言を付け加えた。

貴彦は一躍スターになり、帰国直後から人気女優の宮崎りえとの熱愛報道でもマスコミをにぎわした。

こうして、オリンピックが終わった。

*

この夏、東京は例年になく暑かった。夏の猛烈な日差しを避けるためにブラインドを下ろした西条首相は、冷たい麦茶を冷蔵庫から出してコップに注いだ。

テレビでは球児たちが熱い戦いをしている。「オリンピックは終わった、次は高校野球だ」というスポーツマスコミの変わり身の早さは、早くも甲子園のアイドルを作りあげた。

コンバットマーチが流れる中、白い帽子を被った端正な顔立ちの背番号1が、友禅染の日本手拭いで汗を拭っている。この夏一躍国民的アイドルになった慶早実業の「手拭い王子」こと佐藤祐樹投手である。

突如として甲子園からの中継が途切れ、天気予報になり、やがて正午のニュースが始まった。

西条が鋭い視線で見つめているのは、テレビに映し出された国連本部ビルだった。ここでも熱い戦いがくりひろげられている。

各国の国連外交が活発化している。地球統一政府の設立が話し合われているのである。

アメリカは既得権益を手放したくない。セイヨウ星とアメリカとの通商条約は、アメリカに大いなる富をもたらし、かつ他国に膨大な対米貿易赤字をうみだした。

「アメリカは、セイヨウ星の傀儡ではないのか」

「地球を宇宙人に売って、自国だけが繁栄しようとしている」
「やがては、アメリカも含め、地球は宇宙人の食い物にされてしまう」

激しい議論が国連総会で交わされたが、アメリカの全権は動じない。二十世紀に国連が創設されて以来、幾度となくアメリカが孤立するかのように見える事態は起こった。しかし、常に日本かイギリスが支持を表明し、強力な経済力と軍事力で押し切ってきた。

たしかに今回は、日本に西条内閣という「反米政権」が出来たがいざとなれば日本は共同歩調をとるだろう、とワシントンは甘く見ていた。なにしろ二十世紀末期に社会党の党首が首相になった時でさえ、日米関係はいささかもゆらぐことがなかったのだから。

国連での「地球政府創設案」は難航した。日本と中国が別々の案を提出し、それぞれ別個に運動をしていたのもマイナスに働いた。

日中は、同じ反米・国連政府派ではあったが、ライバルでもあった。とくに中国は、日本にだけは先を越されたくない、として日本案の成立を邪魔している観さえあった。日本も日本で、共産党一党独裁の中国政府には根強い不信感を持っている。「近くて遠い国」という言葉があるが、日中もまた、古い歴史時代からお互いに不信感を持ち続けた不幸な過去を背負っている。

張志雄書記長が来日したのは、八月半ばのことだった。迎賓館では日本政府主催のレセプションが開かれ、翌日から公式な日中首脳会談が行われた。西条と張は膨大な時間を費やして軍事同盟について話し合った。

しかし話は平行線をたどるばかりで、時間だけがむなしく過ぎていった。同盟そのものについては両国とも異存はないが、細かい条項については意見が対立していた。それが外交交渉の常ではあるのだが、中国人は日本人に対し特別な感情を持っている。

「日本に対しては、一切の妥協は許されない。妥協するくらいなら決裂してもいい」という厳しい立場で張志雄は交渉に臨んでいた。

もし妥協すれば、張は失脚するかもしれない。

二十世紀の戦争以来、日本に対する怨讐は、時代を経ても消えることはなく、かえって増幅されていた。

「過去の過ちを反省しない日本、歴史を歪曲する日本、加害者意識が希薄な日本」そんな本国の世論を背景に、張は交渉しているのである。

一方、日本の世論もまた中国に厳しい。毒入り食品輸入問題、ガス田開発問題。共産党一党独裁国家との交渉では何度も煮え湯を飲まされてきた。

「中国に対して、あまりに弱腰ではないか」

野党もマスコミも、中国への妥協は許さないという雰囲気満ちあふれていた。

西条と張の会談は、四日間にもおよんだ。午前、午後、夜間と一日十時間以上もの時間を費やした。しかし合意には至らず、ついに張志雄の離日の時が迫ってきた。

帰国予定日が翌日に迫った張志雄に、意外な人物から電話があった。その人物とは、張とも西条とも古いつきあいのあるオーストラリア人で、タートル・マウンテン社という貿易会社の社長だった。彼は気取らないフランクな性格で、周囲からはニックネームで呼ばれていた。両腕に竜と馬の刺青があることから、「ドラゴンホース」と言う名で通っていた。

「どうしても会いたい。今からそっち行くわ」

一国の国家首脳に対し、ずいぶん強引な物言である。三十分後、ドラゴンホースがやって来た。

「とにかく、来てくれえ」

そういつて強引に張を外に連れ出した。ドラゴンホースは国際免許を持っている。自ら運転する黄色いミニバンに張を乗せるや、靖国通りを西へ向かって走り出した。警備の車両が慌てて後を追った。路面が焼けつくのではないかという暑さの中、車内は風量全開の

エアコンが凄まじい音をたて、二人の会話を困難にしていた。ドラゴンホースは無言でハンドルを握り、張は眉間に皺を寄せて東京のビル群を見つめていた。

黄色いミニバンは新宿にある古ぼけた雑居ビルの地下駐車場で停まった。このビルの三階にはタートル・マウンテン社の日本支社があった。

案内された応接室に入ると、なんとそこには西条がいた。
(何十時間話し合っても折り合いがつかなかったのに、これ以上今更何を話すというのだ)

と、張志雄は思ったが、ここでは全てドラゴンホースのペースで物事が進行していた。

応接室の壁には、亀と山がデザインされたタートル・マウンテン社の社章が見える。その世界では名を知られた武器商人のマークである。

ドラゴンホースはまったくの民間人の立場でありながら、いや、だからこそ両国首脳の仲立ちになり、日中同盟の締結に向けて尽力した。タートル・マウンテン社にとって、地球政府が成立すれば大きなビジネスチャンスとなる。

アメリカだけが宇宙貿易を独占する体制では、この会社は参入出来ない。政治の事はただ待つだけでなく、みずから商売がやりやすい環境をつくるべく、政治家に働きかけるという積極さを、このオーストラリア商人は持っていた。

ドラゴンホース社長は大国の首脳に対しても臆することなく話を進めた。

「そげん事を言っちよると、宇宙人に地球を取られてしまうわい」
「日本だあ、中国だあ。そげな事は小さい小さい。宇宙の中の地球じゃないか」

「地球が滅びて日本も中国もあるか。地球のためじゃ、地球の。地球全体のことを考えてくれんと困るぜよ。あのアメリカにまかせておいてええんかい。アメリカ政府は地球を滅ぼすぜよ」

訛りのきついブロークンな豪州英語で言いまくられ、西条も張も、圧倒された。

「人種、民族、国家を越えて、地球上のすべての人間が団結し一つになる」

それは、はるか昔から言われ続けてきた、理想の世の中であろう。人類の見果てぬ夢、ともいえる。

「国境のない地球」

もし実現すれば、どんなにすばらしいことだろう。しかも今日、それが空想の上の甘い理想などでなく、早急に迫られた現実的な課題となっているのである。地球政府を樹立しなければ、人類に明日はない。そのことに世界中が気づきはじめている。そしてアメリカがその障害になっていることも。

しかし、西条も張も、その背中には「国民」を背負っている。「国益」を損ねるような決定は出来ないのである。

ドラゴンホースは、強烈な一言を二人に投げかけた。

「おまんらは、いつまで日本人、中国人なんじゃい。いつになったら、地球人になれるんじゃあ」

「地球人か」

西条がつぶやいた。

日本人通訳の発した「ちきゅうじん」という言葉の響きに、西条の心が動いた。

「そう。地球人じゃ。ワシらは皆、地球人なんじゃ。日本人、中国人、オーストラリア人である前に、地球人じゃ。みんなみんな地球人なんじゃ」

「地球人か」

張志雄もつぶやく。

この交渉は決裂してもいい、というスタンスで臨んでいた二人は、目から鱗が落ちる思いだった。

「自分は地球人だ」という立場に立てば、この交渉は絶対に決裂させてはならない。同盟は成功させなければならない。日本の、中国

の「国益」なんてどうでもいい。大事なのは「星益」なんだ。地球人としての一致団結しかない。

西条も張も覚悟を決めた。

西条は便箋に大きな文字を書いて張志雄に見せた。

「呉越同舟」

漢字が読めないドラゴンホースは二人を不思議そうに眺めている。張志雄は無言でうなずいた。

この時から「日中軍事同盟」へと、両国政府は大きく舵を切った。反米同盟である以上、日米安保は当然破棄されることになる。

三人はビルを出た。日本一とも言われる新宿の歓楽街には既にネオンが灯っていた。熱帯夜の蒸し暑い空気に覆われた雑踏の向こうに、三日月が見える。西条は月光を見ながら地球の将来に思いを寄せた。

*

夏が終わり、後期の授業が始まった。何をするのも面倒くさく、何をしても面白くない。

講義に出ても教授の声は耳に入らず、惰性と無気力だけが若彦を支配していた。

逃げるようにキャンパスを後にした若彦は、気が付くと一人新宿に来ていた。繁華街へ向かう人の群れ、群れ、群れ。人の流れにただ流されて、呆然とさまよい歩いた。

「お兄さん、遊んでかない？いい娘こいるよ」

焦点の定まらない光を失った瞳は、客引きにとって絶好の餌食である。歌舞伎町のプロたちの押しの強さに抵抗さえ出来ずに、若彦は艶めかしい看板の奥へとその巨体を運んだ。

薄暗い照明とミラーボール、そしてヒップホップミュージック。たばこの煙がもうもうと漂う中に、網タイツと、肩も露わな原色の衣装を身をまとった厚化粧の女たちが、若彦を囲んだ。数ヶ月前まで

柔道一筋の真面目高校生だった若彦には、目がくらむほどの別世界だった。美女たちは愛想笑いを振りまき、豊満な胸元をきわどいドレスで包み込んでいる。初めて飲むウイスキーの酔いも手伝い、若彦の股間は熱くなり、口が止まらないほど饒舌になった。

劣等感、屈辱。それらすべてを、きれいさっぱり忘れさせてくれるこの世の樂園がそこにはあった。若彦は大会社の社長にでもなった気分ですわにもたれ、美女をはべらせ、自慢話に夢中になっていた。十九歳の自慢話など、大人からみればつまらないはずだが、玄人女たちは心から感心したような顔を作り、熱心に聞いてくれた。彼は有頂天になっていた。かわいい声の洗礼に、おもわず頬が緩む笑顔になったのはいつ以来だろう。女たちは自分を素晴らしい男だと褒めてくれる。そして色気とアルコールは憂さを忘れさせてくれる。

花岡家に人相の悪い男たちが現れたのは、秋も深まる十一月半ばのことだった。

「花岡若彦さんはいるかね」

インターホンの画面には、一目でヤクザとわかる品のない顔と、縦縞のスーツが三人、映し出されていた。法子は身も凍るほどの恐怖を感じたが、必死にそれを押し殺して平静を装った。

「いません。どちら様ですか」

「おたくの息子さんねえ、店のツケを払わないでトンスラしたんだよ。ウチの女の娘のお尻触って、楽しく遊んで、金払わねえんだよ。柔道の偉い人だか何だか知らねえけど、おたく、息子にどういう教育してんの」

「何かの間違えでしょう」

強い口調で法子は応じた。

「そうですか。また明日来ます。もっと大人数でね」

言葉だけは丁寧だが、嫌みと凄み効かせた不気味な声を残して、彼らは去っていった。

法子は息子を信じていた。中学でも高校でも、不良グループとの付き合いなど一切無く、ひたむきに柔道に励んできた愚直な長男である。そんな若彦が、いかがわしい盛り場に足を踏み入れるなどとは、全く信じがたいことだった。

が、すでに若彦は母親が思っているような人間ではなかった。

翌日の午後、花岡家の郵便受に、カード会社からの請求書が配達された。明細を見た法子は血の気が引いた。

「間違いであって欲しい」

そんな母親を裏切るかのように、若彦への携帯電話は通じない。

すぎるような思いで、法子は柔道部の合宿所に電話を入れた。電話に出たのは、あかつたろう 暁太郎という二年生部員だった。

「えっ。花岡のお母さん……ですか」

電話の向こうからは、驚いた声が返ってきた。

「ご存じなかったんですか……花岡は、辞めました」

「えっ」

「たしか、正式な退部届は十月の半ばくらいでしたけど、でも、ずっとその前から稽古には出てませんでした」

「……」

暁太郎は、ゆっくりと言葉を選びながら話を続けた。

「大学も中退したっていう噂ですが……詳しいことは僕らにも分かりません。合宿所を引き払ったから、てっきり実家に帰ったのかと思っただけですが、……」

受話器を置いた法子は、その場にしゃがみ込んだ。胃袋がきりきりと痛み、吐き気がした。汗が額からしたたり落ちて床を濡らした。以後、若彦の消息はつかめない。

*

外務大臣、小久保通はニューヨークにいる。国連総会で「地球政府設立案」を提出するためである。この案は、日中が共同提案して

いる。すでにイギリスもフランスもロシアも賛成の同意をとりつけてある。あとはアメリカである。拒否権を持つ安保理常任理事国のこの国の出方如何で、地球の運命は左右される。

この案に従って地球政府が成立した場合、アメリカが結んでいるセイヨウ星との通商条約は、その主体が地球政府に引き継がれ、アメリカは宇宙貿易を独占できなくなる。そんな案をホワイトハウスが飲むはずがない、というのが大方の観測である。ただ、一つだけ希望があるとすれば、今の大統領が国際協調派であることだった。

時のアメリカ大統領は、民主党のエド・バックマンである。エドは、かつてのタイロン・リーとは違い、アメリカが国際社会で孤立することを避けようとする傾向があった。そして、思想的には今流行の「地球は一つ」という考えに近い。

エド・バックマンは大統領執務室に掲げられた星条旗を見ながら、さまざまな思考をめぐらしていた。亡きタイロン・リーが強引に締結した宇宙人との条約は、たしかにアメリカに強大な富をもたらした。しかし、アメリカはそれと引き替えに大きな何かを失ってしまったような気がしてならない。

今の時代、もはやアメリカ大統領はアメリカ一国のことだけを考えていればいいのではない。自らが「地球政府」と名乗ってしまった以上、その責任を全うするしかないだろう。

自分はアメリカ大統領である以前に、この地球という惑星に住む地球人である。そして今、地球の運命を左右できる数少ない人間の一人である。その責務の重さはどうだろう。世のため人のため、自分は政治家を志したのではなかったのか。

彼は自問自答していた。

一方で、自分を大統領に選んだのはアメリカ国籍を持つ人々であって中国人でもなければ日本人でもない。選挙で自分に投票してくれた有権者に報いるのが道義である。

一週間後、状況はアメリカにとってさらに悪化した。日本の西条首

相と中国の張志雄書記長が、厳しい要求を突きつけてきたのである。アメリカ政府がこれを飲むとは、到底考えられないような要求だった。

「国連本部のあるニューヨーク市を、国連の直轄地とし、アメリカの主権から独立させる」

というのである。世界中が騒然となった。

ニューヨーク市を、バチカン市国のように、小さな独立国としてアメリカ合衆国と切り離す、というのである。そうでなければ本当の意味での世界の中の「地球統一政府」ではない、というのが時代のイデオロギーであった。

アメリカが、この街を手放すはずが無い。ニューヨークとはアメリカ文化の発信地であり、まさにアメリカ中のアメリカ、すなわちアメリカそのものであり、ニューヨークの無いアメリカなど考えられなかった。

全米で激しい反日・反中運動が巻き起こった。弱腰外交のエド・バックマン大統領と国連大使への批判も急激にエスカレートしていった。

ロスにあるリトルトウキョウの寿司屋は、ボールを持った十数人の集団に襲撃され、店は大破させられた。サンフランシスコの日本人街も、日系人は白人の襲撃におびえ、外出もままならない状況になった。

全米各地では、日中に抗議するデモが頻発し、日の丸を焼き捨てる光景が日本のテレビでも映し出された。

日米安保が破棄されたため、米軍はすでに日本から去っている。そしてその戦力はフィリピンにいる。この在比米軍は、自衛隊との戦闘に備えて臨戦体制にある、とも報道された。日本とアメリカが、第二次世界大戦以来、再び戦争を起こすかもしれない。中国軍との軍事協力があるとはいっても、日本国民に再び甚大な被害が起る可能性もある。

「戦争は、きつと起こるだろう。誇り高きアメリカ国民が、そのア

イデンティティともいうべき摩天楼を擁する世界一の大都會を、手放すはずがない。必ず戦争になる」

と西条は予測した。

アメリカ大統領エド・バックマンは、激しい葛藤に悩まされていた。彼は基本的にはアメリカ一國よりも地球全体を優先する思想の持ち主だ。しかしアメリカの魂ともいうべきニューヨークを失うことは、この国で生まれ育った人間としては耐え難かった。

連邦議会の突き上げも激しい。全米のマスコミも厳しい論調で「断固拒否すべし」と政府に迫っていた。

優柔不断な面を持つエドは、本心は戦いたくないが戦う、という中途半端な気持ちで、下院の推進する対日中戦争を承認した。すなわち二回目の太平洋戦争の開始が決定されたのである。

その情報が伝わると、西条首相は「受けて立つ」という決意を固めた。第二次大戦敗戦以来の長い年月、平和国家として歩み、戦争をしてこなかった自衛隊に、今“同じ地球人に対する攻撃”を命令しなければいけない。憲法九条が改正されて、海外での武力行使が認められてから既に三十年以上。来て欲しくはないが、来てしまったこの事態。こうなった以上、躊躇するわけにはいかない。

野党から何を言われるか、マスコミは、平和団体は。言われることは、分かっている。

しかし、今、指をくわえて見逃したら、人類が長年夢見た地球統一政府は絵に描いた餅になってしまう。

「ニューヨークの件は、譲歩しても良いではないか」という意見も少なくはない。しかし西条には、そうは思えなかった。国連はあくまでも独立した直轄地を持つべきであり、直轄地にその居を構えなければ、国連のアメリカからの独立は果たせない。

西条一個人は、後世に汚名をかぶっても構わないと思った。作戦に失敗し、戦犯としての罪を着ても構わない。総理大臣になった時から、その覚悟が出来ていた。

彼は一國の指導者である。政治家である。である以上、手を汚し

ても、一部の人間に災いを与えようと、全体の人々の幸福を導く義務が有る。そう腹を決めた。

彼は悪人かもしれない。いや、間違いなく悪人であろう。しかし悪人でなければ、乱世の政治家はつとまらないのかもしれない。

「事態は、緊急を要する。一分の空白も許されない」

「それから防衛大臣はマスコミに対してくれぐれも慎重に」

言い終えて、西条は会議室を後にした。

次の日、国会はもめた。委員会では強硬採決をめぐって肉弾戦になり、ハイヒールの女性議員が、果敢にも男性プロレスラー議員の頭を抑えつけて大暴れをした。本会議でも、演説中の長髪の与党議員が、野党の野次に腹をたて、壇上からコップの水をまき散らした。これをきっかけに大乱闘が始まり、若い議員同士がスーツの袖を破るような騒ぎになった。

街の声も賛否両論さまざまな意見が乱れ飛んだ。高学歴の中年女性と大学教授ばかりの「市民団体」は、駅前などで反戦のビラを配ったが、足を止めて受け取る人は意外に少なかった。一方で、大音量で古めかしい軍歌を流し続ける右翼の街宣車も活発に活動していた。すでに太平洋では自衛隊と米軍が臨戦体勢でにらみあっていた。

米軍空母キティホークはすでに出港している。巡航ミサイル・トマホークには核が搭載されているかどうかは不明だが、無いという情報もない。ステルス爆撃機、F2戦闘機、P3C対潜哨戒機などが続々と南の海に終結し、緊張感を高めている。海上自衛隊のイージス艦も、対艦ミサイル・ハーブーンの整備を終え、呉を出港した。陸自も上陸占領作戦に備えていた。その装甲車の横腹には日章旗が大きく描かれている。

太平洋上で両軍の衝突が起こったのは、深夜の三時過ぎであった。戦闘機による軽快な空中戦でこの戦争は始まった。

マッハで飛び交う戦闘機は、凄まじい轟音をあげ、太平洋の闇を切り裂いた。撃墜された機体が、人の命とともに炎の塊になって落

下していく。闇夜には、無数の煙と閃光が尽きることはなかった。兵力が大きいのは米軍だが、日中の空軍もよく粘り、攻防はほぼ互角のまま三時間が経過した。

やがて水平線に日が昇ると、地上戦も始まった。南の海に浮かぶ小さな島々で、陸上自衛隊と中国人民解放軍陸軍による上陸作戦が敢行された。キャタピラが砂を踏み、砲身が火を噴く。自動小銃を持った歩兵は、走っては伏せ、走っては伏せしながら、土と血にまみれていた。銃弾が飛び交い、手榴弾が炸裂した。

戦況は一進一退を続けている。勝敗の行方は、わからない。

その頃、永田町の首相官邸では「切り札」の最終チェックが徹夜で行われていた。戦争の勝敗は現場の兵士たちだけで決まるのではなく、政治の動きに大きく左右されることを西条はよく知っていた。おそらく、この「切り札」は、アメリカ政府を動揺させるはずだ。なぜならホワイトハウスの主はエド・バックマンからだ。西条はエド・バックマンという人物の思想信条、性格、性癖をよく調べていた。

日本時間午前六時三十分。日本政府は、世界中のマスコミとインターネットに対して、ある映像を公開した。映像は七分ほどの短いものであった。国連事務総長ヨハネ・ブツダ四世が、三本の旗に囲まれている。国連旗と、日の丸と、五星紅旗である。やがてヨハネ・ブツダ国連総長は高らかにこう宣言した。

「日中連合軍は国連軍であり、アメリカは国連の敵である」

そして画面が替わった。そこには自衛隊と中国軍の装甲車や護衛艦が映し出されていた。その横腹には、オリーブの葉と地球がデザインされた青い国連旗が大きくペイントされ、大きな文字で「UN」と印されていた。

さらに画面が替わり、兵士たちの姿が映し出された。日中二ヶ国の兵士たちは、左腕に青い腕章をつけている。腕章には黒い文字で「UN」と記されていた。

「この腕章は京都の西陣織を使った上質な布である」と英語でナレーションされ、日本語と中国語の字幕が付いた。

「我こそは国連軍なり」という正義のアピールである。

米軍は「賊軍」になった。

この映像は瞬く間に世界を駆け巡り、戦地の米兵の目にも入った。同時刻、それに呼応するように、陸上自衛隊は用意していた横幅三メートルの国連旗をいっせいに天高く掲げた。その数、約千三百。南の島々の激戦地に、ブルーの旗が林立すると、米軍兵士の士気は一拳に崩れ落ちた。

二十一世紀初頭までの人間なら、ここまで士気にかかわることはなかっただろう。しかし、セイヨウ星人が浦賀に現れて以来、ここ数年ほどの間に、国連を神聖視する思想がすみずみまで定着した。先進国ほどその傾向が強かった。愛国心に代わって“愛地球心”が崇高な理想として求められて久しい。先進国の高等教育を受けた人間の中で、誰も国連に逆らえる者などいなかった。

エド・バックマン大統領は、激戦の最中に突如退却命令を出した。「賊軍の汚名」をかぶりたくなかったのだ。「国連に逆らった逆賊」と後世の歴史家に言われ続けることを、エドは最も恐れた。

大統領の退却命令をきっかけに、米軍はやがて総崩れになり、太平洋を東へ去っていった。国連軍の勝利である。戦端が開かれてわずか十二時間後のことであつた。

水平線に日が沈むころ、南の海には静けさが戻った。

貴彦はこの夜、缶チューハイを飲みながら特番のテレビを見ていた。かわつちひろし

河内宏探検隊長が、未知の生物を探してジャングルを進んでいる。

扇情的な音楽と絶叫口調のナレーションが、探検隊の苦難と波乱万丈を強調している。

河内隊長が、巨大な毒蛇と戦っている時、突如としてジャングルには不釣り合いな電子音が鳴り、「ニュース速報」という字幕が現れた。「日中連合軍勝利、米軍撤退開始」

「米大統領、日中提案受け入れ。セイヨウ星条約を破棄。国連地球政府発足へ」

「えっ」

貴彦は驚きのあまり、チューハイを持つ手が止まった。あのアメリカが負けた。世界を圧倒する軍事大国のアメリカが。

「国連地球統一政府」なんて、所詮は夢物語で現実にはありえない、と貴彦は思っていたが、アメリカの敗北で現実味を帯びてきた。彼自身もまだ若いし、この時代の流行の最先端である「国連絶対主義」という思想に知らず知らずのうちに染まっていた。

そんな貴彦にとって、このニュースは人類の未来をバラ色に思わせる朗報だった。

（これから地球は良くなる。きっと良くなる）

貴彦はその事を確信した。日本だ、アメリカだ、中国だと、狭いこの星で地球人同士が争ってきた愚かな時代は、いよいよ終焉に向かうのである。

エド・バックマン米大統領は、戦闘で敗れたことよりも、「賊軍・国連の敵」になってしまったことにショックを受けていた。書物を読み過ぎて国連に逆らうことが不可能になってしまったエドに出来ることは、従順にニューヨークの主権を譲り渡すことだけだった。徹底恭順政策である。

ホワイトハウスでは、記者会見の準備が進められていた。CNN、BBC、ロイター、新華社、NHKなど世界各国のマスコミが場所取りをしている。無人の演壇と、その横には星条旗。記者席だけが人であふれてざわついていた。

やがて一人の男が入ってきた。言わずと知れたアメリカ大統領である。無数のフラッシュとシャッター音が会場を包み込み、記者会見が始まった。

このアメリカ大統領は、自国が戦争に負けたにもかかわらず、笑顔でこう語った。

「今日は地球にとって、記念すべき第一歩を印すことが出来ました。今、人類の長年の夢であった世界統一政府が誕生することが決定しました。人類は一つになったのです」

国連総会では、日本中国の共同提案が正式に採択されたのである。アメリカも賛成票を投じた。

この日、人類は歴史的な第一歩を踏み出したのである。国境の無い地球。今、まさにそれが実現した。

「世界統一政府が出来れば、国家と国家の戦争もなくなり、世界中の人たちが、わけ隔てなく友達になれる。そう、世界は一つ。世界は一つなんだ。これこそ人類が長年にわたって追い求めた理想郷であろう。ついに達成した。人類の叡智はついにここに至った」そんな気分が、世界中に満ちあふれた。

その夜、東京では神宮外苑で花火が上がリ、政府は祝賀ムードを演出した。さらに翌朝、内閣官房長官の大淵啓三おおふちけいぞうが、風呂敷に包まれた額縁を持って記者会見に臨んだ。

改元である。

帝の践祚みかどせんそと関係なく元号が改まるのは、なんと幕末以来のことであり、日本政府が国連地球統一政府発足をいかに大きな出来事であると認識しているかを示すものだった。

茶色の太いフレームの眼鏡をかけた大淵官房長官が、風呂敷をほどいた。カメラのフラッシュが一斉に光り、書道の達人が書いた文字が現れた。

「治明」しめい

この日から日本は、治明元年である。

国連地球統一政府発足というビッグニュースは、集団的な熱狂を起こすのに十分なインパクトがあった。世界中の先進国の大都市では若者が繁華街に集まり始め、ブレイキの効かない群衆と化していた。

とくに大阪ミナミの街では、歴史的な出来事に興奮した大勢の若

者たちが集まり、戒橋周辺はすでに歩くことも困難なほどの群集で埋め尽くされていた。若者たちは、オリーブと地球をデザインしたブルーの国連旗を手にしている。日本が戦争に勝ったというのに、日の丸を手にした者はいなかった。胸に大きく国連旗がプリントされた青いTシャツを着ている者もいる。

すでに時代遅れになった「ニッポン、チャチャチャ」に代わって若者のハートを掴んだ「コクレン、チャチャチャ」のコールが響きわたり、群衆は氣勢をあげていた。そして国連旗を大きく振りかざしながら、戒橋から道頓堀へと飛び込む者が後を絶たなかった。二人、三人、そして一人、また二人。ヘドロの川へのダイブは、尽きることなく続いていた。飲食店の力二の看板によじ登る者や、フライドチキン店の創業者の人形を川に投げ落とす者さえ現れた。

この道頓堀の醜態は、日本中に生中継されていた。満太郎もそれを見て一人である。風呂上りに“豆製ビール似飲料”^{ふるたいちそう}を飲みながら民放のニュースを見てみると、キャスターの古田伊知郎が、国際情勢について早口でまくし立てていた。やがて画面が切り替わり、道頓堀が映し出された。

「これだから関西は嫌いだ。あんな汚ねえ川に。バカじゃねえか」満太郎は、つまみのピーナッツを噛みながら妻の法子に言ったが、その表情はさほど不機嫌ではない。道頓堀ダイブは別にして、自衛隊の勝利と、国連地球政府の誕生そのものは、歴史的な快挙だと素直に喜んでいるからだ。

「まあ、浮かれすぎはいかんけど、これで国際問題も、宇宙人問題も、いい方向に進むんじゃないかな」

若い頃はプロレス中継で人気を博したという古田伊知郎の神経質そつな顔を見ながら、満太郎は三本目の缶を空けた。

「これで、世界から戦争が消えるのね」

「消えてもらわんと困る」

そのための統一政府ではないか、と満太郎は思った。

大阪など各地の繁華街の喧騒は一夜で終わり、日本も世界も、また変わらぬ一日を刻み始めた。ともあれ、地球人同士による「内戦」は終結し、国連による新時代が幕を開けることとなった。

（続く）

その3 第二章 廃国置県 前編

第二章 廃国置県

桜が咲いている。皇居の外濠では、満開の桜が見る者の目を楽しませていた。

戦争が終わった。世界は一つになった。きっといい世の中が来るに違いない。外濠の釣り人が、柔和な顔で缶ビールを飲みながら釣り糸を垂れていた。穏やかな春の日差しに、桜の花びらが、ひらひらと舞っていた。

西条隆が日本を発ったのは、ホークスが開幕戦でライオンズに敗れた次の日のことだった。向かった先はニューヨークである。

憲法を作らなければならない。この星を「統一された一つの国」とするために、国連政府の背骨ともいうべき憲法がなければ、国連は「政府」とはいえないだろう。国連“憲章”ではなくて国連“憲法”である。

既に国連軍、すなわち自衛隊と中国軍、に主権を委譲されていたニューヨークについた西条は、一ヶ月前にこの街に住居を移していた小久保通に会った。

「草案を見せてもらおう」

西条は小久保から分厚い書類を受け取った。表紙には「極秘」という文字がゴシックで印字されていた。文書は日本語である。最終的には英語で記さねばならないが、小久保は日本語で思考する脳を持っている。彼は憲法草案を日本語で作った。

数日後の会合までに西条は目を通しておかねばならないが、この日は政治の話をいっさいしないで、久しぶりに幼なじみとジョッキを傾け、よもやま話に終始した。窓から見える摩天楼の夜景は二人の友情に華を添えた。西条は夜が更けてから分厚い書類を持ってホテルへ戻った。

次の朝、ホテルで小久保の作った憲法草案に目を通した西条は、深刻な表情でつぶやいた。

「あいつ……」

親友との決別のはじまりだった。

雲一つない青空に、自由の女神が屹立している。そこからイースト川に入り、川を遡った所に、四角い国連本部ビルが聳えている。会議室では、小久保が憲法草案について説明をしている。西条、張志雄らが資料に目を落としつつ静かに聞き入っていた。小久保の抑揚を抑えた日本語だけが、室内に響いていた。

「現在の国連政府は、実体がありません。日本政府と中国政府が国連という名前で運営しているのが実像です。」

「国連軍というが、国連は兵隊も武器も全く所有していません。持っているのは各国政府です。つまり「連合軍」が国連軍を名乗っているだけです。二十世紀に国連が出来たと変わっていません」

小久保の憲法草案では、「どの国にも属さない国連直属の軍隊」を創設するという。やがては各国軍隊を全て解散し、すべての国は武装解除し、国連だけが唯一軍隊を持てるようにする。

「国連政府、国連職員、国連軍の兵、これらの人間はすべて国籍を離脱し、“どこの国にも属さない国連直属の人間”になるようになります」

「ちよつと待て」

西条が口を開いた。

「ということは、オレも、お前も、日本人ではなくなる、ということか？」

「その通り。私はすでに日本人ではない。地球人です。これから国連新政府の全員が、それぞれの国民であることをやめて、“自分は地球人である”という自覚を持って欲しいのです」

「国を捨てるということか」

「わからない人だな。地球が一つの国なんです。このことは皆さん、

ご理解しているはずでしょう」

小久保の話は理論的で明快なのが特徴だ。小久保はさらに続けた。
「国連直属軍は、全地球人を対象に、徴兵をします。徴兵された人間は、ただちに出身の国籍を離脱します」

「各国の中で、国軍の武装解除に応じない国があれば、国連直属軍は討伐します。たとえそれが日本であつても中国であつても」

さらに小久保は理念を述べた。

「有史以来、古代からずっと世界では国境紛争が起こり、それが戦争の大きな原因になってきました。“国境を無くす”のです。今、神奈川県で、横浜市と川崎市が、軍隊をもって市境争いの戦争をしますか？」

「本当の意味での国連軍が、武装解除した国と国の争いを調停します。そうすれば、インドとパキスタンのカシミール紛争も、中東のパレスチナ問題も、すべて解決します。国連が境界線を確定し、異議を一切認めない。異議を唱えるものは討伐すればよい。地球は一つなんだから」

西条が反論する。

「それでは“国連によるファシズム”になる心配はないのか？国連政府が、中東その他の国境紛争の調停に乗り出すのは良いが、有無を言わず反対国を討伐していいのか」

「ファシズムではない。国連政府は地球人みんなのものだ。そのために各国に武装解除してもらうのだ。国連だけが唯一武力を持つ存在になれば、この地球上から、一切の戦争はなくなる。国連が強くなることだけが、地球の平和をもたらすのだ」

「社会はそんな単純なものじゃない。世界には多くの民族がいて民族紛争はそうは簡単にならない。国連政府に要人を送り込んでいる民族だけが得をして、他民族を虐待することを正当化できてしまう危険はないのか」

中国人通訳が日本語で声をあげた。張志雄が小久保を援護したのだ。

「地球統一政府を作るために、我々は協力してアメリカを倒したのではなかったのか。国連政府が出来る前のことを思いだしてみろ。アメリカ一國が、事実上世界を支配していたではないか。そんな体制をぶちこわすため、長年苦勞して、尊い人命を失って、やっと念願の国連政府が出来たんじゃないか。国連の強化、それは軍事力を当然伴う。国連の軍事力が弱ければ理想も虚像でしかなくなる。私は小久保さんの草案を支持する」

再び小久保がしゃべる。

「急いでやらねばならないのは、『国連直屬軍』の創設だ。急ぎ、徴兵をしなければなるまい。各国の武装解除は今すぐは難しいが、直屬軍が整備されれば十年以内にも可能だと、私は予想している」
「それから国連の収入の仕組みも改革する。今までは、各国が分担金を負担していたが、この方法を廃止する。代わりに、国連が人民から直接税金を徴収する」

「各国の国税局は、全て国連の傘下に入り、税金は国家ではなく国連に納めてもらう」

「今まで国家がやってきた仕事を、これからは国連が全て代行するのだ。国という単位の行政組織は必要なくなる。だから“国税”というものも必要なくなる」

「……」

西条にとって、小久保が主張することは全くの初耳ではない。宇宙人來航以来、内外で繰り返されてきた議論ではある。しかし所詮は「理想論、極論」であり、実現可能なことだとは、正直いつて西条には思えなかった。もし本当に実現してしまったら、各民族の誇りやアイデンティティが傷つけられるのではないか。そんな気がしてならない。

西条は小久保案を（頭ではわかる。しかし、心ではわからない）といったところだろう。小久保は、西条の気持ちをわかっていた。しかし（余計な感傷など要らない）と声を大にして叫びたいくらいだった。

この会議には数名の国連政府の要職が出席していたが、多くは小久保と同意見であった。国連による地球政府という理念は、この時代の常識であり、熱狂的なイデオロギーと化していた。その熱烈な支持者たちが、今、この会議室にいる新政府の高官たちなのである。西条もその一人ではなかったのか。彼らからみると「西条は今更何を言っているんだ」と思えた。西条は孤立していた。

話し合いは数週間続いた。しかし議論は平行線をたどるばかりである。ここまで基本的な考え方が違っている以上、歩み寄りには不可能であると、出席している誰もが思うようになった。

西条がニューヨークを去ったのは、それから一ヶ月後のことである。「西条隆、下野^{げや}」

世界中のマスコミすべてが一面トップで伝えたこのニュースは、日本では好意的に受けとめられていた。「西条首相ついに決断」「一方的なニューヨーク新政府に不信感」と。

だが、世界の論調は違っていた。人類史上初めて誕生した「国連地球統一政府」。地球人類を希望に満ちた未来に導くであろうこの画期的な新政府に冷や水を浴びせ、その職務を放棄した西条に対し、厳しい視線を投げかけていた。

そして、日本が協力的でなければ、せっかくの地球統一政府も空中分解してしまうのではないか、という観測が世界中に広がり、先行きの見えない不安感が伝播していった。いったいこの地球は、この先どこへ向かうのだろうか。

*

「柔道とエンジニアで文武両道を目指す」と宣言していた貴彦だが、頂点を究めてしまった柔道にはすでに興味を失っていた。四年後、八年後の連覇を期待する周囲の声も聞かず、二十一歳の若さで貴彦は引退した。

引退後、貴彦がにわかに興味を持ったのが、株と金融とITだった。理工学部で優秀な成績を修めていたが、「すでに製造業の時代ではない」と、エンジニアを目指す気も失せ、

「これからは“モノ作り”よりも、情報とカネの時代だ」と、大学に在籍しながら友人と会社を設立した。

「金メダリスト花岡貴彦、衝撃の電撃引退から実業家への華麗な転身」と世間はもてはやした。

学生社員三人で旗揚げした彼の会社は、株式を上場するや、急成長を遂げていった。

「金儲けの世界でもトップを獲ってやる」

貴彦の鼻息は荒かった。国際政治がどう動こうとも、国連政府がどんな憲法を作ろうとも、自分は金儲けで成功すれば良い。とにかくそのことに貴彦は意識を集中していった。カネ、カネ、カネ。

“目に見える明確な形”だけが、信頼出来る。この万事流動的な時代に、金以外、いったい何を頼ればよいのだろうか。

一方若彦である。

彼はとにかく金が無い。工事現場で日雇いの仕事をしながら、ネットカフェで寝泊まりする毎日だった。その日雇いの仕事とて、見つからない日も多く、財布の中身が千円をきる日も珍しくはなかった。毎日が綱渡り状態で、一枚の百円玉が命綱のように思える時もあった。

「ボロを着てても心は錦」とはいうが、残金ゼロの不安は心をむしばみ、金が無いという現実が精神を卑屈にした。彼は知った人に出会うことを極端に恐れ、その可能性のある場所を避け続けた。若彦の精神は未だ病んでいた。いや、以前よりもひどくなっていた。そんな若彦にとって、ネットカフェで目にした「社長貴彦」のニユースは、目を背けたくなるものだった。

*

西条隆は東京に戻り、日本国総理大臣としての職務に専念することになった。一方の小久保通は、「初代国連大統領」に就任し、この惑星の最高権力者に君臨した。

小久保大統領のもとで、国連政府は本格的に改革に着手し始めた。まず各国の国税に関する役所を、全て国連の直属機関にした。これにより税金は国民から直接国連に入るようになった。

小久保の次の改革は軍である。徴兵制をしき、世界中から兵員を集め、国籍から離脱させ、国連人による「国連直属軍」を作ることである。

ある日、日本の若者のもとに「赤紙」が届いた。若者は国連直属軍のことをニュースでは聞いていたが、まさか自分が徴兵されるとは思っていなかった。第一、日本には徴兵制がない。自衛隊は完全志願制である。

しかし、自衛隊は志願制でも、国連直属軍は徴兵制なのである。国連憲法は日本国憲法を超越している。

日本だけでなく、ありとあらゆる国々の若者が徴兵され、その国籍を離脱しはじめた。国連直属軍の規模は急ピッチで増え続け、装備も最新のセイヨウ星技術の宇宙兵器をそろえ、地球上のどの軍隊よりも充実してきた。

国連直属軍が、圧倒的な戦力を整えるや、小久保大統領は全世界の国々にたいして武装解除命令を出した。

「各国は、一年以内にその国軍を解散し、すみやかに武装解除せよ。その意思なしとみなした国へは、武力攻撃を行う」

もし、「どこかの国」が軍隊を解散させない場合、「その国」と国連直属軍が戦うこともあるだろう。

*

三万人の目が彼を見つめている。

背番号51が、屈伸運動をしながらゆっくりと左打席に入った。九

年連続200本安打の八チロー外野手は、鋭い目でマウンド上の人物を見上げた。

彼は大きく振りかぶり、インコース低めにストレートを決めた。

「152km/h」

電光掲示板に、満員の観客がどよめく。

始球式では空振りをするのが決まり事である。が、素人とは思えない剛速球に八チローは呆然とし、そのバットはピクリとも動かなかった。

花岡オーナーは、笑顔の一つも見せずに悠々とマウンドを降り、平然とグラウンドから去っていった。新球団の記念すべき開幕戦に、ハナオカスタジアムは超満員の観客で埋め尽くされ、オーナー自らがエース顔負けの快速球を披露した。

「社に戻られるのですか」

「ああ」

貴彦は始球式を終えるとそそくさとスタジアムを去り、会社へ向かった。プロ野球オーナーというステータスと宣伝効果には興味はあっても、選手やチームやファンへの愛情は薄く、試合の行方が気になる様子はなかった。

会社に戻った貴彦は、もう野球のことなど頭の片隅にもなく、株式市場に夢中になっていた。夜には六本木で豪遊し、帰宅したのは十時を過ぎていた。

彼の自宅はヒルズの最上階にある。ポストには多数の郵便物が来ていたが、その多くはダイレクトメールの類であり、貴彦は無造作に机に置くと、内容を見ることなく浴室へ向かった。

几帳面な彼は、一人暮らしであっても風呂上がりにはパンツ一枚で歩き回るようなことはしない。入浴後、きちんと寝間着を着て髪を整え終わると、何気なく郵便物の山に目をやった。

「ん…」

一通の封筒に、貴彦の目は釘付けになった。

「国連直属軍極東方面第六師団」

それは「召集令状」だった。

「嘘だろう」と思ったが、まぎれもない現実であった。

何があっても取り乱さない貴彦は、いつも通りに歯を磨き、ベッドに入り灯りを消した。しかし昼間の激務にもかかわらず目が冴えて眠れない。

（これから会社はどうなる）

その事が頭の中の大半を占めた。

オレの人生はどうなる、という哲学的な問いや感傷よりも、社長としての業務上の手順が頭の中を占めた。貴彦は、いつのまにか起き上がってあぐらをかいていた。

（おそらく二、三年になるだろう）

あの仕事は誰にまかせて、あの部署には誰を配置して…、といった人事構想で頭がいっぱいになっていた。

暗闇に浮かぶ目覚まし時計の針が二時をさしている。貴彦は電気をつけて台所へ行き、缶ビールを飲んだ。眠れなくて深夜に飲むことなど、未だかつてなかったことである。寝室に戻って部屋を暗くすると、再びあぐらをかいた。

（自分は社会的にも成功し、文武商三道で天下を獲りつつある。そんなオレが、コンビニで深夜に座り込んでいるそこの奴らと同列に扱われるのか）

それだけではない。

（オレよりもはるかに人間の質が劣る上官に命令され、くだらないヤツらとも一緒に集団生活をしなければならぬ）

そう思うと腹がたってきた。その事を思えば思うほど悶々としてきた。

暗闇に浮かぶ目覚まし時計の針が三時半をさしている。貴彦は電気をつけて台所に行き、麦茶を飲んだ。寝室に戻って部屋を暗くすると、再びあぐらをかいた。

貴彦は頭の切り替えが早い。抗えない運命を嘆くよりも新しい野望を見つけ出そうとした。階級社会である軍に入る以上、人の上に立

ちたい、と思った。

（軍の世界でも出世して、人に命令する立場に立ちたい。多くの兵隊を自在に動かしてみたい。勲章も欲しい）

どこまでも上昇志向の強い男である。

彼は依然あぐらをかいている。東の空が明るくなってきた頃、貴彦の思考は国際政治へと移った。

（国連地球統一政府の誕生は、画期的なことだ）

貴彦は心底そう思っている。

（人類がずっと夢見てきた理想が達成されたのだ。だからこの地球上に住むすべての人間は、国連地球政府を支えていかなければならない。それが地球人の義務である）

彼は小久保通の思想が大好きだ。

（国連政府に抵抗するような人間は、地球人の一員として許し難い）
会社の経営者である貴彦は、上に立つ者の立場でものを見ていた。
（そんな奴ら、“地球人の敵”を討伐するために、オレは命を賭ける。命を賭けるに値する仕事だ）

そう思う事によって、徴兵される事を自分自身で納得しようとした。
強い意志で、自分に言い聞かせた。そうでなければ、社会的に成功している自分のキャリアが突如として中断し、生命の危険まである世界に放り込まれる、という現実を受け入れ難かった。

思考がまとまってきた頃、いつもの起床の時刻になった。貴彦はこの夜、一睡も出来なかったが、すべての考えをまとめ終えて、すつきりした表情で身支度を始めた。ひげを剃っている彼の顔には、睡眠不足の疲れなど微塵も出ていなかった。

*

関東はまだ梅雨があけない。梅雨前線は日本列島の真ん中で、一休みするかのように居座っていた。

このころ国連大統領はニューヨークにあって精力的に動いていた。

なにかに取り憑かれたように改革の道を突き進む小久保は、圧倒的な武力を背景にパレスチナ問題の解決に挑んだ。

「パレスチナとイスラエルは国交を結ぶこと。そして聖地エルサレムはパレスチナの領土とする」

これには当然イスラエルから強い反発があつたが、圧倒的な国連直属軍の前には従わざるを得なかつた。世界の長年の懸案であつたパレスチナ問題がついに解決したのである。

「力こそ正義なり、力があるから平和になれる」

そう小久保は言いたげであつた。

次は、カシミールである。インドとパキスタンが領有権を主張するカシミールも、国連直属軍の圧倒的な力で中央部に線引きをし、しるる両国を抑えて「平和解決」をみた。

こうして国連政府は、次々と世界中の紛争を解決してまわつた。あれほど長い年月解決できなかった問題が、まるでウソのように、早い決着をしていく。当事者には不満だったが、直接関係のない国のマスコミは絶賛した。

「これこそ人類が長年夢見てきた理想の社会だ」と。

「今、世界から永遠に戦争が消えつつある。すばらしい世の中になった」

「世界は、地球は、人類は、今、一つになった。『世界は一家、人類は皆兄弟』まさにそれが今実現したのだ。国連万歳」
そんな記事が新聞にも雑誌にも、ネットにも増えていった。

領土問題は、日本にもある。

すなわちロシアとの北方四島であり、韓国との竹島である。小久保は、この問題にも乗り出した。

西条は、小久保からの公文書を受け取つた。

「国後、択捉、色丹、歯舞はロシア領。竹島は韓国領。尖閣諸島および沖縄は中国領とする。日本は速やかに中国に対し、尖閣諸島と沖縄を引き渡すこと」とあつた。

日本国内は騒然となった。右翼的なサンペイ新聞はもとより、普段は左翼的な夕日新聞までが、国連政府の決定を非難した。

「小久保の国連大統領選挙の勝利には、中国の張志雄の力添えが大きかった。だから小久保は、その“報酬”を与えようとしているのではないかと、すれば、“島を売って大統領を買った”ことになる。売国奴ではないか」

と多くの人々が噂した。もはや右翼も左翼もなかった。右から左まですべての政治勢力が、言論機関が、学生が、サラリーマンが、怒っていた。

小久保にしてみれば、国連とは「公」である。日本国は「私」である。自分の出身国の日本に甘い政策を採ることは、他国に対して示しがつかない。自分が元日本人だからこそ、日本に厳しくしなければならぬ。

しかし日本の世論は厳しい。日本が文字通り血を流して新政府を作り上げたのに、なぜこんなことになるのか。小久保は裏切り者だと。

ニュースキャスター古田伊治郎は、今夜も激しい口調で国連大統領を非難している。テレビの前で、満太郎も法子も、小久保に腹をたてていた。国連政府成立で、きっと良い世の中が来るだろうと思っていたのに、何か変な方向へ動いていくような、言いようのない怖さを感じていた。長男は行方不明、次男は軍隊に取られてしまい、底知れぬ不安が夫婦の心を重くしていた。

防衛大臣の桐生利秋きりゆうとしあきはいう。

「今の自衛隊は決して国連直属軍に劣らない。装備こそ旧式だが兵の士気は高く、指揮官は優秀だ。世界最強といっても差し支えない。イスラエルやインドとは違う。国連直属軍など怖くはない」

日本政府は、国連の勧告を正式に拒否する旨を回答した。
日本と国連。西条と小久保。二人の対立は決定的になった。

*

貴彦の新兵教育が始まったのは、七月の下旬のことだった。今日から三週間、山梨県富士山麓の合宿生活で、国連兵士としての思想教育を受けるのである。

合宿所の控え室に集まった同年代の若者たちを見た貴彦は冷笑を浮かべた。

（どいつもこいつも、バカそうな顔をしている。まともな脳味噌を持っていそうなのは、一割ぐらいしかない。ヤンキー野郎に無気力男。オタクに暴走族に肉体労働者とニートか）

大勢のバカ面を見渡すと、ふと大柄な背中に目がとまった。見るからに覇気がなく無気力そうで、貴彦が最も軽蔑するタイプのようなが、その背格好に見覚えがあつた。

「あ、あいつ」

貴彦は怒りがこみ上げてきた。

「おいつ！」

「今までどこで何してた！おまえの借金を、親父とオレで肩代わりしたんだぞ。正月も戻らず、連絡も取れず、大学も辞めて」

「お袋がどんなに心配したか知ってるのか。オレたちがどんなに迷惑したのか分かってるのか」

「この親不孝者！」

九年ぶりの兄弟再会である。

やつれ果てた若彦は、貴彦の顔を見ることが出来なかった。返す言葉は何もなく、ただ無言でうなだれるだけだった。

社会的な成功を手に入れた貴彦は、今回の徴兵で、一時的ではあつてもその地位を失ってしまった。一方若彦は、のたれ死に寸前の生活から一転、衣食住を保証された。貴彦にしてみれば、成功者の自分が落ちこぼれの兄と同じ境遇になった。いわば勝ちゲームをご破算にされたのである。それだけでも腹立たしかった。

貴彦は、芯から軽蔑しきつた冷たい目で若彦をにらみつけた。にら

まれた若彦は、貴彦の視線がただただ怖かった。

魂が抜け落ちそうなストレスから解放してくれたのは、スピーカーから流れてきた教官の声だった。

「ただちに隣の教室に入りなさい」

若彦は救われた。

高校の教室ほどの広さの部屋には、折りたたみパイプ椅子が並べてある。若彦たち新兵は、そこで教官を待たされた。窓は全て真つ黒の遮光カーテンで覆われ、昼なのに太陽の光は全く部屋に入らないようにしてあった。教室の前方には、左右に大きなスピーカーが設置してある。日本の有名メーカーの物で、かなりの高級品である。待つこと約二分。突如照明が薄暗くなり、大音量で音楽が流れ始めた。映画「未知との遭遇」のテーマ曲である。音楽にのって教官あさはらしやうこの朝原翔子が現れた。

（ずいぶん大袈裟な登場の仕方をするな）

貴彦はあきれた。

合宿は、予想以上にハードだった。完全な缶詰状態で、携帯はもちろん、電話もメールも禁止され、テレビもラジオも新聞もインターネットも無く、完全に外の世界と途絶していた。しかも自由時間はほとんどなく、セッションの合間の休憩時間も、トイレに行つて飲み物を飲んだらほとんど終わるほどの慌しさだった。

双子の兄弟は、その後全く口をきかず、視線を合わせることもなかった。若彦は弟と視線を合わせるのが怖く、貴彦は兄の事を見るのも嫌だった。

さまざまな講義やロールプレイング演習があつたが、その都度スピーカーからは、情緒的な音楽が流れ、照明が暗くなったりした。バツハの「G線上のアリア」、ジョン・レノンの「イマジン」、あるいは映画「タイタニック」のテーマ曲などが、講義内容にに応じて効果的に響き渡った。教官の言葉は扇情的、感傷的であり、反対意見は許されない雰囲気濃厚に満ちていた。

演出された薄暗い照明と大音響のBGMの中で、新兵たちは大声

を張り上げ、標語を繰り返して朗読した。

「私は地球人です。日本人ではありません」

「国連は、日本よりも優先します」

「国連は、親兄弟よりも大切です」

「私は、国連のために全てをささげます。」

「国連の敵は、人類の敵だ」

人間の深層心理を突き、さまざまな心理学的手法で、時には涙を誘ったり、時には怒りを誘発したり、時には気分を高揚させ、達成感を与えた。その都度、教官の誘導する方向に感情が動いていく。そのプログラムは巧緻を極めていた。

合宿の間、貴彦は何度も泣いた。感情を抑制することが得意なはずの彼が、これほどの涙を流したのは、幼児の時以来であろう。貴彦だけでない。他の多くの受講者も同様だった。時には涙が枯れるほど泣き、時には顔を真っ赤にして怒り、時には安らいだ表情で笑った。

が、一人若彦だけは冷めていた。冷静な目で周囲を見ていた。あの貴彦が別人のように熱くなっている事に、奇妙な違和感を感じていたからだ。高学歴の秀才ほど、教官の言葉に見事に乗せられ、熱狂している。

（自分は頭が悪いから感動しないのだろうか？）

若彦はプログラムの内容にも胡散臭さを感じていた。が、表面上従わなければならない。目立たないように周囲に合わせていた。

マニュアル通りにプログラムを進めてきた朝原翔子ら教官たちは、受講者が予定通りに泣き、予定通りに怒り、予定通りに笑った事に満足していた。

このプログラムは、高学歴のエリートほど強く影響を受ける傾向があった。国連直属軍指導者の説く世界観は、論理的に精密に組み立てられており、頭の良い若者ほど、その論理に心を絡め獲られてしまふのだった。

三週間の合宿が終了した時、貴彦ら受講生は顔つきが変わってい

た。あきらかに思想が変わっていた。いや、変わったのは人柄かもしれないなかった。久しぶりに社会に出た新兵たちは、今日が金曜日であることを初めて知り、むさぼるようにテレビをつけて新聞を読んだが、マスコミの情報にひどく違和感を感じた。

合宿が終わったからといって、家庭に帰れるわけではない。これから本格的に軍隊生活が始まるのである。外部との電話やメール等連絡は許されたが、二十四時間生活を共にする人間は、すべてあの合宿を経験した者だけだった。

貴彦と若彦は、こうして日本人から国連兵士へと変貌を遂げた。

＊

「大統領が日本人だから、日本には甘いんだ」

イスラエルとインドが不満をもらしている。国連政府の強いリーダーシップに譲歩して領土を失った両国から見れば、日本だけが国連の命令をきかないのは許せない。不満は日本政府よりも国連政府に向かった。

小久保は大統領執務室に掲げられた国連旗を見ながら、さまざまな思考をめぐらした。

（このような不満が世界各地で大きくなれば、国連による世界政府など有名無実と化すだろう。自分が日本出身だからこそ、日本に対して厳しくしないといけない）

小久保の机の上には塵ひとつない。秘書が持ってきた書類のハンコが一ミリでもズレていれば眉間にしわをよせて指摘する正確無比の神経質男が、驚くほど大胆なことを考えていた。

（やるしかないだろう）

小久保大統領はついに決断した。

「ファイナルアンサー？」

「ファイナルアンサー」

「では、この七百五十万円には戻れません」

司会の佐野門太さのもんたが、小切手を真つ二つに破り捨てた。

木曜日の夜七時は必ずクイズ番組を見る。満太郎は毎週欠かさず人気のクイズを見ていた。佐野門太が回答者の顔をみつめたまま沈黙し続けている時、突如として電子音が鳴り、「ニユース速報」という字幕が現れた。

「国連政府、はいこくちけん廃国置県の実施を決定」

満太郎はつぶやいた。

「廃国置県？バカな。日本が無くなるなんて」

廃国置県。すなわち、日本国の消滅である。

国連本部のホールでは、記者会見の準備が進められていた。CNN、BBC、ロイター、新華社、NHKなど世界各国のマスコミが場所取りをしている。無人の演壇と、その横には国連旗。記者席だけが人であふれてざわついていた。

やがて一人の男が入ってきた。言わずと知れた国連大統領である。無数のフラッシュとシャッター音が会場を包み込み、記者会見が始まった。内容は次の五点につきる。

一、各国は軍隊を解散すること。

二、各国政府は、「国」という名称を廃止すること。漢字文化圏では、「県」と表記し、英語では「prefecture」とすること。その他の言語も、それに準じること。

三、旧各国政府代表は、「県知事」となり国連政府の命令に従うこと。

四、県知事は、選挙ではなく国連政府が任命する。

五、国連大統領は、県知事を解任することが出来る。

記者席がざわめいた。県知事の任命と解任。そこまで大統領の権限は強かったのか。

ゆつくりと、それでいてしっかりした口調で小久保は手にした原稿を読み続けた。時折記者たちに鋭い視線を注いだものの、会見の大

半の時間は机上の紙に目を落としていた。アドリブの言葉を発することなく淡々と予定された演説を終えた。

記者たちから多くの質問が寄せられたが、大統領は核心に触れる回答は避け、短時間で質疑を打ち切り、予想外の内容に混乱するマスコミをよそに会見場を後にした。

西条は、「日本国総理大臣」から「日本県知事」になった。「来るべきものがついに来た」というのが実感である。

とはいえ、日本では昨日と全くかわらない日常が過ぎていた。内閣も国会も国民世論も、自衛隊を解散しようなどという動きは全く見られない。マスコミもあいかわらず西条を「首相」と表記し続けている。

「小久保が何を言っても、そんなの関係ねえ」という気分が日本中に充満していた。依然として国連と日本県との溝は埋まらない。

（続く）

その4 第二章 廃国置県 後編

第二章 廃国置県 後編

*

若彦と貴彦が日本を去る日が迫ってきた。何をやっても優秀な貴彦は、その適性が認められ、パイロットになる訓練をフロリダで受けることになった。一方若彦は、陸軍歩兵部隊に配属され、オーストラリア行きが決まった。

国内での訓練を終え、それぞれの配属が決まった新兵たちに、入隊以来初めての休日を与えられた。それは日本を発つ前日であった。

この、おそらく最初で最後になるであろう自由の日を、そして日本最後の日を、兄弟で一緒に過ごしたいとは、二人とも思わなかった。

貴彦は会社へ顔を出し、若彦は都心の雑踏をあてもなく歩いた。

濠の向こうに八角形の屋根が見える。日本武道館である。若彦はふと高校時代を思い出した。あの屋根の下で試合をしたい。全日本選手権で優勝してオリンピックに行きたい。そんな夢をみて、激しい稽古に耐えてきた日々だった。

大寒を過ぎた東京の夜は氷点下まで冷え込んだ。千鳥ヶ淵の水面には、うつすらと氷が張っている。若彦は使い捨てカイロを頬にあてた。

*

廃国置県の大統領令から二ヶ月が過ぎ、軍隊を解散する国、いや県が相次いだ。

が、いまだに国軍解散の動きを全く見せていない国（県）が一つあった。

日本である。日本政府は主張する。「自衛隊は軍隊ではない」と。業を煮やした小久保は、強権を発動した。

「西条日本県知事、解任」

このニュースは世界中を駆けめぐり、ニューヨークとロンドンの株価を乱高下させ、日本国債は紙屑同然になった。日本中の大都市では号外に人々が殺到し、電器店のテレビ売り場には、臨時ニュースを見ようとする大勢の人が群がった。

新しく日本県知事に決まった人物は、ピーター・ボンヤスキーというオランダ人である。日本語も全く出来ず、来日したことさえなく、日本文化に造詣が深いわけでもない。空手の有段者である事以外は、まるで日本とは接点のない人物である。このオランダ人が東京へ向かったのは、ひな祭りが近づいた二月末のことである。

国連政府特別機はアムステルダムを離陸し、日本へ向かった。約十時間のフライトを経て、新日本県知事に乗せた特別機が日本海上空にさしかかる。いよいよ日本領空に入るというその時、二機の戦闘機が接近してきた。

「領空侵犯である。ただちにこの空域から去りなさい」

日本語なまりの英語である。

百里基地からスクランブル発進した航空自衛隊機は、警告を発するや、ミサイルを目標物にロックオンした。

「我々は国連政府専用機である。日本県知事に乗せている。ピーター・ボンヤスキー知事だ。羽田まで誘導せよ」

「それは出来ない」

「県知事の命令だ。国連政府の命令だ。我々は東京へ行く」

「領空には入れるな、と我々は命令を受けている」

命令を出したのは桐生防衛大臣である。

国連特別機は進路を変えようとしな^{げんだともよし}い。パイロットの源田友義はミサイル発射ボタンに指をかけた。

「この一発が世界を変えるかもしれない」とは、源田は思わなかつ

た。自衛官として決められた任務を遂行するだけだった。源田は指に力を込めた。

次の瞬間、前方の“敵機”は炎の塊になって日本海へと落下していった。

もう後戻りは出来ない。

メンツを潰された国連地球統一政府は、日本政府を叩き潰すべく、軍事力を使うであろう。戦争が始まるのだ。日本対国連の。

*

南緯十五度八分の洋上を、国連直属軍の軍艦チンダイ号が航行している。若彦は空一面を覆うドス黒い雲を見上げていた。

いよいよ彼は、自分の母国日本と戦うのである。自分の生まれ育った郷土への愛も、肉親への思いも、友人を思いやる心も、全てが地球のために戦うというモチベーションの妨げになると、あの合宿で教官が言っていた。地球全体のためには、個々人の小さな感情は捨てなければいけないと教わってきた。

軍艦に乗ってはいいるが若彦は海軍ではない。陸軍である。タバル島への上陸作戦に参加する部隊として艦で輸送されていた。

「日本県知事撃墜事件」は世界中を震撼させた。国連機撃墜を命じたのは桐生であり、それを事前に承認したのは西条である。西条は後悔していない。

日本中が沸騰している。他の人物が総理大臣でも、他の者が防衛大臣でも、きつと同じ決断をしたはずだ。ここで国連と一戦交えることは、民族としての誇りを失わないために必要だ、との意見が大勢を占めた。

そもそも日本語も分からず日本のことを何も知らないようなオランダ人に、日本の首相の代わりをさせるなど許されることではない。その国の民意を無視して、そのような人物を送り込むなど、「国家

主権」に対する重大な侵害としか思えない。そのような国連の非道を糾弾し、強腰を見せることは絶対必要である。それにより、今後、国連が世界の国々（日本では未だ“県”とは表現していない）に、その国とは縁もゆかりもない人物を一方的に送り込んでくるようなバカな真似をさせてはならない。

それに沖縄も尖閣諸島も、日本固有の領土である。沖縄が日本でないなど、考えられない。沖縄人にとって漢民族は全くの異民族である。

＊

自衛隊対国連直属軍の戦争は、深夜の太平洋上で始まった。

両軍の兵器の差は歴然としている。自衛隊の装備は純地球産であるのに対して、国連直属軍は、セイヨウ星人の宇宙技術を採用した最新型であった。国連政府がセイヨウ星と条約を結んでいる以上、国連の敵である日本が、宇宙人の軍事技術を得ることは不可能だった。

国連直属軍の中で最も戦意が高かったのは、イギリス人ジョージ・タイラー大佐率いる航空隊である。貴彦はそこにいた。

貴彦はコックピットに身を沈めた。空母とはいっても滑走路などない。円盤型セイヨウ星式戦闘機には必要がなかった。垂直に離陸するや、急加速で旋回し、敵機を待ち受けた。

“敵”が来た。敵は日本人である。

源田友義はコックピットに身を沈めた。約三五〇メートルの滑走路を走りきり、離陸するや、急加速で旋回し、敵機の真っ只中に突入していった。

貴彦は、正面に源田の自衛隊機を見た。

「このオレと一騎打ちをしようというのか」

鼻でせせら笑うと、貴彦は得意の曲芸飛行を演じて見せた。地球製航空機に乗る源田は、動きに全くついていけない。アクロバティ

ツクな機体操作を駆使して、貴彦は源田の背後に廻り込んだ。標的は目の前である、あとはただ撃つだけのことだった。

「お前らとは、レベルが違うんだよ。イエローモンキー・ゴー・ヘブン」

貴彦は、すでに日本人ではなかった。

貴彦は、その後も次々と自衛隊機を撃ち落した。兵器の優位性と、彼の曲芸のような機体操縦に、自衛隊戦闘機は翻弄された。何をやっても人並み以上の能力を発揮する貴彦が、敵よりも性能の優れた戦闘機に搭乗している。

「だせえ」

貴彦には自衛隊機の動きがひどく鈍重に見えた。敵の攻撃を楽々掻い潜り、簡単に撃ち落とし、そして眼下の護衛艦にミサイルを撃ち込んだ。照準をロックし、発射ボタンを押すと、やがて自衛隊護衛艦の右舷に火の手が上がるのが見えた。その火の中で同胞の日本人が死んでいるとか、そういう事を感じる事はなかった。

（なんだ。戦争ってこんなものか）

貴彦は日本の自衛隊がひどく無能に見えた。日本人はバカだとさえ思った。

轟音とともに、すさまじい衝撃が襲ってきた。前のめりに倒れ込んだ海上自衛隊二等海士、天草三郎は、咳をしながらゆっくりと起きあがった。生きていた。

周囲を見渡すと、被弾前とは別世界がそこにはあった。ふと、足下を見ると、ついさっきまで隣にいた同僚の宮本小次郎が死体になっていた。顔の左半分が無かった。

（昨日の夜にケンカしたきり、謝っていなかったな）

天草はその事を悔いた。が、感傷的になっっている暇などない。激しい攻撃はなおも続いている。剣道でインターハイ優勝経験のある宮本小次郎の死体の上には、すでに別の水兵の新たな死体が折り重なっていた。

「主よ、我を守りたまえ」

天草は制服に秘かに忍ばせた十字架に手をやった。

やがて艦が大きく傾き、大量の海水が押し寄せてきた。

天草三郎、享年十八。この春、長崎のカトリック系私立高校を卒業したばかりだった。

約一ヶ月の戦闘で、航空自衛隊はほとんど壊滅に近い損害を受けた。制空権は今や完全に国連直属軍にあった。空を制した国連直属軍は、かねてから計画していたタバル島への上陸作戦を敢行した。このタバル島は、日本の命運を握る重要な島である。もしこの島を国連直属軍が奪えば、日本本土への空襲が可能になるのである。東京へ、大阪へ、名古屋へ、日本中に爆弾の雨を降らせることが出来る。タバル島は日本の最終防衛ラインといえるだろう。

水平線を覆うほどの大艦隊の群れが、小さな島に押し寄せた。そして沿岸に停泊するや、小型ボートに乗り換えた上陸部隊が、波打ち際に殺到した。

頭上には味方の戦闘機とヘリが旋回し、援護してくれている。上から攻撃される心配のない国連直属軍は、余裕を持って上陸作戦を始めた。空と海から猛烈な砲火を浴びせながら、水陸両用戦車と歩兵部隊が、次々と上陸していった。

翌朝、日の出とともに、若彦らの部隊は密林の奥地へと進撃を開始した。高温多湿の熱帯雨林は、植物に凄まじいまでに旺盛な繁殖力を与えている。部隊は、行く手を阻む蔓草をナタでなぎ倒しながら、一列縦隊で進んで行った。

密林に身を隠し、先に相手を発見した側が撃つ。そんな白兵戦が展開された。

若彦もマシンガンを乱射し、手榴弾を投げながら、ジャングルを駆け回った。

途中、何度も“敵”の死体を見た。敵は日本人である。蒸し暑い過

酷なジャングルで、若彦は日本人と戦い続けた。

今、北東アジアの戦線に、世界中が注目している。後の世に「北東の役」と称されたこの戦争で、最大の激戦地が、このタバル島だった。最新宇宙兵器を持ち、空軍では圧倒している国連直属軍も、前時代的な接近ゲリラ戦に多数の死傷者を出した。

自衛隊は必死に抵抗した。母国に残してきた妻のため、子供のため、恋人のため。故郷に爆弾を落とさせないため。

自衛隊員たちは、まさにこの日のために税金で飯を食ってきたのである。今、この時に防御線を死守しなければ、何のために国民の血税を食んできたのか。それが、この時のタバル島防衛部隊の心意気だった。

一方、若彦はこの戦争を戦う意義を見いだせないでいた。自分が任務を果たせば、日本に爆弾が落ちるのである。日本人を殺すために自分は働いているのである。

（いったい何のために自分はここにいるのか？）

（なぜ自分が日本人を殺さなければならないのか？）

この島に来て以来、この戦争への疑問は日増しに膨らんでいった。

タバル島の自衛隊は確かに国連直属軍を苦しめた。密林のゲリラ戦で多数の敵を倒し続けた。

だが、倒しても倒しても、国連直属軍は尽きることなく押し寄せて来た。いくら撃破しても、またすぐに後方から新しい部隊がやってくるのである。それに対し、自衛隊は減っていくばかりである。

国連直属軍は数を頼りに大攻勢をかけ、ひた押しに押してきた。自衛隊にとって、敵の兵力の大きさと物量の多さは、戦術や作戦でカバー出来るレベルをはるかにこえていた。

すでに戦いは消耗戦になってしまった。圧倒的な戦力の差は、どうにもならなかった。やがてタバル島の自衛隊は、弾薬も食糧も不足するようになった。日本本土からの輸送ルートは、制空権と制海権

を持つ敵によって遮断されていた。

上陸作戦が始まって二ヶ月。ついにタバル島は、その全域が国連直属軍の手に陥ち、自衛隊は撤退した。

任務を遂行したステイブ・ルーカス大佐は、満面の笑みを浮かべて兵士たちをねぎらった。苦しんだ末の勝利に、兵士たちは沸き立った。

上官の勝利宣言に、若彦は隣にいたアマデウス・ベートーベン伍長と抱き合って、ガッツポーズをつくって見せた。

満面の笑顔のまま簡易トイレに行った若彦は、ふうつと長い溜め息をつく和下を向いて頭を抱えた。笑顔を作り直して、トイレから出た若彦は、嬉しそうに戦友に手を振ってみせた。

*

日本本土への空襲が始まった。

タバル島の国連直属軍基地からは、続々と長距離大型爆撃機が飛び立っていった。

貴彦も爆撃機に乗り、東京に、大阪に、名古屋に、札幌に、福岡に、焼夷弾を落とし続けた。自分の落とす爆弾で多くの日本人が命を落とすことに、疑問など少しも感じなかった。

「国連地球政府が勝つことで、“同じ地球人同士の戦争”がなくなり、世界平和が達成できる」と、あの合宿で教官が教えてくれた。

貴彦はその教えを心から信じていた。

貴彦の落とした爆弾はアメ横商店街を焼き、上野寛永寺を灰にした。不忍池は焼死体で埋め尽くされた。

さらには、自分がオーナーをつとめたプロ野球のフランチャイズ球場にも、空襲をしかけた。世間をあつと言わせた球団買収。球場名をハナオカスタジアムと改称し、オーナー自らが始球式で剛速球を披露したあの野球場に対しても、彼は躊躇することなく爆弾を落とした。

慶早大学のキャンパスにさえ、貴彦は焼夷弾を落とした。自分で強く志望して、懸命に勉強して入った大学。あのキャンパスで過ごした四年間。自分が白衣を着てデータをとった実験室は破壊され、柔道場も炎に包まれた。

貴彦は少しも躊躇しなかった。地球人類のためである。自分の小さな思い出なんて、地球の将来に比べれば、どれほどの価値があるというのだろうか。

貴彦は、無能な日本人どもを殺戮し続けていた。それが任務であり、国連のためであり、人類のためだからだ。

「宇宙の中の地球」

この美しい地球は、まだまだ宇宙の中では後進星である。そんな我が地球を、“星際社会”の中で名誉ある地位に引き上げるためには、国連政府のもとに「一つの国」としてまとまっていかなければならない。これは地球人類のためである。

民族だの、祖国だの、そんな“小さいこと”はどうでもいい。そんな古い昔の考え方をもった、頭の硬い前時代の人間は、この地球上から抹殺しなければならない。無能な日本人には消えてもらう。それがたとえ兄であろうが親友であろうが、親であろうが。

貴彦には、使命感があつた。私生活での幸福だの、団欒だの、友情だの、そんな事にはもはや興味は無かつた。ただ地球のために尽くすこと、それだけが貴彦を突き動かしていた。

さらには、彼の所属する部隊は同僚も上官も皆ヨーロッパ人であり「日本出身者だから敵に温情をかけている」と見られたくはなかつた。他の軍人よりも敵に対して苛烈であるところを見せたかつたし、競争心の強い貴彦としては、どんなことでも一番になりたかつた。一機でも多くの日本の戦闘機を撃墜したかつた。一人でも多くの日本人を殺したかつた。

岡山と佐賀に、セイヨウ星式「新型爆弾」が投下された。その報を受けた西条は、長らく口にしていなかった鹿児島弁で桐生にこう言ったという。

「もう、ここらでよか」

八月のある暑い日。日本では、正午から全てのテレビ局で同じ放送が放映された。衛星も地上波も、ケーブルも。テレビだけではなくラジオも、政府による特別放送を流した。

国民は日本の敗戦を知った。

この日、不思議なほど日本人たちは静かだった。セミの声だけが、いつもとかわることなく喧噪を奏でていた。

数日後、厚木飛行場に真っ黒いサングラスに大きなパイプをくわえた国連直属軍司令官が降り立った。ダクラス・マッサカサマ元帥である。

西条と桐生は身柄を拘束され、戦争犯罪人として軍事法廷で裁かれることになった。

*

西条の身柄拘束の報を受けた小久保は、遠い目をして西の空をじつとながめた。

エンパイア・ステートビルに向こうに夕日が見える。夕日の彼方には西条と小久保の生まれ育った日本がある。

（あいつ…）

（もう二度とこの世で会うことは出来ないだろう。あの世に行ったら謝ろう）

そう心に決めて沈む夕日に目をやった。

と、その時であった。一発の銃声が鳴り響き、銃弾が小久保の胸を貫いた。うつ伏せに倒れた小久保の目は、目の前のアスファルトに向けられていたが、やがてその瞳は閉じ、永遠に開くことはな

った。

小久保の暗殺を聞いた張志雄は病床にいた。二ヶ月前に心臓発作で倒れ、一進一退の闘病生活を続けていた。彼もまた、希望に満ちていたはずの国連世界政府の前途に、重たい不安を感じ、神経をすり減らしていた。何かを深く考える気力をなくしてしまった張志雄は、届けられた中国語の新聞を手に取り、ことなく病室の天井を見上げていた。

一週間後、小久保の後を追うように、張志雄は静かにその生涯を閉じた。

*

東京では軍事裁判が始まった。傍聴席には、毎回欠かさず現れる三人の男女がいた。西条の妻と娘。そして秘書の若者であった。西条の娘と秘書は、婚約していた。だが、この戦争で挙式は延期されていた。秘書にとっては義父となる“先生”が、戦争犯罪人として被告席にいる。

西条は昼も夜も考え続けた。

思えば、昭和以来戦争をしてこなかったこの日本を、対アメリカ、対国連と二度も戦争を起こしたのは自分であった。そのために多くの尊い命を落とした。その罪は永遠に消えない。戦争は人の命を奪う。奪われた人間は還ってこない。指導者として罪は背負わねばならない。西条は、自分が全責任をとって極刑を受ける覚悟が出来ていた。

そんな西条の気持ちは、傍聴席の妻にも、娘にも、娘の婚約者にも、痛いほど伝わった。

「父が生きているうちに、花嫁姿を見せてやりたい」

そう思った若い二人は、急ながら結婚式を挙げることにした。が、なにぶん戦争犯罪人の娘である。急でもあり、敗戦という混

乱もあり、ごく親しい人たちと身内だけの、ささやかな規模の式が挙げられた。内閣総理大臣の娘の式としては、寂しすぎる披露宴であつた。

黒いフォーマルスーツを着た新郎、げんだともより源田友頼。
純白のウェディングドレスに身を包んだ新婦、さいじうちまやう西条政子。

二人の前途にはどんな人生が待っているのだろうか。わずかしかない出席者の誰もが、祝福しつつも、そんな心配を心の底に持っていた。

紋付姿の母は涙をこらえていた。父は出席できない。キャンセルサービスで母親の席に行った時、父がいない寂しさを政子は感じた。新郎の父親もまた、この披露宴に出席していない。友頼は、この戦争で父を失っていた。ベテランパイロットとして最後まで日本を守るために戦い続けた源田友義である。

新郎も新婦も、この戦争で、この敗戦で、心に大きな傷を負っていた。しかしそれは、この二人だけではなかった。日本人みんながそうだった。そのことを、友頼も政子も痛いほど知っていただけに自分だけが不幸だなんて、露ほども思わなかった。残された年長いた母親のことを心配し、生まれ出ずるであろう新しい命の将来を心配し、日本の将来を気にかける二人だった。

翌日、小菅拘置所を訪れた源田友頼、政子の二人は、西条に面会を求めた。面会室の亚克力板越しに、結婚の報告を行い、友人が撮ってくれていた披露宴のビデオを見せた。四センチほどの小さな液晶画面には、二人の晴れ姿が映っていた。

（こんな小さな画面でしか見られないなんて）

政子は心を痛めたが、父は満面の笑顔で喜んでくれた。父のこんな笑顔を見るのは、いったい何年ぶりだろう。その思いは隣にいる友頼も同じだった。

（先生の秘書になってまだ何年もたっていない。ここ数年、険しい顔ばかりだった先生。激動の政治を動かしてきた尊敬すべき先生。今、先生のお嬢さんと結婚した）

源田友頼は、これからの人生の重みをひしひしと感じていた。

季節は秋から冬へと移り変わりつつあった。紅葉前線が関門海峡を越えたころ、判決が言い渡された。

元防衛大臣 桐生利秋、絞首刑。

元内閣総理大臣、前日本県知事 西条隆、絞首刑。

判決が出てからわずか一ヶ月あまり。正月を迎える前に、二人の処刑は執行された。

時に、治明^{じめい}十年師走。氷雨のちらつく寒い日のことだった。

（続く）

その5 第三章 中央集権 前編

第三章 中央集権

焦土と化した国土だが、早くも復興と再建へと日本人たちは動き出していた。焼け跡には闇市が並び立ち、自衛隊の復員兵や疎開先から戻った人々でごった返していた。子供たちはボロをまとい腹をすかせていたが、空き地を見つけると瞳を輝かせてサッカーボールを蹴った。この日も小学四年の三村知良みむらかずよしと長田英寿ながたひでとしと中浦俊輔なかうらしゅんすけの三人は、焼け跡の中で、ワールドカップを夢見てパスを交換していた。そこへ進駐軍がゆっくりと歩いてきた。彼にとっては久しぶりの日本である。いや、二年もたっていないはずだ。だが、彼が日本を発った時とはまるで違う荒れ果てた風景がそこにはあった。

彼の足下にボールが転がってきた。隣にいた同僚が蹴り返してやると、俊輔少年は嬉しそうに寄ってきた。

「ギブ、ミー、チョコレート」

同僚は一枚の板チョコを少年たちにわたした。

「サンキュー」

三人は黒人兵士に満面の笑みで応える。

「お腹すいてないか？」

若彦が日本語で話しかけると、みるみる子供たちの顔が陰しくなった。

「こいつ日本人だ！日本人のくせに進駐軍だ！」

「裏切り者！」

蜘蛛の子を散らすように、サッカー少年たちは逃げ去っていった。その目には深い憎悪と怒りがあった。

若彦の所属する部隊は今回、治安維持の任務を負っている。市街地をパトロールして廻るのである。軍政下だからマシンガンを携帯してその任にあたる。治安を乱す犯罪者には銃を向けることになるだ

ろう。

初代国連大統領小久保通の暗殺をうけて、大統領選挙が始まった。太平洋で大きな戦争があり、国連直属軍が勝った直後であり、欧米の人々の気分は浮き足立っていた。

対日戦争の英雄であるジョージ・タイラー大佐が立候補すると、イギリスを中心に熱狂的な支持を集めた。特に、同じ英語圏であるアメリカでは、先の敗戦国だったただけに対日勝利に溜飲を下げた。他の候補者たちも、国連の機能強化という大枠では政見の違いはなく、もはや「各主権国家復活」を掲げる政治家は国連に存在しなかった。

敗戦国日本でも大統領選挙の投票が行われたが、国連政府に対して白けきった日本人の投票率は極めて低かった。

第二代国連大統領には、イギリス出身のジョージ・タイラーが正式就任した。タイラー大統領は、甥のジョン・タイラーを日本県知事に任命し、先の反逆県に睨みを効かせた。

タイラー政権になって、国連政府の改革のスピードは加速していった。警察組織は従来通り温存され各県政府の指揮下にある。しかし、それとは別個に国連による治安組織も設置され「国連治安憲兵隊」と称された。国連直属軍陸軍歩兵部隊の一部が改編され、その任に就いた。

その改編された部隊に、若彦はいた。非武装の市民に銃を向け、威嚇し、逮捕し、時には発砲さえする仕事は辛いものだった。日本人である自分が日本人に銃口を向ける。

（なぜ、こんな事をしなければいけないのか）

タバル島で感じた疑問は、戦争が終わっても消えることなく、若彦の胸にくすぶり続けていた。

若彦は、ただ流されるがままに、生きたまま死んだように毎日をごすしかなかった。日本の市民に銃を向け、愚痴を言う相手もおらず、辛さのはけ口さえ見つけることが出来なかった。

それは、満月の夜のことだった。

「これから巢鴨まで行く。車を出しなさい」

若彦は上官の呉尾鳩奈軍曹から命令を受けた。呉尾の命令とは、巢鴨に住む竹細工職人を政治犯として連行することである。

部隊はとげ抜き地蔵近くの古ぼけた小さな住宅街へ向かった。

「国連治安憲兵隊である。悪しき思想を流布する扇動者を逮捕する」
チエーンのかかった玄関を工具で破って「政治犯」の自宅に踏み込むと、そこには白髪の老夫婦と九歳の少女がいた。

竹取沖成は、伝統工芸の竹細工を作って生計をたてている。この道六十年。職人として一つの道を究めた彼は、すでに悟りの境地にまで達していた。

竹取が先の戦争で両親を失った孤児を引き取ったのは一年前のことだった。孤児の名は、香久恵^{かぐえ}。竹取夫妻は彼女を養女にし、決して豊かではない家計をやりくりし、飲みたい酒も控えて、少女を養育していた。

香久恵は小学三年生。“ピアニストになりたい”そんな夢を語りながらピアノにむかう彼女は氣だても優しく、勉強もできる可愛い娘だった。戦災遺児の彼女を引き取った老夫婦にとって、香久恵の存在は老後の生き甲斐そのものだった。

そんな竹取が、「反国連ビラを配った」という疑いをかけられた。真偽のほどはわからない。が、国連治安憲兵隊は身柄拘束に踏み切った。

若彦たちは部屋に踏み込んだ。屈強な男たちが竹取を連行し、その老妻にマシンガンを向けた時、いたいけな少女の悲しい瞳を、若彦は正視することが出来なかった。

若彦が少女から目をそむけた瞬間、彼女はピアノの上にあったメトロノームを投げつけた。メトロノームは呉尾鳩奈の顔面をかすめた。若彦が呆然と突っ立っていると、少女はさらにテーブル上にあった醤油の器を投げた。砕けたガラス片と黒い液体が飛び散り、部屋中

に醤油の匂いが充満した。

次の瞬間、銃声が響き、血しぶきが台所を赤く染めた。呉尾鳩奈が竹取香久恵の額を撃ち抜いたのだ。

狂ったようにわめき暴れる竹取沖成を、七人の男たちが寄つてたかつて殴りつけ、蹴りつけた。やがて老夫婦は連行されていった。

呉尾がブーツで少女の遺体を足蹴にするのを見て、若彦は強烈な不快感を覚えた。

この夜、満月が煌々と巢鴨の夜を照らし出していた。

次の朝、三歳年下でかつての後輩だった上官の呉尾鳩奈から呼び出しを受けた。細身で長身の呉尾軍曹は腕組みをしたまま若彦をなじつた。

「ちゃんと仕事してよ。あなたのせいで、大怪我をするところだったわ」

苛立ちを隠すことなく、ストレートヘアの下からきつい視線を若彦に送る。

「わかった？しつかりしてよ」

「は…はい……」

（ヒステリー起こしやがって）

若彦の目に、反抗的な視線が浮かんだのを見て、呉尾は額に青筋をたてた。

「何い？なんか言いたいことでもあんの」

「いえ。別に…」

「嘘。何か言いたそうね。言いなさい」

「いえ…」

「言いなさい」

「では、申し上げます。あのような子供を撃つことは、軍の評判を悪くし、……」

飛んできた平手が若彦の言葉を遮り、左の鼻孔から赤い液体が流れ落ちた。

「あのガキをちゃんと取り押さえなかったのは、アンタでしょう。アンタがすっかり捕まえていれば、あの子は死なずに済んだのよ。それを棚に上げて上官を非難するつもり？ きちんと任務も果たせないくせに」

制服の襟を鼻血で汚したまま、若彦は列に戻った。この時、若い兵員たちが薄ら笑いを浮かべているのが見えた。

*

国連政府の影響は内政にもおよんだ。かつて議会制民主主義の発達した地域でも、政党政治が衰えた。なぜなら、県知事は国連政府が任命する。地元で政党がいくら政治活動しても結局は力にならないのである。日本の旧国会議事堂でも「県議会」は実施されたものの、有権者の関心は以前より低下し、取材にくるマスコミの数も激減した。

国連治安憲兵隊の目下の大きな仕事は、旧国歌・旧国旗の取り締まりである。旧国歌を収録したCD、MD、カセットテープなどの音声ソフトおよびDVD、VTRなどの映像ソフトは、世界中から全て回収してプレス機で粉碎することが決定されたのである。

旧国旗についても、大旗小旗にかかわらず、全てを回収の上、焼却処分することになった。国旗および国歌ソフトを不法所持する者は収容所送りになるという。

せっかく地球が一つになったのに、旧来の「国」単位の枠組を頭の中に残しているなど、とんでもないことである。地球人は一つにならなければいけない。

回収期間は、年内いっぱい。わずか七ヶ月余である。この仕事のために、急いで大幅増員された国連治安憲兵隊が世界中を飛び回った。学校、企業などの団体。個人レベルではサッカーのサポーターをはじめ、各種スポーツ応援愛好者やら、登山家やら、あらゆる人々の所へ、国連の制服集団がやってきた。地球上の全ての家庭に、学校

に、企業に、団体に、やってきたのである。

人々は戸惑った。次の正月が来てしまうと、国旗を持っているだけで処罰されるというのだ。

「まさか、個人の自宅まで調べはすまい」

と甘く見るむきもあったが、タイラー大統領は本気だった。年末になって、大量の旗とCDが集められたが、それで全てだとは、タイラーには思えなかった。きっと隠し持っている、と確信している大統領は、年が明け次第、容赦なく弾圧するつもりだった。

ついに新しい年が来た。

はじめにオセアニア、そしてアジア極東。忌まわしい新年は、いつもと同じように地球を西へ西へと進んでいった。

正月を祝う習慣は東洋人だけのものではない。多くの民族が新年を祝う。しかし今年の新年に限っては、心から祝う気持ちになれない者も多かった。

杞憂と思われていた出来事が現実起こった。

ニュージールランドーの大都市、オークランドの繁華街にあるスポーツバーでは、この夜、新年を告げる時報とともに騒ぎ回る若者を目当てに、深夜まで営業していた。

「スリー、ツー、ワン。ハッピー・ニューイヤー」

「イエー」

若者たちから歓声があがった。オールブラックスのジャージを着た若い男が、手にしたシャンパンをラッパ飲みした。

ポール・レノン。ジョン・マッカートニー。リンゴ・ハリスン。ジョージ・スター。皆、ラグビーを愛し、ロックンロールを愛する長髪の若者である。エレキギターとラグビーが三度の飯よりも好きな連中だった。四人が新年を迎えた喜びに浸ったまさにその時、国連治安憲兵隊約三十人が店の中に突如として押し入ってきた。

ニュージールランド対イングランドのラグビーのビデオが映っているテレビの横に、十五センチほどの小旗が掲げられているのを、国連

治安憲兵隊は見逃さなかった。それは、紺地に南十字星と四分の一のユニオンジャックがデザインされたニュージールランド国旗だった。「現行犯で逮捕する」

オールブラックスサポーターたちと、店の従業員と経営者は、抵抗しようとしたが、屈強な男たちがマシンガンを手に行っているのに気づいて両手を大きく上げた。この店の客と経営者を一網打尽にすべく、早くから計画がたてられていたのだ。若者たちはなすすべもなく手錠を掛けられた。

東の国ニュージールランドで、未だ初日の出さえ昇らないこの時刻。まだヨーロッパでは大晦日の夜さえ来ていないこの時刻。間髪を入れず、国連政府は弾圧を始めたのだった。

この夜連行された者は、収容所で「正しい考え方」をするよう「思想矯正教育」を受けることになったという。

国連政府は、スポーツにも口を出した。オリンピックなど国際スポーツでの団体競技では、従来の国単位のチーム編成は禁止され、違う民族の人の混成チームのみ出場が認められた。

スポーツ、大衆芸能、芸術。ありとあらゆる文化活動から「国」という枠組みを排除するべく、政府は「指導」をはじめた。市民の「意識改革」を促すためである。

日本人は「沖縄を中国に取られた」と言う。しかし、それは中華民族と日本民族が異文化だからそういう事を言うのである。全く同じ文化、習慣を持ち、全く同じ民族になってしまえば、「こちらが日本、あつちが中国」などというバカげた前時代の古い考え方も消えるに違いない。そうすれば、国と国の戦争、民族と民族の紛争も一切消滅するはずだ。民族の誇りだの伝統文化などと言っているうちは、世界平和はやってこない。世界を一つの文化、一つの民族にしなければならぬ。

ジョージ・タイラー国連大統領は、そのような信念を持っていた。そのためには、教育、そして言語を統一する、という壮大な計画を

たてた。世界の言語を全て英語とするのである。

まず世界中の義務教育を全て英語で行うことを義務付ける。

十五年後にはマスコミに英語以外の全ての言語の使用を禁ずる。

テレビもラジオも新聞も雑誌もインターネットも。

二十年後には、英語以外で書かれた書物を全て焼却廃棄する。

そして三十年後には、英語以外をしゃべった人間を処罰する。

三十年もたてば、英語教育の世代になっており、英語をしゃべれない人間はこの世にいらなくなっているはずである。それでも英語が出来ないのは、本人の怠慢か、意図的な反抗以外の何物でもない。そんな人間はこの世に必要ない。

最終的には、全ての地球人の氏名を、イギリス風の名前に改名させようとまで、この大統領は考えていた。

ジョージ・タイラー国連大統領は、この法案を国連総会に提出し、可決された。強硬な反対意見もあったが、英語を母語とする議員は多く、また、たとえ否決されても大統領の拒否権がある以上、無駄な抵抗だと観念してあきらめた議員も多かった。

ジョン・タイラー日本県知事は、日本人の民族復興へのエネルギーを恐れた。かつて明治維新以来急速に近代化した日本。そして第二次大戦後、驚異の経済復興をなしとげ世界第二の経済大国にまでなった日本。そのエネルギーが三たび世界へと台頭することを恐れた。

タイラー知事は、人を殺さずして民族の誇りを殺す方法を考えていた。生きながらにして民族としてのアイデンティティを破壊し、固有の文化を失わせようとした。

北海道には梅雨が無い。最も良い季節と言われる七月の札幌で、普段なら観光客が多数訪れる札幌時計台の周囲には、立ち入り禁止のロープが張られ国連直属軍兵士が周囲を固めていた。

そこへ一人の人気者が現れた。地元札幌のプロ野球選手で強肩俊

足の外野手、新藤剛しんとうこうである。新藤は奇抜なパフォーマンスでファンに話題を提供し、札幌の野球チームの人気を支える存在だった。

その新藤外野手が、なぜか国連直属軍の車で現れたのだ。いつもの天真爛漫な彼と違って顔がこわばっている。表情も暗い。新藤の背後には二人の銃を持った黒人兵士がぴつたりと付いていた。

新藤は決められた場所に行き、蚊の鳴くような声で宣言文を読み上げた。

「これから……時計台を……」

新藤が起爆装置に手をかけ、力を込めた次の瞬間、轟音とともに白い上品な札幌時計台は、一瞬にして瓦礫と化し、あたりには黒い煙と灰色の埃にまみれた。それを見届けた国連兵士たちからは拍手がおこり、起爆装置を押すことを強制された新藤剛選手は、悲しげにうなだれていた。

タイラー知事の「ランドマーク破壊政策」である。日本の有名な建造物を破壊しつくすのである。それによって、もはやここは以前の日本ではないことを日本人どもにわからせ、この星の全ての土地が国連の直轄地になったことを理解させなければならない。それを日本人自身の手を借りて破壊させるのである。知名度の高い人気者が破壊すれば、さらに効果的である。

仙台では伊達正宗の銅像が爆破された。三日月の兜をかぶったまま首が転がり、馬の脚は折れ、胴体も真つ二つになった。起爆装置を押したのは、地元仙台出身のフィギュアスケート金メダリスト荒山あらか静香しずかだった。

京都では修学旅行の定番、清水寺と金閣寺がその標的になった。ガソリンをぶっかけて点火すると、木造の寺院はあっという間に炎につつまれ、二度とその姿を見せることはなかった。三十三間堂も、二条城も、銀閣寺も、東寺の五重塔も、宇治の平等院も、すでに焼却計画があり、実行を待つだけであった。実行者には僧侶が動員された。尼僧にして作家の瀬戸山寂観せとやまじやくかんまでが現場に現れ、テレビカメラの前で寺院の焼却を指揮する姿を全国にさらした。

拒否すれば殺されることを、すべての日本人視聴者は知っていたが、あの説法で有名な高名な瀬戸山寂観でさえ、命を惜しみ、権力におもねるのかと愕然とした。

あるいは安心する者もいた。

「あの人でさえ、なびいたのだから……」。

だから自分が長いものに巻かれて、文化財の破壊に加担しても、決して恥ずかしくはない。

千年以上の歴史を持つ奈良の法隆寺も、東大寺の大仏も、薬師寺も容赦なかった。姫路城も大阪城も、熊本城も、炎に消えた。日本各地の名城も、今は大小の瓦礫が無惨な姿を晒すだけである。

東京ドームの天井の白い膜も炎上した。この時、総武線の中から見える炎はあまりに大きく、車中の乗客に衝撃を与えた。黄色い電車の窓ガラスには、炎の光が反射した。

浅草寺も焼かれ、参道の仲見世は営業を禁止され、ブルドーザーで取り壊され更地になった。

東京タワーや大阪通天閣は、時間をかけて解体作業が行われたのに対し、東京都庁ビルや横浜ランドマークタワーは、爆薬によるビル破壊解体という方法が選択された。日本一の高さを競った超高層ビルは、周囲を覆い尽くした灰色の大量の埃とともに一瞬で消えた。広島原爆ドームは、鉄球で解体された。長崎のグラバー亭や、長野の善光寺や、宮島の厳島神社といった文化財も例外ではなく、木造建築物は灯油を使って火を掛けられ、コンクリートや石で出来た建造物はダイナマイトによる爆破か、ブルドーザーか、鉄球か、クレーン車によって、その姿を日本人の網膜から永遠に消し去った。

タイラー大統領はスポーツや文化、芸能の世界にも口を出した。東アジアと北米で、プロ野球が解散させられたのである。イギリス出身のジョン・タイラー日本県知事も、ジョージ・タイラー国連大統領も、そんなものは要らないと判断した。人民の娯楽スポーツとしてはサッカーがあればよい。いかにもイギリス出身者らしい。

夏の高校野球の決勝戦が行われた翌日、ついに甲子園球場が取り壊される時が来た。甲子園だけではなかった。すでに破壊された東京ドーム以外の、三万人以上収容の野球場は全て破壊するよう通達があったのだ。

前日まで最後の熱戦が行われたこの聖地の最期を見届けようと、全国から大勢の人が集まってきた。タイガースのファン、高校野球のファン。さらには特別野球に思い入れがない人までが、この大正時代から日本人に愛され続けた来た球場の最期をみとった。

パワーシヨベルと大型鉄球がうなりをたてる。外壁はツタもろとも砕かれていく。バツクネットが壊され、灰色の埃を吹き上げながら名物の銀傘に鉄球が衝突する。立ち入り禁止のテープの外側から涙を流している女性は、手に黄色いメガホンを持っていた。

福岡ドームもナゴヤドームも、神宮球場も、プロ野球本拠地の全てが壊された。

民族の伝統文化の色合いが強い大相撲も禁止になった。両国国技館は取り壊され、力士は全員廃業のうえマゲを落とされた。横綱の「綱」も、力士の化粧まわしも焼却炉に投ぜられ、赤い炎をあげた。国技館の天井近くに飾ってあった歴代優勝力士の額縁も、ブルドーザーのキャタピラに踏まれ、砕かれていった。ファンを沸かせた名横綱の化粧まわしをつけた写真が、額ごと真つ二つに折れ、顔の部分に無残にも大きな穴が空いていた。

日本の相撲だけではなかった。世界各地の民族伝統的な色合いを持つ、スポーツ、芸能、武道のほとんどが禁止された。スペインの闘牛、フラメンコ、モンゴル相撲、韓国相撲、テコンドー。もちろん、日本の剣道、空手、柔道もその対象となっている。

*

東京の銀杏が黄色く染まるころ、日本武道館の解体が始まった。

昭和三十九年、戦後復興と高度経済成長の象徴ともいえる東京オリンピックでは、はじめて柔道が正式種目に加えられ、日本の威信を世界に示すべく、この日本武道館で熱い戦いが繰り広げられた。

そして、ビートルズをはじめとする数多くのコンサート。この会場は多くの日本人に感動を与え、音楽や武道を育んできた。

その日本武道館の解体工事現場前で、デモ行進が行われる。若彦たちの部隊は、その警備をするよう命令を受けた。

「マシンガンと手榴弾を携帯せよ」との連絡もあった。

（なぜ？）

機動隊なら、デモ隊が暴動を起こした場合、ジュラルミンの盾を使って押さえ込むのである。あるいは放水車で高圧の水を噴射し、撃退するのである。

（何か、おかしい。まさか…）

若彦は直感的に何かを感じた。デモ隊に対する警備は、警察の機動隊が受け持つはずである。若彦らの国連治安憲兵隊は、機動隊のようなジュラルミンの盾も、放水車も持っていない。

デモを行う団体は「日本の武道を守る会」であるという。元柔道選手の若彦は、この団体について詳しく知りたいと思った。

公式ホームページに記載された会長の名前と顔写真を見て、若彦は驚きのあまり大きく息を飲んだ。

「代表者 あかつきろう 暁太郎。職業プロレスラー。ハワイ出身の日系二世。国籍は日本。不知火体育大学卒業後、陸上自衛隊入隊。先の戦争では

タバル島で激戦を体験」

特別に親しくはなかった。だが、柔道部の合宿所で同じ釜の飯を食った仲間だった。褐色の肌と縮れた髪の毛によって「外人」として苛められたこともあった。だが、暁自身、他の誰よりも日本人的で、日本という国が大好きだった。

背が高く、豪快な投げ技を持っていたが、人一倍心優しく、その気の弱さが災いして勝負の世界で大成できなかった。そう、若彦と同じように。

（そうか、暁は自衛隊に行ったのか。それにしてもタバル島、あそこにあったのか。敵として…）

ふと、暁太郎に会いたい、と思ったが、警備隊の一隊員が、デモ隊の会長と話しをするなど、不可能であることはよく分かっていた。

「ボーっとしてるんじゃないよ花岡」

呉尾鳩奈が怒鳴りつけた。

若彦は武道館解体現場にいた。立ち入り禁止区域との境に立ち、群衆を監視する仕事である。

若彦は、群衆の方を向いて立っている。が、その視線は日本武道館に注がれていた。

巨大な鉄球が、和風の屋根と壁を破壊していく。今まさに、あこがれの八角形の屋根が崩落していく。その瞬間を、若彦はまぶたに焼き付けていた。

柔道が、そして日本の武道の精神が、今、音を立てて崩れ落ちていく。日本武道館が泣いている。若彦には解体工事の騒音が、日本武道館の悲鳴に聞こえた。

この武道館は、日本中の柔道家にとって聖地である。ここで試合をするために日々厳しい稽古に励んできた。日本武道館がなくなってしまうなんて、こんな世の中が来るなんて、想像もできなかった。やがて濠の向こうから、拡声器の音が聞こえてくるようになった。こちらに近づいてくるのか、徐々に徐々に大きくなってくる。

若彦は、各部隊の配置を確認した。タバル島で実戦経験のある彼には、指揮官の意図が透けて見えるようだった。

（デモ隊が田安門を通過したところで、退路を遮断するつもりに違いない。戦車まで配備してる以上、絶対やるつもりだ）

デモ隊が近づくにつれて、将校たちの顔が異常に緊張していくのがはつきりと見えた。明らかに普通の表情ではない。

（間違いない）

タイラー大統領が「日本の武道の精神」などというものの存続を

許さないことは、新聞を読んでいるだけでもわかる。そして、この政権の今までのやり方を見れば、たとえ合法的で平和的なデモであるうとも、鎮圧することがありえる。なぜもつと早く気が付かなかったのだろうか。

若彦は勝手に持ち場を離れて歩き始めた。同僚が呼び止めたが、全く聞こえていない様子だった。やがて小走りになり、そして全力で走り始めた。

田安門をくぐり、濠の外側にいる「日本の武道を守る会」の集団約二百人に向かって、走りながら大声で叫んだ。産まれてこのかた、これほどの大声を出したことはなかった。若彦は力の限り叫び続けた。

「暁！暁！花岡だ。不知火大柔道部の花岡だ。みんな逃げろ、殺されるぞ」

デモ隊は皆きょとんとしている。若彦は、マシンガンの銃口を天高く突き出すと、空に向かって威嚇射撃しながら絶叫した。

「逃げろおおお」

デモ隊は、蜘蛛の子を散らすように散り去っていった。

歩兵部隊が血相を変えて駆けてくるのを見た若彦は、現場を離脱すべく全力で疾走した。

（続く）

その6 第三章 中央集権 後編

第三章 中央集権 後編

*

浅草の三社祭も、京都の時代祭りも、伝統行事のほとんどが禁止された。これは日本に限らない。民族音楽、民族舞踊は原則として禁止され、クラシック音楽とクラシックバレエだけが存続を許された。三味線も胡弓も、国連治安憲兵隊の目に入り次第焼却処分となった。

「ヨーロッパの音楽は良くて、アジアのはダメなのか」という不満は、言っても仕方のないことだと、すでに多くの人々は理解していた。

民族による壁をつくらないためである。民族としてのアイデンティティなどというものを持たれては困るのである。またいつ地球人同士の戦争が起こるかもしれない。その下地を徹底的に根絶する必要がある。

この星は「中央集権」になった。待ち望んでいた中央集権。やっと確立した。

ジョージ・タイラー大統領は、人口の多い地域や先進地域の県知事には、自分の親族を配置した。アメリカもEUも中華も、県知事の姓はタイラーである。

クリスマスが近づいた初冬のニューヨークで、マスコミや政府高官が集まって大きなイベントが行われた。セントラルパークの中央に、巨大な銅像が建立されたのである。今日はその除幕式である。

建てられたのは、ジョージ・タイラー国連大統領その人であった。右手を得意げに上げたタイラーの巨大な像は、ニューヨーク中を見

張っているかの様に屹立していた。

除幕式の後、この巨像のモデルはこう語ったという。

「タイラー一族でない者は、人間ではない」

クリスマスが過ぎ、大晦日がやってきた。

昨年の年越しが騒々しかった事は、人々の記憶に新しい。時報とともに国旗の取締りが始まり、日本でも大変な騒動になったからである。あれからちょうど一年。今年の除夜は奇妙なほど静まり返っていた。国旗の禁止はすでに徹底され、大規模な強制捜査がないからであろうか。

いや、それだけではなかった。日本の除夜では必ず聞こえるはずの、あの音色が失われていたからだ。人間の煩惱と同じ数だけ打ち鳴らす除夜の鐘。

お寺の多かった京都の街でさえ、ほとんど聞こえてこなかった。

多人数で綱を持ち、僧侶が背面ジャンプで打ち鳴らすあの知恩院の大鐘の重低音もしなかった。そもそも京都の大寺院の多くが既に焼き払われ、鐘の多くが、国連直属軍の戦艦の鉄鋼と化していた。

鏡餅も、注連飾りも、門松も、年賀状も禁止された。初詣に行くべき神社仏閣も、有名で大きなものは大方破壊されていた。

お笑い芸人も、女性アイドルも、局アナも、国連治安憲兵隊を恐れて、和服を着てのテレビ出演を控えた。大手デパートは福袋の販売を見送った。

まるで平日のような雰囲気の中、わずかに正月気分を味わうことが出来たのは、サッカー天皇杯決勝と、翌日の箱根駅伝の中継くらいのものであった。

そんな三賀日が終わり、仕事始めの一月四日、ジョージ・タイラー国連大統領は年頭の所信表明演説において、驚くべき政策を発表した。

国連政府は過去二回、全地球人を対象に大統領選挙を行った。しかしこれは、多大な事務上の負担と経費がかかった。このような大

規模な負担はこの星を疲弊させる、と主張したのだ。

「次の大統領は、現職の大統領が指名する」

この一言ほど、人々を落胆させた言葉は無かった。ジョージ・タイラーは、次期大統領に息子のトーマスを選ぶのではないかと噂されている。これでは事実上世襲である。もはや“大統領”とはいえない。もはや民主主義ではない。

世界中に張り巡らされた諜報機関が、不平不満分子を事前に見つけ出し、政治運動になる前に、その芽を摘んでいった。地球全体が強固な中央集権になり、何事も国連に伺いをたてなければならなくなつた。

国連政府の官僚や政治家たちは、アジアやアフリカの事情に疎いところがあった。そのくせ地方のことは地方にまかせる、という姿勢は露ほども持たず、小回りの効かない行政に住民はいらだった。しかしその苛立ちを表現することはばかられた。

平和ではある。確かに平和なのだが重苦しい世の中になったと誰もが実感していた。そして、各民族の誇りや伝統を失ったことにより、アイデンティティの喪失をおこし、若者の無気力、仕事の非効率など、社会は活力を失っていった。そして人々は心が死んだまま、ただ生き続け、年月だけが流れていった。

*

対日戦争が終わってまもなく、花岡貴彦はシャトルに乗って宇宙旅行をした。先の戦争で類稀なる才能を見せ付けた彼は、異例の昇進を遂げた。のみならず元金メダリストにして元プロ野球オーナーという華麗な経歴も買われ、国連政府のスポーツ振興政策の役員にも抜擢された。

地球でオリンピックがあるように、宇宙の星際社会にも、星別対抗スポーツ大会がある。その視察である。

セイヨウ星軍のスペースシャトル軍艦に地球人が乗り込んで宇宙

へ旅立つのは初めてのことであり、この歴史に名を刻む記念すべき一行に、貴彦は名を連ねた。地球の科学技術をはるかに超えたテクノロジーによって、わずか十四日でセイヨウ星に到着した。

セイヨウ星政府の歓迎レセプションに出席した後は、各自が自分の分野の視察に廻ることになっている。ある者は株式市場、別の者は学校教育という具合に。

それにしても、この星の街並みの美しさはどうだろう。東京ともニューヨークともパリとも違う。この星は、軍事や科学だけでなく、音楽、演劇、文学、教育、福祉・社会保障、料理・酒、絵画・彫刻、建築、ファッション。あらゆる分野で華やかな文化が花開いていた。地球にいたときの印象とは違い、人々は優しく、治安は安定し、女性には美しかった。

この星にいるのはセイヨウ星人だけではない。貴彦ら「外星人」も多数滞在し、あるいは居住していた。ガルポルト星、インスペ星、リスイギ星、スランフ星。多くの惑星が、それぞれ「星際ルール」に基づき、貿易をし、政治、経済、文化・芸術の面でも交流し、お互いに切磋琢磨していた。

貴彦は、地球がみずばらしく見えてきた。自分たちが生まれ、育ち、暮らしてきた星は、何と遅れていて、汚くて、低能で、くだらない所なんだろう。くだらない人々なんだろう。

学生時代、「反セイヨウ星」「宇宙人排斥」の世論が沸騰し、貴彦自身も強い影響を受けていた事など忘れて、そう感じた。ここに居ればそう感じざるをえないだろう。

貴彦は意欲的に街を歩いた。出発前にセイヨウ星語を勉強し、日常会話程度なら出来るようになっていた彼は、喫茶店に入り、映画も見た。美酒や高級料理も、B級グルメも試してみた。

貴彦はセイヨウ星人が着る標準的な服も買い、滞在中ずっとそれを着ていた。その服は、ガルポルト星でも、リスイギ星でも、男性は公式の場では必ず身につける宇宙共通の衣服であった。ちょうど、地球で背広にネクタイが共通のビジネススタイルなのと同様だった。

「これからは地球人も、これを着なければいけない」

貴彦は周囲にそう漏らした。

翌日、本来の仕事である「宇宙スポーツ大会」の視察へと出かけた。巨大かつ華麗なスタジアムには、ファッショナブルな老若男女が集い、旗を持って応援していた。観客はホームであるセイヨウ星人が圧倒的に多いが、ガルポルト星人やリスイギ星人など、各星からの応援団も集結し、母星の旗を振り、華やかなスタンド風景を醸し出していた。

この宇宙スポーツ大会を、ビデオで観戦したタイラー大統領は、この大会にどうしても地球人選手を送り込んでメダルを獲りたいと思っていた。地球の中だけで、日本だ、アメリカだと、メダル争いをしている時代は去った。

しかし、球技など地球人にとって未知の競技ばかりで、短期間でメダルを獲って「星威発揚」をすることは難しいと思われる。

ただ、希望があるとすれば格闘競技であろう。「宇宙レスリング」ならば、地球のレスリングや柔道の選手を転向させれば、短期間でメダル奪取も夢ではないように思える。

これからは宇宙の中の地球である。スポーツも文化も、宇宙で通用するものでなければならぬ。狭い地球の中だけのものは捨てても良いはずだ。

宇宙レスリングの優勝者に金メダルが授与された時の、スタジアムの興奮と賞賛の拍手は、貴彦の生涯忘れえぬ光景となった。

セイヨウ星文明に圧倒された貴彦だったが、宇宙レスリング選手の技量には圧倒されることはなかった。

これなら地球人でもやれる、と確信してこの星を離れた。

セイヨウ星から地球に帰星した貴彦は、国連政府の「宇宙レスリング振興推進委員」に名を連ね、元柔道金メダリストとして、対日戦争の功労者として、大きな影響力を持つようになっていった。

貴彦は、宇宙レスリングへ転向するよう、柔道の一流選手に積極的にアプローチし始めた。また、柔道場の閉鎖と宇宙レスリング練

習場への改築を、軍の力を使って強引に推し進めた。

貴彦の脳裏には、セイヨウ星で見た宇宙大会の表彰式が離れなかった。

（いつの日か、あの表彰台に地球人が昇り、センターポールに青い国連旗を掲げるのを見たい）

そんな思いが沸沸と湧き上がり、貴彦を突き動かした。

しかしこの汚らしい地球に帰って来るとどうだろう。古臭い柔道という競技にこだわり、頭の中は地球レベルの範囲でしか思考出来ない化石人間たちが跋扈している。そんな連中は特に日本に多い。こんな奴らを放置したままでは、いつまで経っても宇宙大会で地球人が勝つことなど出来ないだろう。運動神経の良い、才能ある若者には、宇宙のスポーツをやって欲しかった。

自分が今まで柔道とともに育ってきた事、父親が道場を経営している事。そんな事は“宇宙の中では小さな事、私的な事”であり、“地球を良くするため”という大義からみれば“塵のようなもの”である。そういう思考回路を、あの新兵教育の合宿で叩き込まれたあの合宿で身に付いた思考様式は、今も貴彦に強く根付いている。

貴彦は、ジョージ・タイラー大統領に「柔道禁止令」を出すよう意見書を提出した。日本人の元金メダリストからこのような意見書が出た事は、柔道関係者に大きな衝撃を与えた。そして既存スポーツの禁止に多少のためらいがあったタイラー大統領から、迷いを拭い去った。

*

金髪で青い瞳の大柄な男たちがやってきたのは、夕暮れ時のことだった。彼ら国連治安憲兵隊は、たどたどしい日本語でこう切り出した。

「花岡満太郎さんですね」

「そうですが、何か」

「この柔道場は取り壊しの対象となりました。一ヶ月以内に立ち退いて下さい。県知事からの命令書もあります」

そういつてA4サイズの英語の文書を広げて見せた。

満太郎の顔色が変わった。

「この道場はなあ、オレが若い頃苦勞して建てて、懸命に弟子を育てて来たオレの城だ。三十年も、どんな思いでやってきたのか、お前ら分かってんのか。何が県知事だ、帰れ、この道場には指一本触れさせやしねえ」

金髪の治安憲兵隊は怒鳴られて一瞬ひるんだが、ニヤリと笑うや、凄んでみせた。

「いいんですか。それが返事ですか」

若いほうの金髪が、上官らしい金髪に何やら英語でひそひそ話した後、また来ると言い残して、彼らは去って行った。

若彦は、今無職である。それどころか脱走兵という“犯罪者”であり、追われる身であった。敗戦後の混乱と、タイラー知事のランドマーク破壊政策で意気消沈した日本人の心理は経済を冷え込ませ、求人は少なかった。住所不定のうえ“前歴不明”の怪しげな人物に、簡単に仕事が見つかるはずもなかった。重い足取りで、どこをどう歩いたかも分からずにさまよい続けた。

ふと気がつくと、懐かしい場所に来ていた。実家の道場の近くである。近寄りたくない場所、避けていたはずの場所だが、無意識のうちにここに来ていた。

が、今更親に会わせる顔もない。若彦は立ち去ろうとした。

と、その時。見慣れた国連治安憲兵隊の車が目の前を横切った。道場の方向へ行く。若彦は妙な胸騒ぎがした。

どういう心理状態なのだろう。今更会えない両親、大嫌いな両親。その両親の事が何故か気がかりで実家の方へ歩き始めていた。

何かが引つかかる。言いようのない不快感。

若彦は自分の身の危険を顧みずに、実家へと足を向けた。もし、国

連治安憲兵隊に自分の身元が知られたら、逮捕されるはずだ。最悪の場合死刑にもなってしまう。彼らのいる場所に近づくことは、限りなく危険なはずである。

それなのに、なぜか、どうしても実家へ足が向くのを止めることが出来なかった。道場が心配で、奴らが許せなくて、若彦は歩き続けた。

若彦は十五年ぶりに実家のあった場所に来た。国連直属軍の車両と工事用の重機が数台停まっていた。すでに道場は大破し、瓦礫の山と化していた。これから廃材をブルドーザーで片付けようとする段階に入っており、あの建物は見る影もなかった。

突然の強制執行。あまりの出来事に涙さえも出ず、悲しむことも忘れてしまった。戦場で多くの戦友の死を見届けてきた若彦だったが、それらとは異質の心痛を覚えた。怒りが心の奥底から沸き出だした。

「やっぱり来たのね」

呉尾鳩奈の声である。

十数人の隊員たちが若彦を取り囲んだ。

若彦は怒りを爆発させた。

「親父は。お袋は。今何処にいる」

「公務執行妨害現行犯で、連行した」

アジア人兵士が、中国訛りの日本語で答えた。

若彦は、そいつの制服の襟を掴むなり、耳元で怒鳴った。

「どこへやったんだ」

柔道で鍛えた腕力で首筋を揺すられた国連兵士は、若彦が手を離すと力なく後ろへ倒れ込んだ。次の瞬間、その場にいた兵士たちが一斉に銃を構えて若彦に向けた。

「あんた、殺されたくなかったら、おとなしくしなよ。あんたのパパとママは、思想矯正所へ行った。歪んだ考え方を持っているようだから、正しくなるよう教えてやる所だ。こっちは親切にも、正しい考え方を持つよう、泊まり込みで教えてあげるんだよ。感謝しな」

「ふざけるな」

若彦は、中国訛りの顔面を左足で蹴った。一撃で相手は血を吐いて気絶した。

それを見た黒人兵士が、自動小銃を振り回して殴りかかってきた。

若彦は第一撃を避けるや、左フックを見舞った。耳の下に重いパンチを食らった黒人兵士は、腰から崩れ落ち、動かなくなった。

「強いぞ」

若彦を包囲している兵隊たちに緊張が走った。が、彼らも黙って見ている訳にはいかない。

東南アジア系の兵士が真後ろから銃で殴りかかった。若彦は機敏に振り返り相手の銃をしっかりと掴んだ。若彦のほうが腕力が強い。

動きの自由を失った相手の左足を若彦は払った。小外刈である。相手は後頭部から落下し、気絶した。

が、多勢に無勢である。背後から首筋を銃で殴られ、形勢は一変した。

前のめりに倒れ込んだ若彦は、もはやサンドバッグである。背中に鋼鉄の銃身が襲いかかり、軍靴が顔面にめり込んだ。たった一人の日本人に、十人以上の多国籍、いや多国籍の男たちが群がり、銃を逆さにしてグリップで殴り、あるいはブーツで踏みつけ、袋叩きにしていた。

前歯が折れ、唇が切れ、鼻血を出し、足を捻挫し、顔は腫れあがった。全身に多数のあざを作り、目の前の光景が徐々に暗くなっていた。やがて若彦の意識が奈落に落ちると、やっと彼らは暴力を終えた。

若彦が完全に動かなくなったのを見て、バケツを手にした呉尾鳩奈が、ゆっくりと近づいてきた。

頭の上でバケツを逆さにして、若彦の意識を覚醒させた呉尾は、顔をブーツで踏みながら勝ち誇ったように唾を吐いた。

「脱走罪で連行してもいいんだけど、その価値もない男だわ」

屈辱が肉体のダメージを忘れさせた。すでに限界を超えていたはず

の肉体の、どこにそんな力が残されていたのか、若彦は氣力をふりしぼって立ち上がり、呉尾の顔面に怒りの鉄拳制裁を放った。

が、腫れあがった目は、目標の位置を正確に把握できなかった。渾身の一撃は、むなしく空を切り、逆に呉尾のストレートパンチが若彦の顔面をとらえた。

さらに股間を蹴り上げると、若彦は膝から崩れ落ちた。

「うつつ」

「あら、痛がるところを見ると、一応付いてるみたいね」

呉尾は、ズボンの上から「男」をわしづかみにした。強く締めつけられ、若彦は小さくうなり声をあげた。

「クレオ、お前も悪趣味だな。いや淫乱と言うべきか」

イタリア語の主は、呉尾鳩奈の上官、ジェームス・シーザー中佐である。

「もう、いいだろう。そいつの弟は空軍の将校だ。軍法裁判にかけるとやっかいなことになる。逃がしてやれ。書類上は適当に処理しておけ」

呉尾軍曹と目を合わせたシーザー中佐は、馴れた男女のみが交わす表情を一瞬だけ見せたが、すぐに渋面に戻り、隊員たちを指揮し始めた。

若彦はそのまま捨て置かれた。ボロ布のように尻餅をついたまま、ブロック塀に寄りかかってじっとしていた。心身ともにダメージはあまりに大きく、動こうにも動けなかった。

その間、彼らは何事も無かったようにブルドーザーを操り始めた。若彦は、道場の跡地が更地になっていく様を、鼻水と、涙と、泥と、自らの血の味を、口の中で味わいながら、うつろな目で呆然と見つめているしかなかった。

屈辱感。これ以上の屈辱はないであろう。

やがて彼らは、若彦がそこにいることも無視して去って行った。彼らが去った後も、若彦はしばらくそのままの姿勢でいた。夕暮れの空にカラスが鳴くのが聞こえた。

若彦は脱走兵。貴彦は政府高官。

女子アナを妻とし、政府の特使として華やかに宇宙へ旅立ち、大統領に意見する弟。

孤独で無職で、住む所を失い、リンチを受け、性的辱めまで受けてうずくまっている自分。

それが、現実だった。

*

このころニューヨークの国連政府による世界改革は、日の出の勢いで進んだが、ただ一つ、言語を英語に統一することだけは遅々として進まなかった。

マスコミの言語を英語に統一する期限はとうに過ぎていたが、実行されてはいない。もうすぐ英語以外の書物の廃却を定めた年がやってくるが、これも実現は不可能といわざるえない。

アジアやアフリカで十九世紀に西欧の植民地支配を受けた地域ではむしろスムーズに進んでいたが、フランスやドイツでは全くといっていいほど進んでいない。さらに遅れているのが日本である。

ジョン・タイラー日本県知事は、その原因を日本語の特殊性とみた。常用漢字を大幅に制限し、ひらがな表記ばかりを増やした。やがては日本語のローマ字化、そして日本語そのものの禁止へと道筋をたてているようだった。

公式な文書や新聞の文章は、まるで小学校低学年の作文のような印象になった。

『国れんのタイラー大とうりょうは、今どのかくぎで、日本にたいし、英ごきょういくを、すいしんするため、とくべつけんしゅうせいどを、せつちすることに決めた。日本県ちじにたいし、五年かんのとくべつ予さんのへんせいを、めいじた』

などという読みにくい文章を、三大新聞の紙面は載せざるえなかった。

有名な国語学者の銀田ぎんたいち一秋彦あきひこがこれを批判して

「まるで日本人の大人の知性が、幼稚園児並に退化したみたいだ」とテレビで発言したが、翌日、国連治安憲兵隊によって連行された。以後、行方はわからない。

中学生から「外国語」として「セイヨウ星語」の履修が必修になり、日本語という「方言」を使っている日本の子供たちは、「自国語・標準語としての英語」の学習もしなければならなかった。英語の授業は従来の「国語」の位置づけだからだ。そして「従来の国語」すなわち日本語の授業は廃止された。

そんな子供たちが成人すればどうなるだろうか。日本語力の低下は必至であろう。そして日本語そのものが消滅してしまうのも、時間の問題だろう。

*

日本が「県」になったのに伴い、「従来の県」は「小県」と公文書では称されるようになっていた。東京都と神奈川小県の小県境には多摩川が流れている。その多摩川に架かる橋の一つに、彼はいた。橋梁にブルーのシートが見える。シートの中では、がっしりした体格のホームレスがワンカップの酒を、昼間から一人黙然と飲んでた。無精髭と髪を伸ばし、瞳には輝きは無く、精気のない無表情な顔で、ゴミ溜めのような場所で、脳細胞の活動を最小限度に縮小し、ただ呼吸をし、酒を飲んでた。

夢も希望も無い。復讐心も無い。使命感も無い。この日本は、いったいどうなってしまうのだろうか。いや、そんなことはどうでもいい。考えれば辛いだけだ。

やがて夜になり、そして朝が来ようとする直前、大柄なホームレスは食料を漁りに繁華街へ出かけた。若彦は、ようやく眠りについた歓楽街のゴミ箱の蓋を開け、残飯を探した。

食べ物の臭いを嗅ぎつけた野良犬が近づいてきた。若彦と野良犬

は互いに目で牽制しあつた。残飯を奪い合うライバルだからだ。若彦は、すでに野良犬と同じ行為を行う競争相手になつていた。

アジの干物が見つかった。魚が食べられるなんて、この生活になつてからこのうえない贅沢であらう。この久しぶりのご馳走にありつけると思つたのも束の間、一瞬の隙を突いてドラ猫が干物を奪つた。犬の方にはばかり注意を向けていたのは不覚であつた。靴が脱げるのも構わず、あわてて後を追つた。

お魚くわえたドラ猫を追っかけて、裸足で駆けていく、惨めなホームレス。

堕ちた。

野良犬とドラ猫と若彦。三者は同類であり、若彦はすでに人間としての自尊心を失い、もはや畜生と同じだった。

（続く）

その7 第四章 諸行無常 前編

第四章 諸行無常

新宿を歩く人の群れ、群れ、群れ。老人も子供も、男も女も、みな一様に首を前に突き出し、頸椎を前方に折り曲げた姿勢で歩いている。その視線は足下に落ちており、胸を張ってしっかりと前を見据えて歩く日本人は、誰一人いなかった。

背骨が曲がっている。姿勢が悪い。無気力と、倦怠感と、なげやりを絵に描いたような老若男女。それが、この時代の日本人の姿だった。

彼は新宿西口の歩道橋から、そんな人々の姿をつぶさに観察していた。

“プライドを失っている”

頸椎の歪みは、それが原因だと、げんだともより源田友頼は考えていた。

日本は活力を失っている。老いも若きもエネルギーを失っている。今のそんな日本を良くしたい。生き生きした日本人を取り戻したい。そんな思いが、友頼の胸に根を張っていった。

友頼が初の衆議院選挙に出馬したのは、ひどく寒い冬のことだった。この日の東京は早朝から雪が降り続き、雪に慣れない首都圏の人々は右往左往した。わずか五センチの“大雪”に、電車は運休止、道路ではスリップ事故が多発した。

そんな中、かつて西条隆をささえた選挙参謀たちが、事務所の玄関で靴に付いた雪を払いのけて入って来た。西条前首相の支持者たちが集まりはじめ、活気がみなぎってきたように思えたが、源田は期待よりも不安のほうが大きかった。

「先生の選挙は何度か経験しているが、オレ自身は初めてだからな」と言いながらも、選挙のノウハウについては素人ではない。

衆議院ではあっても「国会議員選挙」ではない。「県議会」と言

わなければならない。「国会」という言葉は使用禁止である。しかし日本人は皆、「衆議院」「代議士」という言葉を使い、誰も「県議会」とは言わなかった。

選挙カーのタイヤを、スタッドレスに履き替える作業が終わった。源田友頼はタスキを掛けて白手袋をするや、さっそうと身をひるがえしてスピーカーの装着されたワンボックス車に乗り込んだ。吐く息が白い。

政子は傘もささずに出陣を見送った。「げんだ」とペイントされた選挙カーが、激しい雪の中へと消えていく様を、政子は父の面影と重ねあわせていた。政治家源田友頼の初陣である。友頼の長い長い戦いのはじまりだった。

*

いつものように日が昇った。朝の到来とともに、若彦は日課である残飯漁りを終えて橋の下に帰る途中、電柱に針金で掛けられた一枚のポスターを目にした。

ポスター中央の男が、強い力を放つ目で自分を見つめている。若彦は、なぜか素通り出来なかった。

「お前、何やってるんだ。情熱も、怒りも、意地もないのか」

そう訴えかけてくるような顔だった。

「FFBプロレス、有刺鉄線デスマッチ」の大きな文字の下、おおたに大谷篤あつしの情熱的な目に、若彦は釘付けになった。

三日後、市立体育館の小さな野外駐車場に、そのプロレス団体はやってきた。舗装もされていない狭い駐車場に、薄汚れた折りたたみのパイプ椅子を並べ、リングを組み立て、塗装の剥げたマイクロバスの車内をレスラーの更衣室にして、興行は行われようとしていた。B級の娯楽格闘技である。

若彦は、あのポスターの目に吸い込まれるようにして、この場所にやってきた。しかしプロレスを観るような金はない。金も無いの

に来てしまった心理が、若彦は自分でも分からなかった。ただ、あの目の持ち主に一目会いたい、その思いだけが、彼をこの場に運んでいた。

ファンの群れの中、ただ呆然とその場に佇んでいた若彦は、不意に肩を叩かれた。

「花岡！」

あかつきさう
暁太郎だった。

「人違いでしょう」

若彦は、あわてて逃げようとした。ホームレスにまで墮落した自分の今の姿を、知った人間に見られたくはない。が、暁は若彦の腕をしっかりと掴んで離さなかった。

「花岡！」

彼は暁の声を振り切ることが出来なかった。暁の声には優しさがあつたし、今の苦しい若彦の心を受けとめてくれそうな響きがあつた。若彦は恥ずかしげに暁の顔を見た。しかし視線を合わせることが出来なかった。

暁は花岡道場の破壊と両親の収容所行きを知っており、ずっと気にかけていた。思いがけず若彦に会うことが出来て嬉しかった。

「よかった。生きてたんだ」

皮肉でも冗談でもない。国連直属軍に処刑されるようなことがあつても不思議のない世の中なのである。

「あの時は、本当にありがとう。もう感謝してもしきれない。會員みんなの命の恩人だよ」

「……」

若彦が何も言えずに呆然としてみると、暁は話題を変えた。

「試合観に来たんでしょう。チケット有る？」

若彦が首を横に振ると

「特別席を用意させるので、是非観てって下さいな」

「……」

「命の恩人のお出ました。さあ是非観てってくださいよ。お願いし

ます」

恥ずかしそうに横を向きながら暁は言った。

若彦は、全く思いがけない意外な言葉の連続に呆然としながら、暁の熱意に押されて特別席へと案内された。

「これが特別席か？」というような薄汚れたパイプ椅子に腰をおろした若彦は、会場を見渡した。決して裕福ではないと思われる人々、きれいとは言い難いリング。だが、人々の熱気が感じられるような雰囲気だった。

試合が始まった。

選手の技量は決して高くない。なんだ、こいつは？、と思えるようなレスラーも少なからずいた。だが不思議なことに、どのレスラーたちもエネルギーに溢れ、滲刺としていた。情熱的だった。闘魂に溢れていた。

「なぜ、彼らの目は、こんなにも輝いているのだろうか……」

なすこともなく無気力に日々を過ごしている今の自分とは、何と違う人たちなのだろう。若彦は、リングの上から観客席までを覆う、会場全体に漂う不思議な熱気に圧倒されていた。

このFFBというプロレス団体は、昨年夏に大谷篤が旗揚げした弱小団体である。大手老舗団体では活躍出来ない落ちこぼれレスラーたちが、それでも夢をあきらめきれなくて活動していた。才能が無い。大手団体をクビになった、あるいは入団できなかった。そんな男たちでも、プロレスにかける情熱だけは大手老舗のエリートたちに負けてはいなかった。そしてそんな雑草のような三流レスラーたちの、意地と、魂の叫びを観に、お客さんが集まっていた。テレビにも映らない、無名の、しかしガラガラと輝く何かを持ったその心意気が、少数ではあるが熱狂的なファンを獲得していた。

日本の敗戦後、自衛隊員たちは職を追われた。暁は職を転々としながら必死で食いつないだ。やがて偶然知り合った大谷とともにプロレスをすることで何とか生計をたて、そして傷ついた日本人のプライドに再び炎をつけるべく、熱い闘いを始めたのであった。

タイラー大統領の柔道禁止令により、多くの柔道家が宇宙レスリングに転向した。そんな中、暁は「日本人を勇気づけられる戦いをしたい」とキックボクシング選手と戦った。

組み技系格闘技だけをやってきた人間が、付け焼刃で打撃系格闘技を学んでも、所詮無謀な挑戦で、惨めにノックアウトされた。その試合は大晦日に日本中に生中継され、暁は大恥をかいだ。それでも暁はリングに立つことをやめようとはしなかった。華やかな注目される試合からは遠ざかったが、地方の小さな会場で、駐車場や原っぱで、血まみれになって戦い続けていた。そんな暁には、挫折を味わった者の強さがあつた。敗北も知らず挫折も知らず、ただまっすぐに上昇していったエリートには無い何かを持っていた。この団体に所属するレスラーは皆そうだった。何度も何度も挫折し、劣等感を嫌というほど味わい、敗北感に苛まれて来た者ばかりが集まっていた。

第一試合が始まってからすでに二時間。試合は残すところあと一つになっていた。メインイベントを前に、リングを囲んでいるロープが撤去されている。作業に従事するのはレスラーたちである。さつき試合を終えたばかりの者でさえも、ジャージ姿に着替えて撤去作業に加わった。やがてロープが外されると、レスラー兼作業員たちは有刺鉄線をリングに張り巡らしはじめた。この中で試合をするのである。触れれば当然切り傷をつくるだろう。

この日最後の試合が始まった。総帥の大谷が登場し、暁とタッグを組んでデスマッチを戦った。二人とも有刺鉄線とパイプ椅子の攻撃で血まみれになりながらも、目から炎が出るような顔をして暴れまわった。血と汗でくしゃくしゃになった顔で魂を表現する。観客は総立ちになり、この劣等生たちの熱い情熱に酔いしれている。

若彦は自分が恥ずかしくなった。いい加減で自堕落な自分の生き方を恥ずかしいと思った。この人たちは、何故こんなにも頑張れるのだろうか。この暗い世相の中、何故こんなにも元気を出せるのだろうか。

大谷が外国人選手からスリーカウントを奪い、リング中央で勝利の雄叫びを上げた。客席のボルテージが最高潮に達したまさにその時、突然一人の大柄な男が、客席からリング上に駆け上がった。

「私を、ここで、働かせてください！お願いします」

勝利のパフォーマンスをしていた大谷の前に躍り出た若彦は、衆人環視の真っ直中で土下座した。

「このリングで闘いたいのです。何でもやります、お願いします」

若彦は今、人生で初めて、自分の意志で自分の人生を切り開くべく、行動をしていた。大勢の観客の前で、恥も外聞もかなく捨てて、大谷の前で自分の意志を伝えていた。

思えば大学進学も、国連直属軍入隊も、自分の意志によるものではなかった。ただ流されるがままに生きてきたそれまでの人生。だが今、彼は自分の人生を自分の意志で選択し、生きていこうとしていた。

そんな若彦を目の前にして、試合を終えたばかりの暁が、若彦と一緒にになって大谷に土下座をした。

「この人をここに置いて下さい。心のきれいな、まっすぐな思いを持った柔道家です。大谷さん、お願いします」

と、何度も頭を下げた。自分のギャラを半分にしてもいいとさえ言った。

「自分なんかのために。なんで、そこまで…」

若彦は、涙が出そうになった。暁の情の厚さに、はじめて触れる気がした。

社長の大谷は快諾した。彼もまた、人情家だった。むろん利害計算もある。「不知火体育大学柔道部出身」という経歴は、弱小団体を率いる大谷にとって邪魔なものではなかったし、若彦の体格も申し分ない。しばらくはリングの組み立てや解体、会場の設営他、雑用を無給でこなし、それに耐えることが出来たなら、デビューをすることにになった。初任給はそれからである。

若彦は、みんなと一緒にマイクロバスで寝起きし、ツアーに帯同す

ることが許された。無精髭を剃り、伸びきった髪を切り、団体名の入ったＴシャツとジャージを与えられ、久しぶりにシャワーを浴びた。無給とはいえ衣食住を与えられ、ようやく人間らしい暮らしに戻った。

これからは日本中をドサ廻りする旅を続け、小さな体育館や駐車場、空き地や公園などにリングを設営し、椅子で殴られ、有刺鉄線に体を刻まれる生活が始まるが、そんなことは怖くはなかった。

＊

源田友頼は旧西条隆事務所の選挙基盤を受け継ぎ、代議士としての地位を一步一步固めていった。西条前首相の支持者だけでなく、新しい世代の支持者も増え、友頼を支えた。悲劇の宰相西条首相の娘婿が政界に入るや、その人気はうなぎのぼりだった。政子も夫が父の後を継いでくれるのは嬉しく懸命にサポートした。

友頼は今、重要な仕事に没頭している。「地頭警察隊」の創設である。世界から「国境」が消滅した。それにより海上では「排他的経済水域（ＥＥＺ）」という線も無くなった。境界線がなくなつて海は平和になったのかというと、そうではなかった。大陸の漁船も、半島の漁船も、列島の漁船も、獲りたい放題、やりたい放題で「力の強いものが魚を獲る」という状態になり、漁船は機関銃やロケット砲で武装するのが当たり前になってしまった。国境の廃止にとともにＥＥＺの消滅は、世界の海を海賊の海にした。

海上での漁船のいざこざに対して、海上保安庁だけでは手に負えなくなってきた。米軍が去り、自衛隊も解散したこの列島で、安全保障の任務についているのは「地球上唯一の正規軍隊」国連直属軍である。雑多な民族の混成部隊で、指揮権はニューヨークにある。国連直属軍は、日本の漁民の安全を守るために動いてはくれなかった。

しかし日本は、自衛隊はもちろん軍隊も持つことは出来ない。そ

ここで「地頭警察隊」なる組織を作り、安全保障をしようと友頼は考えた。地頭警察隊は陸海空の三隊からなり、飛行機やヘリや装甲車や護衛艦を所有するが、自衛隊でもなければ軍隊でもない。「警察組織の延長」である。「だから国連憲法九条には抵触しない」そう理論武装して創設を急いだ。

「自分のことは自分で守る。それが人間が生きていく基本である」友頼は常々そう思っている。

地頭警察隊の創設を、当初タイラー県知事は潰そうと思った。しかし海賊の横行に手を焼いていた県知事は、憲法違反の疑いを持ちつつ黙認した。

この動きを危険視する人々もいた。日本の中にもいた。しかし友頼はひるまなかった。

「自分のエリアを、他人は命を賭けてまで守ってはくれない」

街頭演説のたびに、そのことを訴えた。中央政府すなわちニューヨークは、日本人のことをどれだけ心配してくれるのか。日本人の生命財産を危険から守るには、その当事者でなければ、本気にはなるまい。

友頼の訴えは、多くの日本人の支持を集め始めた。やがて友頼を慕って来る人が増えていった。急速に支持者を増やしていった友頼は、異例の若さで日本県議会のリーダーとなった。日本人による選挙で選ばれた政治家のトップであり、一昔前なら「内閣総理大臣」と呼ばれる地位のほずであるが、今はニューヨークから派遣された県知事の下で、「日本県助役」を勤めている。

友頼の動きは世界中に刺激を与えた。各地で日本を真似て地頭警察隊を設立する動きが起った。とくに中東やアジアなど、かつての紛争地帯ほど、治安の悪化が深刻で、地頭警察隊の設立が必要だった。

「国境があるから紛争がある」というのは因果関係が逆で、「紛争があるから国境が必要になる」のかもしれない。

各国の武装解除から十年余、「国連だけが武力を有する」という

原則は、タテマエは生きているものの、徐々に徐々に骨抜きになっていった。
ニューヨークの軍は自分たちを守ってくれない。自分の地域の住民の安全は、自分で守らねばならない。現実的で切実な、生活に直結する問題だった。

*

黙々と下積みをこなしてきた若彦は、大谷からデビューを許された。デビュー戦を白星で飾った若彦は、その澁刺とした戦いぶりですすずつ人気を得ていった。FFBの観客は、目の前の試合に対して、ストリートに感情をぶつけてくる。あるときは汚いヤジであったり、またあるときは惜しみない拍手であったり、大きな声援であったりした。若彦はお客様の声援が嬉しかった。三十を過ぎて、やっと自分の居場所をみつけることが出来た。

デビュー戦から一ヶ月ほどたったある日、若彦にファンレターが来た。差出人は女性だった。

『はじめてお便りいたします。この前の浅草での試合を見て大変感動しました。』

実は私、レスリングをやっているのですが、最近スランプから抜け出せず、やる気がおきませんでした。何をするのも億劫で、投げやりで、どうにでもなれっていう気持ちでした。「これじゃいけない」って思って、何とかもう一度やる気を出そうとしていました。でも、自分を追い込めば追い込むほど、自分が価値のない人間に思えてきて辛いばかりでした。

そんな時、偶然花岡さんの試合を観たんです。なぜだか分からないけど、元気をもらいました。悩んでいた自分がウソのように、スーっと気が軽くなり、トレーニングを再開出来るようになりました。花岡さんの向こう見ずな強引なファイト、大好きです。最後のジャ

「マンはきれいでした。私は花岡さんの闘いを見て、初めて生きる勇気をもらいました。花岡さん。ありがとうございます。花岡さんのおかげで、まともな人生を送ることが出来そうです。本当にありがとうございます」

若彦は、何度も何度も読み返した。読み返すたびに呼吸が荒くなってきた。若彦は、自分など何の価値もない人間だと思っていた。そう言われ続け、そう叩き込まれてきた。花岡若彦は無能だと。生きている価値がないと。

しかし、そうではなかった。価値を見いだしてくれる人間が、この世の中にいたのである。自分が試合をすることによって、勇気づけられる人間が存在する。確かに存在する。それだけでも、その一事だけでも、自分という人間は、この世に生を受け、産まれてきたことに価値があったのである。

若彦は、周囲の人たちの温かさに今まで気がついていなかったことに愕然とした。そして、それを強烈に悔いた。思えば柔道時代、大勢の人たちの暖かい応援を受けていたはずだった。なぜ、その事に今まで気が付かなかったのか。

いつも貴彦のことばかり気にして、自分を大切にしてくれる人たちに思いを巡らす事をして来なかったではないか。その事を若彦は悔いた。

もう二度と、こんな後悔はしたくない。応援してくれた人に報いたい。自分はこの世に生を受けて以来、いったいどれだけ人のために何かをしようとしてきたのだろうか。いつも自分のプライドを保つため、自分の精神を平静に保つため、それだけで精一杯で、他人を思いやる事をしてこなかったのではないのか。

「今度は、自分が恩返しをする番だ」

若彦はそう決意した。

*

貴彦はニューヨークにいる。

国連政府の「宇宙レスリング振興推進委員」のメンバーである貴彦は、この地球上から不要かつ醜悪な格闘技を追放する答申書を作成していた。

これからの地球は、宇宙の先進星の人々から見て恥ずかしくないような文化を広めなければならない。醜悪な文化やスポーツを放置しておくことは、地球の星際的地位を著しく損なう。すでに伝統ある柔道も相撲も禁止した。宇宙レスリングの妨げになるからである。である以上、ヨーロッパのレスリング、すなわちグレコローマンとフリースタイルをも、禁止対象とせねばならない。ましてやプロレスなど論外である。うさん臭くて、残虐で、八百長で、これほど低俗な見せ物はあるまい。子供たちの教育上も良くないはずだ。

＊

友頼は東京にいる。

その源田友頼日本県助役の事務所に、足繁く通う熱烈な支持者がいた。彼は先代の西条隆のころからの支持者で若い頃はプロレスラーだった。アルマーニはまうち二浜内いのまたというのが彼のリングネームで、現役時代はアントキノ猪俣というアゴの大きな国民的スターと名勝負を演じたこともあった。

浜内は引退後、レスリングでオリンピックを目指す一人娘のコーチに専念している。今の彼の人生は、娘の存在が全てだった。子煩悩な熱血中年は、テレビカメラ前で

「気合いだあ！」

と叫び、奇矯なパフォーマンスをすることで一世を風靡していたが、本心は真面目で娘の事を心から心配する良き父親であった。

その浜内が、血相を変えて源田事務所に駆け込んできた。

「ウチのジムに閉鎖命令が来ました。レスリングも禁止されます」

源田事務所の面々は色めきだった。浜内は猛烈な怒りを抑えきれず、

顔を真っ赤にして目を剥いていた。

スランプから精神的に落ち込んでいた娘の恭子きょうこは、最近やっと元気を取り戻したばかりだった。これから、という時に、あまりに酷い出来事であった。もはや個人のレベルでは対応の仕様がなく、政治家の源田を頼るしかなかった。

しかし源田とて、圧倒的な国連地球政府の権力の前に、いったい何ができるというのだろうか。

「レスリングだけでなく、プロレスも潰される」

その情報も得た浜内は、大谷に電話をした。浜内と大谷とは旧知であった。落ち込んでいる娘を勇気づけるため、FFBを観に行つたのも、浜内が大谷の事をよく理解していたからだつた。

娘の恭子は、予想をはるかに超えるほど感激し、元気を取り戻した。とりわけ花岡というレスラーに惚れ込んだようだった。闘魂を取り戻してマットに復帰した恭子を見るにつけ、浜内は大谷に深い感謝の念を持った。

今、レスリングとプロレスは危機に直面している。この事を、いち早く大谷に伝えたかつた。

大谷への電話から十日後、浜内がFFBプロレスの事務所を訪れることになった。なんと源田友頼日本県助役を連れてくる、という。

源田とは、なんとフットワークの軽い政治家であることか。大谷は驚きを隠せなかった。

正午を少し過ぎたころ、源田と浜内がやってきた。大谷は二人と会談した後、所属レスラー全員を、このVIPともいうべき来賓に紹介した。

若彦にとつて、この源田と浜内との出会いは、人生を大きく変える邂逅となったが、この時は多数のレスラーたちの中の一人に過ぎなかった。

ただ、浜内は若彦にサインを求めた。

「娘から頼まれたので…」

聞けば、浜内の娘は若彦の熱狂的なファンだという。ファンレターも書いたという。

「機会があつたら是非お会いしたい、とまで言われましてねえ」

若彦は顔を赤くした。

若彦は、アルマーニ浜内という熱血漢に好感を持った。と同時に、あの竹取沖成の事を思い出した。竹取と浜内とは、風貌も雰囲気もまるで正反対だが、娘を愛するという一点において、瓜二つのようにだぶって見えた。同じ情熱を持っていた。

その竹取は、実の娘以上に可愛がっていた養女を、目の前で殺された。竹取の悲しみは、どれほどのものだったろう。若彦は呉尾鳩奈への怒りを思い出した。

だが、若彦には分かつていた。呉尾という個人の問題ではない事が。その本質は、タイラー政権であり「国連絶対主義」というイデオロギーだった。タイラー政権を倒さない限り、悲劇は世界中で繰り返されるだろう。

若彦にとっても、やっと得ることのできた自分の居場所が奪われようとしている。目の前の浜内にとっても、愛するレスリングを奪われようとしていた。

過酷な全国ドサ廻り生活の中、若彦は少しずつ社会への関心を取り戻していった。ツアーの合間には新聞を欠かさず読んだ。とくに源田に関する記事は目を皿のようにして精読した。やがて若彦の頭の中は、政治のことが多くを占めるようにさえなってきた。

若彦は政治と軍事に関する本も精力的に読み始めた。学生のころ勉強に熱心でなかった彼は、そのことを後悔するかのように、寸暇を惜しんで読書に励んだ。試合やトレーニングで疲れ切った体でも、多忙で過酷な毎日でも、ほんの少しの自由時間があれば古本屋へ足を運び、バス移動の間には必ず本を開いた。

「源田さんを助けたい。源田さんの政治活動に少しでも力になりたい」

若彦は、それが自分の人間としての使命だと悟った。人の一生には、何か一つ大きな役割がある。それが、まさにこの事ではないのか。

「源田さんを支援しなかったら、自分は一生後悔するだろう」
そんな思いがふつふつと沸いてきた。

若彦は今、人生で初めて、人のために尽くしたいと熱望した。心から熱望した。

「自分もただ、自分のためにだけ生きるのではなく、日本のために何かをしたい。少しでも力になれるのなら、出来ることをしたい」

それが、あの時、竹取香久恵の命を救えなかった、そして両親に多大な迷惑と心配をかけた自分の、人生の敗者復活戦かもしれないと思った。

源田の政治活動を支援する事が、若彦の人生にどういう意味をもたらすのか、正直分からないう。が、若彦には、ほんの一筋の、細かい光明が見える気がした。

無論、今の若彦は自分自身がやっと食えるようになったばかりの新米レスラーにすぎない。しかし、それでも彼は、自分の人生の復活を予感させる何かを感じた。

「一刻も早く、収容所にいる両親の救出に向けて行動を起こしたい」
やっとそう思えるような気がした。若彦は、源田友頼に「日本人の魂復興」の匂いを嗅いだ。両親だけでなく強制収容所にいる全ての人々を助けたいと、心から願った。

若彦が大谷とともに源田事務所を訪ねたのは、六月下旬のことだった。この日は土曜日のため試合は夕方に終わり、撤収作業等すべての仕事が終わった後、僅かな自由時間を得ると、急いで電車で飛び乗った。

名刺の住所を見ながら、下町の商店街を探し歩いていた。「鎌倉屋」という和菓子屋の看板が見える。おそらく古くから営業していると思われる店構えである。その隣に、源田事務所はあった。若彦

らが恐る恐る中に入ると、元気のいい女性が取り次ぎに出てきた。事務員かと思ったが、それは友頼の妻、旧姓西条政子であった。

政子は故西条首相の一人娘である。あらゆる分野の業務処理に極めて有能で、政治家源田友頼を陰で支えている実力者だった。

二人の来訪を聞いて、すぐに友頼が出てきた。

若彦は決して雄弁ではない。訥々と用件を語った。用件とは、国連直属軍に連行された両親のことである。

今まで数多くの柔道やプロレスの試合でプレッシャーを経験してきたが、それらとは異質の心理的緊張があり、若彦は額と掌に汗をにじませた。

自分とそれほど歳のかわない若手政治家の目は、人情とエネルギーに溢れていた。安物のソファで向かい合った二人は、お互いに関心を感じていた。

若彦は語った。全身全霊で情熱的に語った。自分がかつて国連治安憲兵隊にいたこと。竹取沖成、香久恵のこと。隊を脱走したこと。実家の道場の破壊と両親の強制連行。

そして大谷も語った。いよいよ彼のプロレス団体も潰されるだろう。下手をすればレスラーたちは全員収容所送りになってしまう。なんとかしなければならぬ。時間がない。

*

地頭警察隊設立の動きが世界中に広まるや、はじめは静観していたタイラー政権は危機感を持った。今はまだ合法的な政治活動の枠を越えていないが、このままではいつか必ずクーデターにつながるだろう、と日本県知事は思い始めた。

このころから、源田友頼は一つのキャッチフレーズを繰り返し使うようになった。「ワン・フリーズ・ポリティクス」といわれるこの戦術は、昔、二十一世紀初頭の総理大臣が得意とした政治手法である。

「改革なくして成長なし！」という短い言葉が平成の大衆の心を捉えたように、友頼の短い言葉もまた、この時代の日本人のハートを射止めた。

『いい国つくろう』

この言葉を、友頼は演説で意図的に何度も使い、選挙ポスターにも大きな文字でこれを入れた。「いい国つくろう」と胸に大きくプリントされたTシャツを発売すると飛ぶように売れ、「いい国饅頭」はヒット商品となった。おそらく今年の流行語大賞にもノミネートされるだろう。

しかし、国連政府およびタイラー日本県知事がこれを見逃すはずがなかった。「いい国つくろう」とは、「廃国置県」を断行した国連政府への挑戦である。この惑星は、地球全体が一つの国になったのである。源田は日本県を「国」にしようとしている。国をつくらうとしている。それは、許し難い反逆行為である。

友頼は普段からさまざまな情報を集めていたが、国連政府の不穏な動きをつかんだ。国連治安憲兵隊が友頼を逮捕することを検討している、というのだ。

「オレにいったい何の罪がある」

と思ったが、そんなことを議論している暇はないし、連中の前では無意味である。

ものごとに慎重な友頼は悩んでいたが、ついに決意を固めた。国連治安憲兵隊が彼の背中を押したともいえる。

友頼は考えている。義父の西条隆首相が心血を注いで作った国連政府の現実はどうだろう。はたして国連は人々を幸せにしたのだろうか。地球を代表する唯一の政府の存在は、人間に幸福をもたらしたのだろうか。地球に住むすべての人々にとって、国連政府を「自分たちの政府」と思い、「自分たちの代表」と感じうる気持ちでいるだろうか。

人々を幸せにしたい。国連を人々を幸福にするための機関にした

い。そのために、今、自分はやらねばならぬ。死ぬ気でやらねばならぬ。今やらねば、衆議院に出馬以来こつこつと積み上げてきた今までの成果が、一瞬にして無に帰してしまうのだ。自分一人だけが逮捕されて済むとも思えない。日本が自主独立へと向かう動きが、これから弾圧されるであろう事は、火を見るより明らかだろう。

「地頭警察隊には、先の戦争で実戦経験のある元自衛官が、いったい何人所属しているのか調査してくれ」

友頼は、意味深長な指示を出した。

（続く）

その8 第四章 諸行無常 後編

第四章 諸行無常 後編

＊

それは風の強い夜のことだった。

六月二日未明。台湾沖に鎮座する熱帯低気圧の影響で、日本列島にはなま暖かい強風が不気味に吹き荒れていた。

横田基地にも湿気をたっぷり含んだ澱んだ空気が居座っている。この横田は、かつての米軍基地で、日米安保破棄後は自衛隊基地となり、今は国連直属軍が使用している。

下士官である呉尾鳩奈が将校の部屋に出入りしていることは公然の秘密となり、上官も黙認していた。

主導権を握っているのは彼女のほうである。上から激しく攻められてジェームス・シーザー中佐が苦しげに唸り声をあげた。が、呉尾は容赦しない。毒蛇の刺青が彫られた大きな乳房が上下に揺れて、下から見上げているシーザーの視覚を強く刺激した。股間は爆発寸前に追い込まれていた。

と、まさにその時である。警報ブザーが鳴り響いた。

「敵軍襲来、敵軍襲来。全軍、戦闘配置につけ」

敵？

「バカな。敵なんているのか？敵って誰だ？」

横田にいる国連直属軍兵士の誰もがそう思った。

『桔梗の旗印が見えます。敵は惟任日向守^{これとうひゅうがめのかみ}。謀反にござる』

『光秀か。是非におよばず』

と、十六世紀の日本の武将なら言ったであろう状況と、事態は酷似していた。が、はるか後生の西洋人たちは、そんな言葉も故事も知らなかった。

あわてて結合を解いて服を着た呉尾とシーザーは、銃を携えて前線へ走った。すでに銃弾が飛び交っていた。

戦況はかんばしくない。不意をつかれた国連直属軍は総崩れになり、まともに応戦しようとする者は数えるほどしかいなかった。

「あんたたち、だらしないわよ」

呉尾はヒステリック叫び、最前線に飛び出した。

そこには、見覚えのある顔があった。軽蔑すべきあの男だ。自分の部下だった時とは全く違う鋭い目をしていた。

若彦は一瞬の躊躇もなく、素早く銃を操作した。

「花岡……」

その言葉も終わらぬうちに、若彦が放った銃弾が呉尾鳩奈の左目を直撃した。割れた頭蓋骨から、脳漿と破裂した眼球が飛び散った。

「クレオ！」

動転したシーザーは、呉尾の骸むくろに駆け寄った。情婦の仇に銃を向けようとした瞬間、腹部と胸部に七発の銃弾が突き刺さった。

「ハナオカ、お前もか」

ジェームス・シーザー中佐の最期の言葉だった。

国連直属軍基地を襲撃したのは地頭警察隊だった。クーデターである。

想定外の範囲外の出来事に、なすすべもなく基地は占領された。日本にある全ての国連直属軍基地で同じことが同時に起こった。国連兵士の多くは、抵抗することなく降伏し、拘束された。まぎれもなくクーデターは怒濤の勢いで成功しつつあった。

日本県知事ジョン・タイラーの執務室にも、地頭警察隊は迫った。「命は保証する。すみやかに投降せよ」

と、英語で呼びかけたが、ジョン・タイラーは抵抗し、銃撃戦になった。側近とともにピストルで応戦していたが、本格的な戦闘部隊にかなうわけもなく、やがて自らのピストルで自分の頭を撃ち抜いて果てた。

かつて敵味方として同じ戦場にいた若彦と暁は、今は戦友として同じ部隊にいる。ともに軍隊経験のある二人は、源田友頼の紹介で地頭警察隊に入隊し、今回の決起部隊に参加していた。

ひさしぶりの制服、ひさしぶりの戦争だったが、前回とは違い、若彦は戦うべき理念を理解していた。「戦うべきだ」という自分自身の強い意志があった。

決起部隊が次に向かったのは山梨県である。晴れた日には富士山が間近に見えるこの地には、国連政府による「思想矯正研修所」つまり強制収容所がある。日本だけでも七つあるという収容所には多くの“思想犯”が収監され、出所した者は数えるほどしかいなかった。果たして父は、母は、ここに居るのだろうか。

若彦ら決起軍が収容所に突入した。収容所の守備兵は、タイラー県知事の死を聞いてすでに逃亡または投降し、この施設を守ろうとする意思を失っていた。

施設内部に入った突入部隊は息を飲んだ。多くのやせ衰えた人々が、枯れ木のようになってそこにいた。みな白い服を着せられ、ラグビーのヘッドギアのようなものを頭に装着されている者も多数いた。幾つかの建物を搜索すると、ある一棟に強烈な腐敗臭がした。中に入ると、そこには多数の腐乱死体が放置してあった。その光景は舌筆に現し難い無残なものであった。隊員たちは、この目で地獄そのものを見てしまったことに、強い衝撃を受けていた。

救出された者の中に、花岡法子がいた。若彦の母は、眼窩を落ち窪ませるほど痩せていたが、命に別状はなく、検査を受けるために病院に収容された。

が、父の姿はそこになかった

源田友頼、日本県助役は、自らを「日本国総理大臣」と称し、国連からの独立を宣言した。その夜、神宮外苑で花火が上がったのは言うまでもない。

「日本国」の復活宣言は、日本人を勇気づけた。自分たちの国を取り戻した事は、集団的な熱狂を起こすのに十分なインパクトがあった。熱狂した人々は街に繰り出し、あるいは祝杯をあげ、あるいは集まって氣勢を上げた。

大阪では二十数年前にかつて見た同じ光景が、再び繰り広げられた。戎橋周辺はすでに歩くことも困難なほどの群集で埋め尽くされている。

ただ、あの時と違うのは、若者たちが手にしている旗が、日章旗であることだった。オリーブの葉の中に地球をデザインしたブルーの国連旗を手にした者はいなかった。国連旗をデザインした青いＴシャツを着ている者もいなかった。

すでに忌み嫌われてしまった「コクレン、チャチャチャ」に代わって、再び若者のハートを掴んだ「ニッポン、チャチャチャ」のコールが響きわたり、群衆は氣勢をあげていた。

そして日の丸を大きく振りかざしながら、戎橋から道頓堀へと飛び込む者が後を絶たなかった。二人、三人、そして一人、また二人。ヘドロの川へのダイブは、尽きることなく続いていた。飲食店の力での看板によじ登る者や、フライドチキン店の創業者の人形を川に投げ落とす者さえ現れた。

しかし浮かれてばかりはいられない。「独立の宣言」とは、国連からみれば「宣戦布告」である。再び、日本国と国連との戦いが始まったのである。

＊

「きみようむりゅうじゅにょらい 帰命無量寿如来、なむ ふかしぎ 南無不可思議光……」

浄土真宗の読経が静かに響いている。收容所で命を落とした花岡満太郎の葬儀は、小さな公営の斎場で営まれていた。

モミアゲがトレードマークの巨漢、たかみだいごろう 高見大五郎。

左からの強烈な投げがあった「黄金の左」こと宇和島博。うわしま ひろし

「憎らしいほど強い」と言われた北野湖次郎。きたの こじろう

満太郎が現役時代に、名勝負を繰り広げたライバルたちも参列し、故人の早過ぎる逝去を悼んだ。

収容所から出られたとはいっても、法子には住む家はなかった。花岡家は道場とともに取り壊されたままであるし、若彦は地頭警察隊の宿舎で生活している。貴彦は妻子とともにニューヨークにいた。貴彦とその妻子は、葬儀に出席していない。すでに国連政府と日本国政府が戦争状態にある以上、国連直属軍将校の貴彦が日本に来られるはずもなかった。たとえ来日出来たとしても、父親を死に追いやったともいえる貴彦には、兄と母に会わせる顔などなかったであろう。が、若彦は貴彦に来て欲しかった。国連直属軍事務所に葬儀案内のファックスを送った。日本に来て、母に謝って欲しかった。父の霊前で謝罪をさせたかった。しかし貴彦からは電話一本、弔電の一つもなかった。

「この親不孝者！」

かつて貴彦から投げかけられた言葉を、そっくりそのまま返してやりたかった。父親の葬儀に出ない、これほどの親不孝があるだろうか。

若彦の貴彦に対する引け目はいつの間にか消えていた。今あるのは憎しみと怒りである。

「父の仇を討つ」

まるで時代劇のようなセリフを、心の中で何回も反芻するのだった。

*

友頼は、日本だけでこの革命戦争を始めたわけではなかった。世界各地の反国連の地下組織に密書を送り、決起を呼びかけていた。ヨーロッパでも、アフリカでも、東南アジアでも、友頼の動きに呼応した。各地で国連基地は襲撃され、あっけないほどのもろさで、

基地を追われ、武器を奪われていった。そして次々に「国」を名乗り、リーダーは「大統領」や「首相」を名乗った。

後はアメリカ大陸だろう。今のところはまだ平静を保っている北米大陸に、もし、クーデターが飛び火すれば、ニューヨークの国連政府は苦境に陥るであろう。

時の国連大統領は、トーマス・タイラーである。トーマスはジョージの息子であり、選挙も無しに父親から指名され就任していた。もはや世襲である以上、「皇帝」と呼ぶほうが実態にあっているかもしれないなかった。トーマス・タイラーは、このクーデターの多発を根は一つと見ていた。すなわち源田友頼である。彼一人葬れば、それで全世界はおさまると見ていた。

「要は日本である。全力を挙げて日本を征伐せよ。聞けば、ヤツはあの西条の娘婿だという。そもそも国連の敵だったのだ」

国連直属軍は全力をあげて日本を攻撃すべく、太平洋に集結し、戦闘準備に入った。日本出身者は、攻撃部隊からはずす方針だったが、どうしても加えて欲しいと、異常な熱意で、異例の直訴をした軍人がいた。

貴彦である。上層部は彼の熱意に押され、また若い頃の対日戦争での功績もあり、なによりその能力に期待するところも大きく、攻撃部隊として大きな兵力をまかせた。

日本国内では、国連治安憲兵隊がいなくなった今、以前の社会に戻す政策が行われた。漢字使用制限の撤廃、大相撲の復活、その他伝統文化が次々と復興へと向かった。

政治的にも復活したものがあつた。その一つが自衛隊である。地頭警察隊は、「守護地頭自衛隊」と名称を変更し、かつての自衛隊と同じ役割を担うことになった。もちろん、その守護地頭自衛隊には若彦と暁がいる。日本人として、日本を守るために、二人は戦う決意に満ちていた。

＊

守護地頭自衛隊、すなわち日本軍と国連直属軍とが、グアム島に
らみあっている。総兵力は国連直属軍のほうが多いが、地球のあち
らこちらで反乱が起こっている状態では、兵力をグアムだけに割く
ことが出来なかった。しかも国連兵士は末端まで動揺しているらし
いという秘密の報告もあった。

南の島に朝が訪れた。徹夜でリーダーを監視していた担当者は、南
国の朝日を見て望郷の念を募らせていた。
その時、リーダーに不審な陰をみつけた。

「大量の飛行物体だ。しかもこちらに向かいつつある」

警報が鳴り響いた。彼はパニックになった。ハイテクに頼り切っ
ているリーダー担当者は確認する作業を怠った。決められたマニユ
アルに従うことしか彼の頭にはなく、実戦からは遠ざかり、“訓練
のための訓練”をこなすだけになりはてていた。

「敵襲、我が軍の十倍もの空軍機が飛来」

たちまちグアムにいる全軍に伝達された。明け方でまだ多くの兵
が寝ていた。

不意の敵襲で叩き起こされた国連直属軍兵士たちは恐怖にとりつ
かれ、指揮官はとっさに的確な判断が出来なかった。地球上で唯一
の軍隊として、地上最強の武力を保持している国連直属軍だが、そ
の質はいつのまにか低下していた。将校も兵卒も軍属も、その多く
が腐敗し、職務を遂行する意欲と能力が低下していた。

伝達を受けた部隊に、次々とパニックが伝播していった。

「殺される」

その恐怖心だけが、伝染病のように軍全体に感染し、一度浮き足
立った部隊は冷静さを取り戻すことが出来なかった。

パニックに支配されたグアムの国連直属軍は、なんと、戦わずし
て全軍が退却してしまった。兵舎のベッドには、兵士の私物が置き
捨てられたままだった。

国連直属軍は戦わずして逃走した。が、不思議なことに日本軍の戦闘機はやって来なかった。この日、はじめから守護地頭自衛隊は大きな動きをしていなかった。

では、あのレーダーに映った大量の飛行物体は何だったのだろうか？

レーダーが捉えた「機影」は、カモメの群れだった。数百羽のカモメが群れをなし、一斉に南の方向へ飛び立ったのだ。ただ、それだけの事だった。

「カモメを敵戦闘機と誤認識する」

常識では考えられない凡ミスである。最新のハイテク機器でこのようなことが起こるとは信じられないが、ハイテク機器だからこそ、ひとつエラーがあればかえってもろい。

そして、機械が集めたデータを見て判断を下すのは、結局人間なのである。機械はハイテクでも、それを使う人間の能力の低さが、そして臆病さが、この失態を引き起こした。国連直属軍は世界に大恥をさらしたのである。

この出来事が起こった後、国連直属軍では脱走があいつぐようになった。もはや国連直属軍による地球支配は終焉に向かうのではないかと、という、相場師が株の動きを読むような先読みで、脱走する兵士が増えていった。国連直属軍は急速に弱体化しつつあった。

一方で脱走しない兵士もいた。

「やはり国連は地球そのものだ」という考えで、国連直属軍の一員として、あくまで反乱軍を鎮圧していこうとする土気盛んな者もいた。貴彦もその一人である。優れた世界観、すなわち国連のみが武力を有する、という考え方に傾倒し、異をさしはさむ者を許してはならないと、強い使命感を持っていた。

カモメを敵と見誤った事件を境にして、タイラー政権は坂道を転げ落ちるように政権基盤を失っていった。各地で反乱が起こり、「国」を名乗り大統領を名乗る地域が続出し、驚くほど短期間で事態は急速に悪化した。

反タイラー連合軍は、西から追撃し、じりじりと包囲の輪を狭めるように兵力を展開した。追いつめられた国連直属軍の残存勢力は、なりふりかまわぬ戦略に出た。東太平洋のガラパゴス諸島に拠ったのである。ここガラパゴス諸島はゾウガメなど希少動物の生息地として知られている。国連直属軍は自然環境を人質にして自軍を守ろうとした。そのために、“自然保護団体”と“進歩的マスコミ”を利用しようとした。

反タイラー連合軍は苦慮した。環境保護団体やマスコミの影響力は思いのほか強く、それを無視しての作戦は、たとえ軍事的に短期の勝利を得ようとも、結局はタイラー政権を利するだけ、と考えられるからである。

実際には、国連直属軍がこの島にいること自体がすでに環境破壊である。大軍が駐留すれば膨大な量のゴミを出すからだ。だが、そんな事には、環境保護団体はいつさい触れない。ただヒステリックに単純な主張を繰り返すだけだった。

「この島で、生態系を壊すような兵器を使用してはならない」

壊れたレコードのように繰り返すだけだった。

この難局を打破すべく、一人の若者がガラパゴスに向かった。

彼の名は、源田常義^{げんだつねよし}。源田友頼首相の異母弟である。先の戦争で父親が戦死した時、まだ幼子だったこの愛妾の子は、孤独で過酷な少年期を過ごした。数奇な運命をたどったこの少年が十八歳の時、地頭警察隊が組織された。彼は迷うことなく入隊し、亡父の後を追うように戦闘機のパイロットとなった。

常義には、どうしてもやらねばならない事があった。

父の仇、タイラー政権を打倒すること、である。それが彼の人生の全てであった。

怨念、執着、復讐心。

彼の心に深く根ざした怨讐は、その人柄に暗い影を落とした。一方で、それは技術習得への強烈な向上心ともなった。誰よりも研究熱心な常義は、操縦技術に磨きをかけていき、短期間でその腕前は群

を抜くようになった。軽快で正確な技は、職人芸とも、神業とも言われる領域にまで達した。

基地内で彼の評判が高まると、上層部は常義の階級を引き上げた。短期間では異例の昇進である。そして空軍部隊の指揮官に任命すると、彼を太平洋の戦線に派遣する事を決めた。

行き先は、もちろんガラパゴスである。膠着した戦線を打ち破るには、もはやこの若者の“神業”に頼るしかないだろう。彼の腕なら、短期間で“動物を傷つけずに”敵を追い落としてくれるかもしれない。

空母が激しくゆれている。船酔いに弱い者にとっては地獄だった。双子のハリケーンが接近している。一つは九二四、もう一つは九五ヘクトパスカルという猛烈な低気圧は、風速九十六メートルの暴風と、一時間に三十四ミリの大雨をもたらしていた。

「あなた、悪い時に来たな。こんなのが二つも同時に来る事なんて滅多にねえのに」

この海域に詳しいペルー空軍カルロス・カジワラ大佐である。

「こんなじゃ、戦闘機を飛ばすだけでも危険過ぎる。ハリケーンが二つとも行つちまうのを待つしかねえ」

この日系ペルー人将校は、遅れてやってきた日本の若者をはじめから快く思っていなかった。

「しかも動物を守れ、だだよ。やってらんねえや」

カジワラ大佐は一ヶ月も前からこの海域に停泊している空母で、なすすべもなく愚痴ばかりこぼしていた。

反タイラー戦は、日本だけの単独行動では勝利はおぼつかない。他国の軍との連携は欠かせない。とくに地元海域に詳しい南米諸国との関係は重要であった。が、常義には分らない。目の前に怨讐の相手、父の仇がいるのである。

「時を待つしかねえ。あせっても、しゃあない」

常義には理解できない。

（時を待てば、事態が好転するとも思っているのだろうか）

常義には、そうは思えなかった。

（双子のハリケーンは、障害などではなく、チャンスではないのか
なぜ、そういう発想が出来ないのか）

しかも動物保護が必要条件ときている。この事も常義には理解で
きなかった。

（動物がなんだ！とにかく勝てばいいではないか）

翌日、源田常義の航空隊は単独行動を起こした。この悪天候を見
逃さず、荒海に大きく揺れる空母から、次々と艦載機を離陸させ、
一気にガラパゴスへ向かった。

視界の効かない風雨の中をマッハで飛翔し、強い横風を受けながら
旋回した。パイロットにとっては命がけのフライトである。が、た
とえ好天であつても、戦場で敵に向かうフライトが命がけであるこ
とには変わらないはずである、と常義は思っている。

国連直属軍のレーダー監視担当者は、またもや失態を演じた。今度
は、迫り来る敵機を、カモメの群れだと誤認識したのである。

警報の発令が遅れた。

ハリケーンをもつとしない命がけのパイロットたちは、無事敵上
空に到達し、決められた手順で淡々とミサイルと魚雷を眼下に撃ち
込んだ。

激しい雨と、猛烈な強風と、荒海の大きな揺れに加え、ミサイルと
魚雷が容赦なく人命を奪っていく。海水と雨水と炎が荒れ狂い、艦
は炎上した。

陸上でも、戦車を一台ずつ丹念に潰され、歩兵の宿营地も爆撃を受
けて大破し、陸海ともに国連直属軍は大打撃を受けた。

翌朝、風雨がやんだ。

すでに多くの艦隊を撃沈され、多数の航空機を失っていた国連直属
軍は、先を争ってガラパゴスから逃亡を始めた。国連直属軍が退却
をはじめると、護衛艦に待機していた若彦らの陸戦部隊は上陸を開

始した。敵の抵抗はない。小型ボートから降りると、若彦と暁はガラパゴスの砂浜を銃を持って走った。ひさしぶりに太陽が顔を出していた。その足下には、多数のゾウガメの死体が散乱していた。

はるか沖合に駆逐艦が見える。逃げ遅れた敵海軍であった。高倍率の双眼鏡で見ると、その船尾に扇子が高く掲げられていた。その下で、白いセーラー服の水兵が大きく手を振っている。

「この扇を撃ってみろ」とでも、言いたげに見える。

その駆逐艦は、空からの攻撃で撃沈されるかもしれない。だが、ほうほうの体で逃げているはずの敵が、憎らしいほどの余裕を見せつけている。

その時、若彦の隣にいた梨野与一^{なしのよいち}という若者が、突然連隊長の前に進み出た。

「自分が、撃ち落としてみせます」

そう言うやいやな、携帯式ロケット砲を左肩にかついで、波打ち際に片膝をついた。寄せては返す白い波が、梨野の足下を濡らす。彼は扇に狙いを定めた。

梨野与一の肩の上から、轟音とともに発射されたロケット弾は、白い煙を引いてまっすぐに進んだ。やがて敵艦の船尾に掲げられた扇子を射落とし、背後の機関銃砲座に着弾し爆発を起こした。

「やったぜ」

まだ二十歳の梨野は顔を紅潮させ、親指をたててガッツポーズをつくった。

源田常義の航空隊は、見事ガラパゴス諸島の攻略に成功した。この奇跡的な大勝利に世界が酔いしれた。作戦を指揮したツネヨシの名は世界中に広まり、彼は一躍スターダムに上り詰めた。

特に日本では、その涼やかで中性的な美顔は、年配女性を中心に熱狂的なブームを巻き起こした。イケメン自衛官常義は、日本の中高年女性の間で「ツネ様」と呼ばれ、女性週刊誌で大きく取り上げられた。人気アイドル歌手の白川静香^{しろかわしずか}との熱愛も報道され、電車内の

吊り広告には、「ツネ様、静香」の大きな文字が揺れていた。ただし一般民衆の人気とは別に、今回の常義の奇襲は、国際政治に大きな波紋を投げかけていた。それは、おびただしい数のゾウガメが死んだからである。希少動物保護に全く配慮をしない常義の独断は、兄、友頼を政治的に窮地に追い込む可能性もある。源田友頼首相にとってガラパゴスの勝利は、嬉しくもあるが、同時に苦々しくもあつた。

*

政局の激変は北米大陸に波及した。アメリカでの反タイラー運動は、国連政府を決定的に不利な立場に追い詰めた。

当初、ヨーロッパやアジアでクーデターが多発しても、北米の大地は静まりかえっていた。が、それは国連政府樹立時に敗戦を経験したこの大陸の住民たちが慎重になっていたに過ぎない。合衆国の主権回復と、アメリカ文化の拠点ニューヨークの街の奪回は、実はアメリカ市民の悲願だった。

この時のアメリカ県助役は、元ハリウッドスターのシルベスタ・シュワルゼネッガーである。シルベスタ・シュワルゼネッガー助役は、俳優時代に「朝日の将軍」という戦争映画で、軍の司令官を演じたことがある。その作品では、粗野な田舎者だが豪快で野性味のあるキャラクターが話題になった。

そのシルベスタ・シュワルゼネッガー助役が、かつて演じた司令官さながらにクーデターを敢行した。すでに地球上の多くの地域で行われてきた政治現象に過ぎなかったが、ここはアメリカである。

タイラー国連大統領は真っ青になった。今、国連直属軍の主力は太平洋に出払っている。源田常義の軍と死闘を演じ、釘付けになっている。この状況で米軍が国連政府に反逆すればどうなるか。国連政府の所在地はニューヨークなのである。

生命の危険を感じたタイラー以下、国連政府高官たちは、あわて

て脱出するしかなかった。米軍が来る前に、この危険な敵だらけの北米大陸を離れなければならなかった。

花岡法子は名古屋の親戚の家で暮らしていた。月曜日の夜十時は必ずバラエティ番組を見る。今夜も人気アイドル五人組が料理を作っていた。長居正弘ながいまさひろの軽妙なトークの中、木原拓也きはらたくやと加藤慎悟かとうしんごの二人が、料理対決で稲毛吾郎いなげごろうと草野剛くさのこうに勝利し、ゲストの宝塚女優、白木瞳しるきひとみから祝福のキスを受けようとしていた。

と、その時であつた。突如として電子音が鳴り、字幕が現れた。

「ニュース速報。タイラー国連大統領、ニューヨークから退去。大統領職放棄」

タイラー族の「都落ち」である。

翌朝、法子は親戚とともにテレビに釘付けになった。食い入るような目でニューヨークからの中継を見つめていた。

国連直属軍が撤退した後、シルベスタ・シュワルゼネッガー率いる米軍海兵隊が悠々と市街地に入ってきた。ニューヨークカーたちは、熱狂的に祝福し、彼らを出迎えた。高層ビルの窓からは、膨大な量の紙吹雪が舞い、大通りの歩道には星条旗を手にした市民で溢れた。道行く車はクラクションを嬉しそうに鳴らし、祖国復興を祝った。

やがて、全世界のテレビ映像は、セントラルパークからの生中継に集中した。公園には大勢の人々が集まり「ユー・エス・エー」の大合唱とともに拳を突き上げていた。

この場所には、ジョージ・タイラー前国連大統領の巨大な銅像が聳えている。米軍兵士たちは、この銅像に太いロープを巻き付けている。その作業が終わると、ロープは戦車に繋がれた。

米軍戦車にロープを牽かれたタイラー像は、右手を上げたまま、ゆっくりと前方に倒れていった。世界中を監視しているかのようにだったジョージ・タイラーの巨大な銅像が、大きく傾いた直後、USACコールは「うおお」という一段高い歓声に変わった。

倒されたタイラー像は、そこにいた多くの市民らによって足蹴にされた。十歳くらいの少年が、両手に持ったスリッパでパタパタと顔を叩くシーンは、数億人の脳裏に焼き付いて離れなかった。

＊

ついに国連地球統一政府は瓦解した。その時点で、法的にはこの軍隊は国連直属軍ではなく、「トーマス・タイラーの私兵」という存在になった。もはやこの軍に従う法的根拠はなく、脱走する者を止めるすべもなかった。

タイラー軍は、西太平洋を放棄し、その海域で日本軍と対峙していた兵力は、トーマスらと合流した。彼らは南米大陸を南下して抵抗し続けたが、次第にその数を減らしていった。兵力が少なくなつた以上、分散しては各個に撃破されてしまう。世界中のタイラー軍は、急ぎ集結していった。ひとかたまりになることで、戦力の温存を図った。そして、生き残りのために一気に南米大陸の端まで退却して態勢を整えることにした。

貴彦は脱走しない。多くの同僚や部下や上官が脱走しても、貴彦はタイラー軍に踏みとどまった。法子は、はやく脱走して欲しいと願っていたが、貴彦にはそんな気はさらさらなかった。

「あんな連中に降れるか」という腹であり、低級で狭い視野しかもたない日本人に、自分のような広い宇宙を見てきた頭脳の優秀な人間が膝を屈するのなど、プライドが許さなかった。ここで降っては貴彦の人生は存在意義がなくなってしまう。最後まで低能な地球人どもに、自分の優れた力を見せ付けて、目を醒まさせてやらなければならなかった。

そうしなければ、徴兵されてからの後の人生が、全て否定されてしまう。プロ野球オーナーにまでなった人生をリセットされた国連直属軍での生活。それを全否定されることだ。それは貴彦にとって耐

え難いことだった。

貴彦は、タイラー元大統領と、最後まで運命をとにもする覚悟を決めた。

*

トーマス・タイラーは、少数の軍しか寄せ付けない険しく狭い海峡に布陣するしかないと判断した。ひたすら南下し、南極大陸にほど近いマゼラン海峡についた。この狭隘な地形で決戦し、起死回生を狙うしかあるまい。この地で天才的な敵将、源田常義の命を絶つ事が出来れば、戦局は反転するかもしれない。残された方法はそれしかなかった。

マゼラン海峡は、地形も気候も厳しく、大軍よりも少数の軍に有利だとトーマス・タイラーは判断した。

敗れば逃げる場所は南極大陸しかない。しかし南極で生き延びるだけの装備は持っていない。まさに背水の陣、いや「背氷の陣」といえるだろう。最後の決戦になるはずだ。

高緯度の弱々しい太陽が、厚い雲の向こうにかすかに見える。初夏だというのに陰気なこの狭い海峡を挟んで、確執を続けた双子の兄弟が対峙している。

若彦と貴彦。

民族の誇りか、それとも地球人としての団結か。

二十年以上前から繰り返し議論されてきたこの論争は、ここへ来て、大陸の南端に集結した軍事力に集約されたといえるだろう。

海峡に集結した両軍兵士たちは、極度に緊張を高めていた。死ぬも生きるも、この一戦。もし、源田常義の生命を奪えれば、寝返って去って行った者どもも、再び国連の旗の元に集まり、ニューヨークを奪回出来るように風向きが変わるかもしれない。

日の出とともに、決戦の火蓋は切って落とされた。戦闘機が轟音

をたてて狭い空域を飛び交い、爆発音が途切れることはなかった。水柱が林立し、炎と熱風が渦を巻いた。鉄板が破れ、人の一部分が飛び散った。

戦況は一進一退である。勝敗の行方は分からない。

激しい戦闘の真つ最中に、貴彦は部下を呼び出した。呼び出されたのは韓国人のペ・ホンマンという下士官だった。二メートルを超える巨体でありながら、眼鏡をかけた貴公子のような風貌は「微笑みの巨人」とあだ名されている。彼は今、持ち場を離れる事などとても出来る状況にないのに、呼び出しをくらっていた。航空機のエンジントラブルが立て続けに起こり、貴彦はいらだっていた。

「ちゃんとメンテナンスしてないのか。この、うすらトンカチ！」部下にとっては煙たい存在の花岡という上官は、そういうトラブルの発生が、最も許せなかった。

「怠慢ではないか！」

貴彦は部下を怒鳴りつけた。そういう事をもっとも嫌った。

が、兵たちの怠慢によるものではなかった。タイラー軍はニューヨーク退去以来、全な補給基地に恵まれなかった。物資も補給もままならず、十分なメンテナンスが難しい状況にあった。

（この人は、現場の状況がわかっていない）

ペ・ホンマンは眉をひそめ、だが何も言わずに、ただ言葉の嵐が通り過ぎるのを待っていた。

（安全な部屋で、パソコンやってるだけのヤツに、いったい何がわかる。まったく、やってられねえや。だから日本人は嫌いだ）

ペ・ホンマンは秘かにそう思いながら、しかし従順な顔をつくって面従腹背を貫きながら、再び砲弾飛び交う前線へとその巨体を運んでいった。

一進一退の攻防がすでに六時間も続いていた。勝敗の行方は未だ分からない。

陽が西に傾きかけたころ、若彦らの陸戦部隊は、海峡の狭隘部で敵艦隊を待ち伏せすることを命じられた。戦車を海に向けて配置し、ロケット砲の陣地を作った。

若彦と暁は待った。ひたすら待機した。敵の艦船が、目の前の狭い水路を通過するのを。その時が来れば、側面から砲撃し撃沈するのが任務である。

若彦は、この日のために砲撃訓練に励んできた。日本人の魂を奪ってきた、そして世界中の人間を不幸にしてきたタイラー族を駆逐するため、砲撃技術を磨いてきた。もう二度と暗い時代に後戻りさせてはならない。そんな若彦の気持ち、訓練を充実させてきた。待つこと一時間弱。ついにその時が来た。敵の艦隊が、上空の守護地頭自衛隊戦闘機と砲火を交えながら、こちらに向かって進んできた。

「撃ち方、はじめえ」

ロケット砲の発射音が耳をつんざき、火薬の臭いがあたり一帯に立ちこめた。若彦らの部隊が撃つ砲弾は、海峡を通過しようとする敵艦隊に命中し、火災を起こした。

が、敵も黙ってはいない。戦艦の主砲から繰り出される艦砲射撃は、若彦らの陣地を容赦なく襲った。砲台が吹っ飛び、人の足が空中を舞い、もがれた腕が地にころがった。

「こんな所で死んでたまるか」

若彦は、胸のポケットを押さえた。中には浜内恭子からもらったお守りと、彼女の写真が入っていた。

不気味な飛翔音が響き渡った。

「来たぞ」

部隊はいつせいに塹壕に身を隠した。猛烈な爆発が起こり、土を巻き上げた。

ふと見ると、三メートル先に暁が倒れている。

「あかつ……………」

若彦は絶句した。が、戦況は逼迫している。感傷的になっている

暇はなかった。暁の身を案じながらも、訓練で数限りなく繰り返してきた作業に黙々と取り組んだ。今はそれしかなかった。若彦は集中していた。とにかく今は、やるべき事に精神を集中し、やるしかない。それが彼の悔い多き半生のやり直しだった。

中型の巡洋艦が、目の前を通過しようとしている。主要な敵艦の姿を、写真で全て記憶してきた若彦は、目の前の敵艦を見て、全身が奮い立つのを感じた。

「旗艦きかんロクハラ号だ！」

タイラー軍の旗艦である。見た目は地味で、どちらかというと目立たない艦だが、そこに最高司令官が乗船していることを、若彦は知っていた。

若彦は照準を定めた。

あの旗艦には、タイラー軍全体を統括する大型コンピュータが搭載されている。敵軍首脳がいる。そして、情報を集約し伝達する頭脳の役割を果たしている。

「なんとしても撃沈したい」

若彦の執念が砲弾に乗り移ったとしかいいようがない。

大地を揺るがす大きな音とともに、「運命の一弾」が、マゼラン海峡の空を突き進んでいった。

時刻は午後四時三十七分だった。花岡若彦が放った砲弾は、旗艦ロクハラ号の最高司令室に着弾した。

「若彦の一弾が歴史を変えた」というのは大袈裟かもしれない。若彦が撃たなくても、他の兵士がその役割をになったかもしれない。だが、偶然にも、歴史の転轍機の役割が若彦にまわってきた。

艦隊の最高首脳部に死傷者が出た。トップの人物の多くが死に、あるいは重傷を負い、動けなくなった。司令室の大型コンピュータは破壊され、システムはダウンした。

この一弾を境に、戦局は大きく動いた。タイラー軍最高司令部は、指揮の機能を失った。指揮命令システムを失ったタイラー軍は組織的な戦闘が出来なくなった。互角だった戦況の均衡が破れ、急激にタイ

ラー軍は勢いを失った。

末端の兵員たちは健在で、懸命に戦闘を続けているものの、情報が伝わって来ない。コンピュータシステムはダウンし、敵軍の状況が把握出来ない。司令部との通信も出来ない。まさに目隠しをされた状態に陥り、部隊間の連携もとれなくなり、軍は支離滅裂になった。やがて混乱をはじめ、兵器の故障も倍増し、ついには壊滅的な打撃を受けた。もはや戦争は一方的な展開になり、タイラー軍は空母も戦艦も艦載機も、その数を減らしていった。ひとたび押され始めたタイラー軍は、再び戦況を盛り返すことはなかった。あつという間に総崩れになっていった。

破損した戦闘機を空母に不時着させた貴彦は、甲板上に降りた。そこに対空砲を見つけるや、今度はそれで日本の戦闘機を撃ちまくった。勝敗のゆくえはほとんどついていながら、不必要なほど敵戦闘機を狙撃しつづけた。

やがて対空砲が被弾し、使用不能となり、貴彦自身も肩を負傷した。

「もはやこれまで」

貴彦は甲板上にあった鉄の鎖を、自らの体に巻き付けた。それもグルグル巻きにし、その先に鉄の破片を錘としてつないだ。

今まで何をやっても優秀だった自分。それが、無能な地球人ども、無能な日本人どもに敗れた。壮大な宇宙を知らないで、古臭い前時代の愛国心に凝り固まった化石人間に降伏するなど、貴彦のプライドが許さなかった。そんな事はあってはならないはずだった。

貴彦は、甲板の一番手前に仁王立ちになるや、カッと目を見開いて敵戦闘機の飛び回っている空を見上げた。

「見るべきものは、すべて見た」

そうつぶやくと、両足で跳躍し、虚空へとその肉体を運んだ。

白い波しぶきとともに、花岡貴彦の体はマゼラン海峡へと消えていった。

かつて世界中に権勢をふるったタイラー一族は、次々と海中にその身を投げ、その権力の終焉をむかえつつあった。この地球という一つの惑星を手中におさめ、世界人類統一政府のトップに君臨した男も、ついに最期の時を迎えた。トーマス・タイラーは甲板上でしばらく空を見上げていたが、やがて海に向かって身を投げた。

五歳になるトーマスの孫も、その祖母に手を握りしめられながら甲板に立った。

「おばあちゃん、これからどうするの」

「波の下にも、ニューヨークがあるのでしょ。これから一緒に行きましょう」

敬虔なプロテスタント信者であるトーマスの妻は、たった一人の孫とともに十字をきった。

「主よ……」

紅葉のような小さな手を合掌させ、二人は冷たい海へと消えていった。

誰一人、生き残ろうとしている者はいなかった。女も子供も、手にとりあつて、甲板から海へ身を投げた。南極に近い冷たい海は、激しく波打ち、白いしぶきをあげながら、多くの命を飲み込んでいった。

タイラー軍は、わずか一日の戦闘で潰えた。

時に、宇宙六年十二月二十二日、夏至。

南半球では昼が最も長いこの日、高緯度のマゼラン海峡では午後八時を過ぎても太陽は天にあつて、戦闘機の残骸を照らしていた。

（続く）

その9 最終章

最終章

「そろそろ引退しようと思うんだ」

「えっ」

「もう四十過ぎだし、体中傷だらけさ。若手も育ってきてるし。体力があるうちに次の人生にチャレンジしたいんだ」

「そう…。あなたが決めたことだもの。長い間、本当にお疲れ様」

恭子は心から夫をねぎらった。

この十数年間、夫は本当に頑張ってきた。感謝の気持ちで一杯だった。

若彦は戦争が終わると守護地頭自衛隊を退官し、再びリングに立った。やっと見つけた自分の居場所。その居場所を守り抜く戦いに勝利した後は、解放されたようにプロレスに専念した。以来十年以上にわたって体中傷だらけになりながら、多くの人たちを励まし続けてきた。

多くの熱狂的なファンに囲まれ、チャンピオンベルトも獲得し、人気プロレスラーとして一目置かれる存在になっていた。社会人としてようやく成功者になることが出来た若彦は、プロレスを心から愛していた。

妻恭子との間に二人の娘を授かり、充実した忙しい毎日を送っていた。そんな彼も不惑を過ぎた。プロレスラーという職業をいつまで続けるか、その転機を迎えていた。

「引退後は花岡道場を再建したいと思ってるんだ」

「えっ。柔道…」

恭子は夫の意外な言葉に思わず息を飲んだ。

夫は柔道が大嫌いだった。テレビで柔道が映ると、いつもチャンネルを換えてしまう。ほがらかな人柄ではあるが、こと柔道に関し

てだけは、屈折した心理が未だ消えていなかった。その事を妻はよく知っていた。

「オレは、プロレスが大好きだ。自分の人生を切り開くことが出来たのはプロレスのおかげだ。だけど、そもそもプロレスをすることが出来たのも、柔道という下地があったからだ。柔道をやってなかったら、オレはプロレスラーになることもなかったよ」

若彦は、柔道に恩返しをしたい、という。

「道場には、柔道場とレスリング場を併設したい。そしたら恭子。レスリングのコーチをしてくれるか」

予想外の言葉の連続に、恭子は言葉を失った。が、その目はキラキラと輝いていた。無言のまま妻は、こっくりとうなずいた。

*

桜が咲いている。満開のソメイヨシノが見る者の目を楽しませていた。戦争が終わって平和が続いている。世界は一つになった。ずいぶんといい世の中が来たものだ。海岸の釣り人が、柔和な顔で缶ビールを飲みながら釣り糸を垂れていた。穏やかな春の日差しに、桜の花びらが、ひらひらと舞っていた。

釣り人は竿を持ったまま、ぼんやりと空に目をやった。夕暮れの博多湾が見える。目の前には青い空が広がっていた。

釣り人が竿をたぐったその瞬間、紫色の閃光が玄界灘を切り裂いた。その光は異常だった。

その光は見たこともない紫色の尾を引き、聞いたこともない轟音とともに、猛スピードで海面に降下していった。

着水地点は博多沖。多くの船舶が往来する博多湾の真っ直中に、真っ黒い巨大な物体が四つ、不気味に浮かんでいる。地球のものとは思われない漆黒の巨大な物体に対し、海上保安庁の巡視船も、守護地頭自衛隊のイージス艦も、F15イーグル攻撃機も、ただ遠巻きに見守っているだけだった。北九州一帯が騒然となり、電話回線は

パンクし、ケータイも固定電話もマヒ状態に陥った。テレビは続々と通常番組を中止して特番を組み始め、ジャーナリストやカメラマンたちは功名を求めて殺到した。

四つの黒い巨大物体は「軍艦」だった。強力な破壊力、機動力、敵探索システムを備えた恐るべき軍事要塞であつた。

米軍筋によれば、この宇宙人は銀河系から七万五千万光年離れたゴルモン星という惑星からやって来たという。

地球にやってきた艦隊の提督はショウリュウ・アサと名乗る男で、母国のライフビ・ハーン皇帝からの親書をたずさえているという。激動の歴史の幕がきつておとされたという予感に、世界中が震撼した。

すでに国連政府では大統領職は廃止されている。各主権国家による自治が認められた上での連邦制となっていた。行政の長は「執権」と呼ばれ、各国の利害を調整するのが主な役割である。執権自身は、軍隊はおろか強力な権力はほとんど持っていない。

「国連直属軍」も廃止された。軍隊は、それぞれの国が持っている。その上で、国連政府が必要に応じて国連軍を招集し、それに各国軍が参加するのである。

ゴルモン星の来襲に、久しぶりに国連軍が招集された。日本政府をはじめ、アメリカ、フランスなど、二十ヶ国以上が、早速国連軍への参加を了承した。

地球の危機である。

ゴルモン星は、かつて通商を求めたセイヨウ星などとは大きく違っていた。

「属国になれ。さもなくば兵を用いる」

これほど強圧的な惑星が、未だかつてあつただろうか。

時の国連政府執権は、西条時胸さいじょうときむねである。あの西条隆首相の孫にして、源田友頼の妻、政子の甥であつた。彼は日本国の総理大臣でもなけ

れば国会議員でもなかった。そのような、国政に関わりを持たない人物だけが、国連執権になることが出来るのである。

ニューヨークにブルーの国連旗がはためいている。オリーブの旗のもとに、地球中の国々から軍が集まってきた。

オレたちの地球を守るために。

それぞれの民族の誇りを胸に、それぞれの固有言語を誇りに、それぞれの地域文化を誇りに、そして地球という星の誇りを胸にして西条執権のもと、地球防衛軍が組織された。ゴルモン星ライフビ・ハーン皇帝との交渉が決裂するや、ヒューストンの空軍基地から、次々と大気圏外へと戦闘機が飛び去っていった。

テキサスの強風が、星条旗と、日章旗と、ユニオンジャックと、青い国連旗を大きくなびかせていた。

「宇宙人の侵略に耐えられる地球をつくるために」

セイヨウ星からリーペ艦隊が来てから、その思いは人類共通のものになった。

西条隆も、小久保通も、ドラゴンホースも、そして源田友頼も。みんな、その熱い思いを胸に、命を張ってきたのである。

意見の食い違いもあり、深刻な対立もあった。多くの血が流れ人命を失った。しかし、明日の地球を良くするために、という思いは同じだった。ただ、方法論が違っていたにすぎない。あのジョージ・タイラーでさえ、初めから私利私欲で独裁政治を行ったわけではなかった。

多くの先人たちが、命を賭けてつくった国連政府。国連地球統一政府とは、まさにこの日のために存在するのである。今、この時に防衛線を死守しなければ、何のための国連地球統一政府か。

一機、また一機。ヒューストンからも種子島からも、戦闘機が大気圏へと飛び立っていく。それを見守るかのように、オリーブの旗がはためいていた。

国連軍は奮戦した。七ヶ月後、ゴルモン星軍は太陽系を去った。

＊

歳月が流れた。

柔道とレスリング。二つの稽古場が併設された珍しい道場は、大いに繁盛した。夫は柔道を、妻はレスリングを指導し、ともに金メダリストを輩出した。選手時代には獲得出来なかった金メダルを、指導者として後進に取らせることが出来た事は、何よりも嬉しい事だった。

若彦が書斎でパソコンに向かっている。その脇に恭子がそつとコーヒーを置いた。夫の頭は白髪が目立つようになっていた。

「あいつからメールが来たぞ」

「元気にしてるって？」

「ああ」

『明日一番の定期シャトル便で、学生をそつちへ行かせるのである。あのリーペ提督のひ孫にあたる若者だ。浦賀の海も見てみたいそうだ。柔道のほうも、なかなかの腕前だし何より稽古熱心だ。こちらでは、柔道の競技人口も少しずつ増えてきた。まだまだ宇宙レスリングが幅を利かせているけど、遠い惑星の新しい競技ということに興味を持つ若者も少なくはない。』

道場もマスコミの取材を受けたりして注目されはじめている。あと十年もすれば、もっと広まるだろう、いやオレが広めてみせる。

地球もいいけど、セイヨウ星の暮らしが気に入った。こっちは柔道を普及させることが、今のオレの生き甲斐になった。いつかは宇宙選手権の正式競技に、柔道が採用されることを願っている。それが親父へのなよりの罪滅ぼしだと思っている。

死に損ないの貴彦@花岡道場セイヨウ星支部』

若彦はノートパソコンを広げたまま、窓の外に目をやった。

暑さ寒さも彼岸まで、とはよく言ったもので、昨日までの残暑が嘘のように、さわやかな涼風が網戸から吹き込んできた。

その風の向こうには、赤とんぼが気持ち良さそうに飛んでいる。

「これからは、いい世の中が来るだろう」

若彦にはそう確信出来る何かを感じていた。

それは、激動の時代を命がけて生き抜いてきた若彦だからこそ、感じる事が出来たのかもしれない。

（終）

その9 最終章（後書き）

この物語はフィクションです。登場人物はすべて架空の人物であり、
実在しません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9978k/>

国連地球統一政府（第113回コスモス文学新人奨励賞受賞）

2010年10月10日01時38分発行